

少将滋幹の母

谷崎潤一郎

青空文庫

その一

此の物語はあの名高い色好みの平中へいじゆうのことから始まる。

源氏物語すえつむはな末摘花はなの巻の終りの方に、「いといとほしと思おほして、寄りて御おんすゞり硯いの瓶かめの水みづに陸奥紙みちのくがみをぬらしてのごひ給へば、平中がやうに色どり添へ給ふな、赤からんはあへなんと戯たはぶれ給ふ云々うんぬん」とある。これは源氏がわざと自分の鼻のあたまへ紅べにを塗ぬって、いくら拭ふいても取れないふりをして見せるので、当時十一歳の紫むらさきの上うへが氣きを揉もんで、紙かみを濡ぬらして手てずから源氏の鼻のあたまを拭ふいてやろうとする時に、「平中のように墨すみを塗ぬられたら困こりますよ、赤いのはまだ我慢まんしますが」と、源氏が冗談じやうだんを云うのである。源氏物語の古い注釈書の一つである河海抄かかいしように、昔、平中が或る女のもとへ行いって泣なく真似まねをしたが、巧うまい工合くわいに涙なみだが出でないので、あり合あう硯すゞりの水みづ指さしをそつとふところに入れて眼めのふちを濡ぬらしたのを、女が心こころづいて、水指みづさしの中へ墨すみを磨すって入れておいた、平中はそうとは知らず、その墨の水で眼を濡ぬらしたので、女が平中に鏡かがみを示しして、「われにこそつらさは君が見すれども人にすみつく顔かほのけしきよ」と詠よんだ故事こじがあつて、源氏の言葉はそれにもとづく

由よしが記しるしてある。河海抄は此の故事を今昔物語こんじやくものがたり語から引用し、「大和物語やまとものがたりにも此事あり」と云っているけれども、現存の今昔や大和物語には載のっていない。が、源氏にこんな冗談を云わせているのを見ると、此の平中の墨塗りの話は好色漢の失敗談として、既に紫式部の時代に一般るふに流布るふしていたのであろう。

平中は古今集こきんしゅうその他の勅撰集に多くの和歌を遺のこしているし、系図も一往明いちおうかであるし、その頃のいろ／＼の物語に現れて来るので、實在した人物であることは紛まぎれもないが、死んだのは延長元年とも六年とも云つて確かでなく、生れた年は何の書にも記してない。今昔物語には、「兵衛佐平定文ひやうゑのすけたひらのさだぶみと云ふ人ありけり、字あざなをば平中とぞ云ひける、御子みこの孫まごにて賤いやしからぬ人なり、そのころの色好みにて人の妻め、娘むすめ、宮仕人みやづかへびと、見ぬは少くなんありける」と云い、又別の所で、「品も賤しからず、形有様も美しかりけり、けはひなんども物云ひもをかしかりければ、そのころ此の平中に勝すぐれたる者世になかりけり、かゝる者なれば、人の妻、娘、いかに況いはんや宮仕人は此の平中に物云はれぬはなくぞありける」とも云つてあるが、こゝに記す通りその本名は平定文（或は貞文）で、桓武天皇かんむの孫まごの茂も世王ちよの孫まごに当り、右近中将従四位上平好風の男である。平中と云うのは、三人兄弟の中の二番目の子息であるからとも云い、字を仲と云つたからとも云う説があつて、平仲と書い

てある例も多い。(弄花抄ろうかしように依ればヘイチユウのチュウは濁りて読むべしとある)蓋しけだ
 平中とは、なお在原業平ありわらなりひらのことを在五中将ざいごと呼んだ如きであろうか。

そう云えば業平と平中とは、共に皇族の出である点、平安朝初期の生れである点、美男子
 で好色家であつた点、歌が上手じょうずで、前者が三十六歌仙かせんの一人、後者が後六々選の一人で
 ある点、前者に伊勢物語があるように、後者にも平中物語とか平中日記とか云うものがあ
 る点等でよく似ている。たゞ平中は業平よりも時代がやゝ下っており、今の墨塗りの話や、
 本院の侍従じじゆうに翻弄ほんろうされた話などから想像すると、業平と違っていくらか三枚目的など
 ころがあつたような気がする。平中日記を見ても、その内容は必ずしも花々しい恋愛談で
 はなく、相手に逃げられたり、体ていよく捌さばかれたり、とゞのつまりは「物も云はでやみにけ
 り」とか、「煩わづらはしとて男やみにけり」とか云う風な終りを告げている挿話そうわが随分ある。
 又七条の後の宮きざいみやの女房武蔵むさしとの関係のように、たま〜望みかなが叶かなったかと思えば、その翌
 日から公用で四五日京都を離れるようなことになり、而も不覚しかにも女に事情を知らしてや
 るのを怠おこたつたので、女はたよりのないのを歎あまいて尼あまになつてしまつたと云うような、そゝ
 つかしい話などもある。

ところで、平中が数ある女たちの中で、一番うつゝを抜かして恋こいがれ、おまけに散々

な目に遭わされて、最後には命までも落すようなことになった相手は、侍従の君、
——世に謂う本院の侍従であつた。

此の婦人は、左大臣藤原時平の邸に宮仕えしていた女房であるが、時平のことを本院の左大臣と呼ぶところから、此の女のことを本院の侍従と呼ぶ。その頃平中の官はわずかに兵衛佐であつた。彼は血統や家柄はよかつたけれども、官職は低かつたのであつた。それに何分なまけ者で、「宮仕へをば苦しき事にして、たゞ逍遙をのみして」と日記にあるから、要するに役所勤めなんか嫌いで、のらりくらりしていたのであろう。帝はそれをお憎みになつて、懲らしめのために一時免官せしめられたことなどもあつた。尤も一説に、彼が免官になつたのは、彼よりも官職の上の或る男が彼と女を争つたところ、女がその男を嫌つて平中の方へ靡いたので、恋の競争に破れた男が平中を恨み、彼のことを何や彼やと朝廷に讒言したからであるとも云う。古今集卷十八雑の下所載「憂き世にはかどさせりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする」と云う歌は、「つかさの解けて侍りける時よめる」と云う詞書の通り、その折彼が出家遁世の念を起して詠んだのであるが、帝の御母后のもとにも馴染の女房があつたので、「なり果てむ身をまつ山の時鳥、いまは限りとなき隠れなむ」と云う歌をその女の所へ送つて、一方では御母後に運

動をし、一方では父の好風が帝に哀訴したので、間もなく再び官を賜わったのであった。
 勤めぎらいの平中は、宮中への出仕は怠りがちであつたらしいが、本院の左大臣のもとへ
 は始終御機嫌伺いに行つた。本院と云うのは、中御門の北、堀川の東一丁の所にあつた
 時平の居館の名で、当時時平は故関白太政大臣基経、——昭宣公の嫡男
 として、時の帝醍醐帝の皇后穩子の兄として、権威並びない地位にあつた。時平（これは
 トキヒラが本当であろうが、古くからの云い習わしに従つて矢張シヘイと呼ぶことにしよ
 う）が左大臣になつたのは昌泰二年、二十九歳の時であつて、初めの二三年の間は右
 大臣に菅原道真が控えていた、めに多少牽制もされたけれども、昌泰四年の正月にそ
 の政敵を陥れることに成功してからは、名実共に天下の一人の人であつた。そして此の物語
 の時代にも、まだ三十を三つか四つ越したぐらいに過ぎなかつた。今昔物語には、此の大
 臣もまた「形美麗に有様いみじきこと限りなし」「大臣のおん形音気はひ薫の香よりはじ
 めて世に似ずいみじきを云々」と記しているの、われ／＼は富貴と権勢と美貌と若さと
 に恵まれた驕慢な貴公子を、直ちに眼前に描くことが出来る。従来藤原時平と云うと、
 あの車曳の舞台に出る公卿悪の標本のような青隈の顔を想い浮かべがちで、何とな
 く奸佞邪智な人物のように考えられて来たけれども、それは世人が道真に同情する餘り

そうなったので、多分実際はそれ程の悪党ではなかったであろう。嘗て高山樗牛は昔んこうろん公論を著わして、道真が彼を登用して藤原氏の専横せんおうを抑えようとし給うた宇多上皇の優渥ゆうあくな寄託そむに背いたのを批難し、菅公の如きは意気地なしの泣きみそ詩人で、政治家でも何でもないと言ったことがあるが、そう云う点では時平の方が却かえつて政治的実行力に富んでいたかも知れない。大鏡おゝかゞみは時平を悪くばかりは云わず、愛すべき点があつたことをも伝えていの中に、可笑おほかしいことがあると直すぐ笑い出して笑いが止まらない癖があつたと云うが如きは、無邪氣で明朗潤達かつたつな一面があつたことを證するに足りるのであるが、その一例として滑稽こっけいな逸話がある。まだ道真が朝ちやうにあつて、時平と二人で政務を見ていた頃のこと、いつも時平がひとりで非道に事を処理して、道真に嘴くちばしを入れさせないので、某なにがしと云う記録係の属官が一計を案じ、或る日文案を文挟ふばさみに挟んで左大臣の前に捧げて行き、それを時平に渡そうとするはずみにわざと音高く放屁ほうひをした。時平は途端に嘔ふき出してわつはく腹を抱かえ始めたが、いつ迄たつても笑いやまず、体がふるえてその文案を受取る事が出来ないので、その間に道真が悠々と事務を執とり、思いのまゝに裁断を下した、と云うのである。

時平は又なかく勇氣があつた。道真の死後、その霊が化して雷神となつて朝臣あだに讐あだをす

ると信ぜられていた時分、或る日清涼殿せいりょうでんに落雷して満廷の公卿くけいたちが顔色を失つた折に、時平は凜然りんぜんと太刀たちを引き抜いて大空を睨みにら、「あなたは生きておられた時にも私の次の位だつたではないか、たとい神になられても、此の世へ来られたら私を尊敬なさるのが当然ですぞ」と叱咤しつたしたので、その威勢を恐れたかのように、雷鳴が一時静かになつた。されば大鏡の作者も、いろ／＼悪いことをした大臣ではあつたけれども「大和魂やまとだましひなどはいみじくおはしましたるものを」と云つている。

こう云うと、時平はたゞ向う見ずの、お坊ちゃん育ちの餓鬼がき大将のようにも取れるが、案外そうでない一面もあつて、醍醐帝と此の大臣とが密ひそかに謀はかつて世間の奢おごりを戒めたと云う話なども伝わっている。それは或る時、時平が帝の定め給うた制を破つた華美な装束をして参内さんだいしたのを、帝が小薮こしとみの隙間すきまから御覧ごらんになつて急に機嫌を損ぜられ、職事しきじを召されて、「近頃過差かさの取締ととめがきびしいのに、左大臣たる者がいかに一いちの人ひとであるとは云え、殊ことのほかきらびやかな装いをして参るとは怪けしからぬ、早々退出するように申し付けよ」と仰せられたので、職事はどうなることやらと案じながら、こわ／＼仰せの趣を伝えると、時平は恐懼きょうく措く所を知らず、従者共に先を追わせることをも禁じ、慌あわてふためいて退出して、以後一箇月ばかりは堅く居館の門を閉じて引籠ひきこもつていた。たま／＼人が訪ね

て来ても、「お上の御勘当が重いので」と云つて面接せず、御簾の外にも出なかつたので、漸く此の事が評判になり、世人が奢りを慎しむようになったが、これは豫め時平が帝としめし合わせてしたことなのであつた。

平中が此の時平のところへしぼく伺候したのは、権門に媚びて出世の緒を掴もうと云う世間並な下心もないことはなかつたであろうが、一つには此の大臣と兵衛佐とは話の馬が合うせいでもあつた。二人は官職や位階から云えば大きい隔たりがあるけれども、系図や家柄を論ずれば平中も遜色はないのだし、趣味や教養も同等であるし、どちらも女好きな貴族の美男子なのである。従つて、二人が常にどんなことを面白がつてしゃべり合つていたか、大凡そ見当がつくのであるが、でも平中は、左大臣のお相手をするのが唯一の目的で此の邸へ来るのではなかつた。いつでも彼は夜が更けるまで御前で話し込んでから、頃あいを測つて暇を告げるのであるが、そのまゝ直ぐ自分の館へ帰ることなどはめつたになかつた。大臣の前は帰つた体にしておいて、実はそうつと女房たちの局の方へ忍んで行き、侍従の君のいるあたりをうろくするのが例になつていて、ほんとうは此の方が目的なのであつた。

しかし甚だ笑止なことに、平中は去年以来此の忍び歩きを繰り返して、或る時はこゝぞと

思う遣戸やりどの外で息を凝こらしてみたり、勾欄こうらんのほとりに亘たゞずみたり、根気よく機会をうかゞっているのであるが、いつもの彼にも似ず、今度ばかりは運が悪くて、未だいまにその人の心を動かすことが出来ないのみか、世に稀まれな美女であると噂うわさの高いその容姿を、垣間見かいまみたことすらないのであった。これは一つには、運が悪いただけではなく、何故なにゆえか相手の人が故意に平中に遇あうことを避けているらしいからなので、そのために平中は一層慥じれていった。こう云う場合、召使われている女めのわらわ童などを手馴てなずけて文ふみの取次をして貰もらうのが常じようとして

套ようしゅう 手段で、もちろんその辺にぬかりがあるのではなかったが、それも、今日までに二度持たせて遣やつたのに、全然手答たえがないのであった。いつも平中は女童を掴つかまえて、「たしかに渡してくれたかね」と、しつこく念を押すのであるが、「え、お渡し、たことはしたんですけれど、……」と、女童は口ごもりながら気の毒そうに平中の顔を見るのである。

「お受け取りにはなつたんだね」

「え、たしかにお取りになりましたわ」

「是非御返事ぜひを戴いたぎたいと、云つてくれたゞらうね」

「それも、そう申上げたんですけれど……」

「そうしたら？」

「何とも仰おつしやらないんですの」

「でも、お読みにはなつたのだろうか」

「えゝ、多分ね、……………」

と、平中が問い詰めれば問い詰めるほど、女童はいよゝゝ当惑するのである。

一度などはこんなことがあつた。

例に依つてこま／＼＼＼と思いのたけを書き綴つづつたあとに、せめて私はあなたが此の文を御覧下すつたかどうか、それだけでも知りたいのです、決してねんごろな御言葉とは申しませんが、御覧になつたのなら、見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越よこしになつて下さい、と、泣かんばかりの口調でしたゝめたのを持たせてやると、女童はついでないことにニコ／＼しながら戻つて来て、

「今日は御返事がありましたのよ」

と、一通の文を渡した。平中が胸をときめかしつゝ押し戴いて受け取つたことは云う迄もないが、急いで封を開いて見ると、小さな紙きれが一つ這入はいっているだけであつた。なおよく見ると、「見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越しになつて下さい」と書いてや

つた、さつきの彼の文の中の「見た」と言う二字のところを破いて入れてあるのであつた。これにはさしもの平中も開いた口が塞がらなかつた。彼も今まで数々の女に恋をしかけたが、こんな意地の悪い、皮肉な相手に懸つたことはなかつた。かりにも此方は美男の聞えの隠れもない平中である。大概な女は彼だと分れば訳もなく靡いてしまうのが常で、今度のように手きびしい扱ひをした者は一人もなかつた。で、いきなりピシヤリと横面を張られたような気がして、さすがにそのあと暫くは寄り着こうともしなかつた。

それから二三箇月の間と云うものは、女の所に用がないとなると、現金なもので、左大臣への御機嫌伺いも自然怠りがちにしていた。たまには伺候することもあつたが、帰りにいつもの局へは間違つても足を向けず、そつちは鬼門だと、自分で自分に云い聞かして、すうつと出て来るようにしていた。と、その後又幾月か過ぎて、或る五月雨の降る晩であつた。久振に御前で夜を更かしてから出て来ると、宵のうちに入梅らしくしよぼ／＼降つていた雨が、俄かに大降りに降り出したので、此の雨を衝いて自分の家まで帰るのはえらく煩わしい気がしたが、その時ふつと、こう云う晩にかの人のもとを訪れてみたら、と、急に平中はそう思いついた。それと云うのが、考えれば忌ま／＼しいけれども、いつたいかの人の此の間のようなやり方は、悪ふざけにしても少しく念が入り過ぎてゐる。凡

そ相手が左様に手の込んだ懐らし方をすると云うのは、彼を嫌っているのではなくて、彼に興味を抱いている證據ではないのか。あたしはそこらの人たちのように、あなたの名を聞いて直ぐ嬉しがるような女ではない、と云うところを見せたのであろうが、一往その意地を通しさえすればよいのではないか。——平中の腹の底には矢張そう云う風な己惚れがあるので、あれ程にされてもなお懲りず、まだほんとうには諦めていなかったものであった。それに、こう云う真つ暗な土砂降りの晩に訪れたら、いかに鬼のような心を持った女でも、哀れを催さない筈はあるまい。そう思うと彼はひとりでにそわ／＼して来て、ふらく／＼と鬼門の方角へ出かけて行つた。

「まあ、誰方かと存じましたら、——」
呼び出された女童は、雨の降り込む簀子の板敷にしよんぼり立っている男の姿を闇に透かしながら、さも驚いたらしく云つた。

「暫くでございましたわね、おあきらめになつたのかと存じておりましたのよ」

「いや、あきらめてよいものかね。男はあゝ云う目に遭わされると、猶更恋しさが募るものだ。あれからお伺いしなかつたのは、そう／＼うるさく付き纏うのも失礼だと思つたからだよ」

平中は、餘り醜態にならないように冷静を装ったつもりであつたが、生憎あいにく自分でも可笑しいくらい声がふるえているのであつた。

「御無沙汰はしていたけれども、一日だつて忘れたことなんぞありはしない。一途いちずに思いつゞけていたのだ」

「お文ふみをお持ちになりましたの」

女童は長たらしい泣きごとには取り合わないで、手紙があるなら取次だけはして上げようと云う調子であつた。

「文なんか持つて来なかつたよ。どうせ御返事が戴けないのに、書いたつて無駄ではないか。——ねえ、君、お願いだ、それよりほんの束つかの間までもよい、一と目でも、いや、物越しにでも、お逢い申してお声を聞かして戴きたいのだ。そう思い立つたら忪こらえきれなくて、此の雨の中を飛んで来た私を、少しは憐あわれんで下さらないだろうか」

「でもまだお側の人たちが起きていらつしやるので、今は工合が悪いんですけど、………」
「待つよ、いくらでも。お側の人ひとが寝てしまうまで。——今夜はお逢い出来るまで此処こゝを動かないつもりなんだ」

平中は一生懸命にそう云つて、

「ねえ、君、お願いだ、ねえ」

と、だゝつ児のように繰り返して手を取って放さないで、女童は半ば、呆れ、半ば、怯えたような眼つきで、気がいじみたまの顔をしげくと視つめていたが、

「では、ほんとうにお待ちになるの？」

と、しようことなしに云った。

「お待ちになるなら、お側に人がいなくなつてから、申上げてだけは見ますけれど」

「有難う、是非頼むよ」

「でもまだなか／＼ですよ」

「そんなことは覚悟の上だよ」

「ほんとうにお取次をするだけよ。あとのことはお請け合い出来ませんわ」

それなら彼処の遣戸の前で、なるべく人目に付かないようにして待つていらつしやいと、そう云つて女童が引込んでしまつてから、平中は凡そどのくらいの間立ちつゞけていたことか。だん／＼夜も更けて来て、人々の寝支度をする物音が聞え、やがてひっそりと局の中が寝静まつた様子であつたが、その時不意に、平中の凭りかゝっている戸の内側に人のけはいがして、カタリと懸金を外す音がした。

はてな、と思つて試ためしに遣戸に手をかけて見ると、訳なくする／＼と開いてしまった。あゝ、さては今夜はかの人も心を動かして願いを聴き届けてくれたのかと、平中は夢のような気がして、嬉しさにわな／＼きながら恐る／＼忍び入り、戸の懸金を内側から掛けた。中は真つ暗で、たつた今人の足音がしたように思えたのに、その辺には誰もいるらしくもなく、たゞ黝おびたゞしい空そらだき薫の香が局のうち一杯に満ちていた。平中は闇の中を手さぐりで一歩々々進みながら、かの人の闇ねやとおぼしいあたりへ漸ようやく這い寄ることが出来たが、こゝらであろうと見当を付けてまさぐると、衣きぬを引き被かっいで横に長く臥ふしている姿が手に触つた。ほつそりした肩つき、可愛らしい頭の恰かつこう好、まさしくかの人に相違ない。髪を撫なでゝみると、しなやかな毛の房ふさく々としたのが氷のように冷めたく触る。

「とう／＼逢うて下さいましたね。……」

こう云う場合にふさわしい台詞せりふのいくつかは、常に用意している筈の彼であるのに、今夜はあまりに思い設けぬことだったので、咄嗟とつさに兎角とかくの文句も浮かばず、不覚にもわな／＼するばかりで、辛うじてこんな風に云つたあとは、熱い溜ためいき息をつゞけざまに吹きかけたゞけであつた。彼はひたすら髪かみの毛の上から両手で女の顔を押しさえ、それを自分の顔の方へまともに向けて、美しいと云われる目鼻だちを見きわめようとしたが、顔と顔をそん

に寄せつけても二人の間には濃い闇があつて、何も見透せないものであつた。でもそう云う風にして暫く一心に視つめてみると、何となくぼうっと、ほのじろいものが幻まぼろしのように見えて来る気がした。女はその間一ひと言ことも云わず、黙つて平中のするなりにされていた。平中は女の顔じゆうを撫なで廻して、その輪廓を触覚に依つて想像しようとするのであつたが、そうされても猶柔軟な胸をしなくさせつゝ、全く男のするなりにされているのは、無言のうちにも彼も打ち任せているのだとしか思えなかつた。が、女は男の身じろぎを感じると、急に何と思つたか、

「待つて、……………」

と云いながら体を引いた。

「……………彼処しやうじの障子の懸かけ金を掛けて来るのを忘れましたわ。ちよつと掛けて参りますわね」

「直すぐお戻りになるのでしようね」

「えゝ直ぐ、……………」

女が障子と云つたのは、今の世の襖ふすまのことで、隣の局との間仕切まじきりに締めてあるのを云うのであつた。いかさまその懸金かけねが外れていては、人が這入つて来る懸念けんねんがあるので、男が

仕方なく手を放すと、女は起きて、上に纏まとつていた衣を脱ぎ、単衣ひとえと袴はかまとを着たなりで出て行つた。その間に平中は装束を解いて臥ねて待つていたが、たしかにカタリと懸金を掛ける音がしたのに、どう云う訳か女はなかく戻つて来ない。間仕切と云つてもついそこであるのに、一体何をしているのか。……そう云えば、今懸金の音がしたあとで、女の足音がだんく奥へ遠のいて行くように聞えたが、それきりぱったりと此の室内に人のけはいがしなくなつた。何だか様子がおかしいので、

「どうかなされたのですか、……もし、……」
と、小声で云つてみたけれども、答がない。

「もし、……」

と云いながら、彼も起き上つて、襖きわの際へ行つてみると、怪けしからぬことには此方こちら側の懸金は外れていて、向う側の懸金が下りているのである。女は隣の部屋へ逃げて、向うから締まりをして、何処どこかへ行つてしまつたのであつた。

又背負い投げを食わしたのか。……平中はそのまゝ襖きわに寄り添うて茫然ぼうぜんと闇の中に立ちつくした。それにしてもこれはどう云う意味であろう。こんな夜更けにわざ／＼人を自分の闇ねまで誘い入れて置きながら、いざと云う時に姿を晦くらましてしまうとは。今迄にして

も念が入り過ぎていたけれども、今日のは餘程不思議である。折角こゝまで事が運んで、今日と云う今日は日頃の恋が成就しそうであったのに、——現に今しがた、あのひやゝかな髪を撫で、あの柔かな頬をさすった感触が、まだ手のひらに残っているのに、——今一步のところ取り逃がすとは。——一旦はたしかに握った珠が指の間からズリ落ちたとは。——そう思うと平中は口惜し涙さえ溢れて来た。今考えれば、さつき女が立つて行つた時に、自分も附いて行くべきであつた。もう大丈夫と氣を許したのが悪かつたのだ。大方女は、男にどれほどの熱意があるかを試してみようとしたのであろう。男が心から今夜の逢瀬に感激しているなら、片時も女の側を離れまいとするのが当り前である。それなのに女をひとり行かして、自分は寝て待つているなんて、その料簡が氣に入らない。此方が少し情を示すと、直ぐそんな風に附け上るのでは、まだく懲らしめてやらねばならない。憚りながらあたし程のものを恋人に持とうと云うのには、もつとく忍耐が必要ですよ、と、女はそう云つていられるのかも知れない。……………

並々ならずひねくれている女の性質から推して、とても戻つて来る筈がないことは分つていながら、なお平中は未練がましく襖の際に耳を澄まして隣室のけはいを窺つたりした。そしてとうく寝床のところへ引返して来たが、脱ぎ捨てゝある自分の装束を直ぐには取

つて着ようともせず、愚かなことであると知りながら、女の衣と枕とが置いてあるのを抱いてみたり、撫でゝみたりして、やがてその枕に我が顔を載せ、その衣を我が身に纏うて、長い間打ち伏していた。……まゝよ、夜が明けたつて構うものか、いつ迄もこうしていてやれ、人に見られたら見られた時のことだ。……こうして強情に頑張つていてやったら、かの人も我が身を折つて戻つて来ずにはいないであろう。……そんなことを思い、女の匂がまだこまやかに立ち籠めてゐる暗がりの中に侘びしい雨の音を聞きながら、彼は夜もすがらまんじりともせずにはいたが、次第に明け方が近くなつて来、彼方此方であちち人声がし始めると、矢張り矢張り矢張まりが悪くなつてこそ、逃げ出してしまつたのであつた。

こんなことがあつてから、平中の侍従の君に寄せる思いはいよく、真剣になつたのであつた。それ迄は幾分遊戯気分で追ひ廻していたものが、それからは傍目もふらずに恋いこがれて、是非とも望みを叶えずには措けないようになつた。そう云う意慾に燃えることは、見すゝかの人のしかけた罠に陥ることであつたけれども、一步々思う壺へ誘ひ込まれて行きつゝどうにも制しようのない気持であつた。そして結局、又あの女童を呼び出しに行つては文をことづけるより外に、此れと云う智慧も浮かばないのであつたが、でも

その文の書き方には心を砕いて、此の間の夜の己れの越度を詫びる言葉を、さま／＼な表現で繰り返しく綴るようにした。——あなたが私を試そうとしていらつしやることは感づいていたのですが、それでいながらうつかりして、あの晩のような失錯をしてしまったたくやしき。それと云うのもあなたを思う熱情が足りない證據だと仰せになるかも知れませんが、去年以来どんなにあなたに嘲弄されてもなお懲りずまに通つて来る私と云うものに、少しでも不憫をかけて下さるのであつたら、せめてもう一度だけ、此の間の晩のような機会を恵んで下さらないであらうか。——と、要旨はそれに盡きるのであるが、それをいろ／＼な殺し文句で書くのであつた。

その二

そうこうするうち、その年の夏も過ぎ、秋も暮れて、平中の家の籬に咲いた菊の花も色香がうつろう季節になつた。

此の古今に名を馳せた色好みの男は、人間の花を愛したばかりでなく、植物の花をもいくしむ心を持っていて、わけても菊を栽培することが相当上手であつたらしい。「又此

の男の家には、前せんざい裁好みて造りければ、面白き菊などいとあまたぞ植うゑたりける」とある。平中日記の一段には、或る月の美しい夜に、平中の留守をうかゞって女たちがひそかに菊の花を見物に来、丈たけの高い花の茎に歌を結ゆいつけて帰ることなどが記されているが、大和物語にも、仁にんなじ和寺の宇多上皇——亭ていしん子院みかどの帝が平中をお召しになって、「御前に菊を植うえたいと思うので、よい菊を献上するように」と云う仰せがあったことを記している。その時院は、平中が畏かしこまつて退出するのを呼び止めなされて、「その献上の菊の花には歌を添そえて参れ。そうでなければ受け取らないぞ」と仰せになったので、平中はひとしお畏おそまつて退き下り、我が家やの庭に咲き誇ほつてゐる菊の中から優すぐれた数株を選び取とつて、それに歌を添そえて差上げた。古今集卷五秋歌の下に、「仁にんなじ和寺に菊の花めしける時に、歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける」と云う詞書の附ついているのが即ちそれである。

秋をおきて時こそありけれ菊の花

うつろふからに色のまされば

さて彼が丹精して作つくつたそれらの菊の花ども、すっかり色香が褪あせてしまつたその年の冬の、或る晩のことであつた。平中はその夜も本院の大臣おとぎの許もとに伺し候こうして四方山よもやまの世間話の

お相手をしていたが、彼の外にも五六人の公卿たちが侍っていて、初めのうちは御前が賑かだったのが、追いかく一人減り二人減りして、いつの間にか大臣と彼と二人きりになった。帰り途に目あてのある平中は、自分も好い加減に退り出たのであったが、時平は彼と差向いになると女の噂を持ち出すのがおきまりで、何か最近に収穫はなかったか、己の前で隠すには及ばぬぞ、と云うような風に切り出すので、彼も心ではそわ／＼しながら、ちよつと座を立つしおを失つて、それから又ひとしきり、親しい友達同士でなければ交せないような秘話がはずんだ。尤も平中は、近頃侍従の君の一件が大臣の耳に這入っていないか、今にそのことを持ち出してチクリとやられるのではあるまいか、と云う不安があるところから、その晩はどうも調子が乗らず、内々警戒していたのであったが、時平は何と思つたか、

「時に、折入つてあなたに聞きたいことがあるんだが、………」
と、俄に上座から席を移して、平中の前へ膝をすり寄せた。

来たな、と思つて平中が胸をどきつかせていると、時平はニヤ／＼薄笑いを浮かべて、
「いや、突然つかぬことをお聞きするようだけれど、あの、帥の大納言の北の方な?…」

………」

「はあ、はあ」

平中はそう云って、まだ薄笑いの消えやらぬ時平の顔を不思議そうに視つめた。

「あの北の方を、あなたは知っておられるであろうな」

「あの北の方……でございますか」

「そんなにお恍惚とほなさらずと、知っておられるなら知っていると、正直に云って下さるがよい」

平中がどきまぎしている様子を見て、時平は一層膝をすゝめた。

「不意にこんなことを云い出して、変にお思いかも知れないが、あの北の方は世に稀な美人だと云う噂があるが本当かな？……なあ、これ、お恍惚なさるなど云うのに。……」

「いえ、恍けてなんぞおりは致しません」

懸念けねんしていた侍従の君のことではなくて、思いも寄らぬ人のことが問題になっているのだと分ると、平中は先まずほっとした。

「これ、知っておられるのであろうな」

「いえ、……どう致しまして」

「いかん、いかん、隠してもちやんと種が上つています」

二人の間にこんな工合な問答が交されるのはそう珍しいことではなかった。いつも時平が冷やかしかゝると、最初のうちは存じませぬの一点張りで、しらを切る平中なのであるが、だん／＼深く問い詰めると、結局「知らないでもない」と云うような所へ落ちる。それから又問い詰めて行くと、「文の遣り取りだけはした」となり、「一度逢つたことがある」となり、「実は五六度、……」となり、しまいには何も彼も白状する。そして時平が驚くことは、当時世間に評判されている女たちの中で、平中が一往渡りをつけていない者は殆ど一人もないのであった。で、今夜も時平に詰め寄られると、次第に云うことがしどろもどろに、口の先では否定しながら顔つきでは肯定し始めたのであったが、時平が猶も追究すると、

「実は何でございます、あの北の方に仕えておりました女房に、少々ばかり昵懇じつこんの者がございましてな」

と、おもむろに口を割り出した。

「ふん、ふん」

「その者から聞いたのでございますが、あの北の方は並びない器量のお人で、年はようよう二十歳ばかりでいらつしやる。……」

「ふん、ふん、それくらいは私も聞いていますよ」

「ところが、何分大納言殿はあの通りの老人であられますのでな。……あの方のお歳はいくつになられますか、まあお見受けしたところ、もう七十をずうつと越しておられるように存ぜられますが、……」

「左様、七十七か八、くらいになられはしないかな」

「そう致しますと、北の方とは五十以上も違つておいでになると云う訳で、それではあまりあの北の方がおいとおしい。世に珍しい美女にお生れになりながら、選りに選つて祖父おじか曾祖父ひいおじのような夫をお持ちなされたのでは、嘸御さぞ不満なことがおありであろう。御自身でもそれをお歎きになつて、あたしのような不運なものがあるだろうかと、お側の者にお洩もらしなされて、人知れず泣いておいでになることがある、など、その女房が申したり致しましてな。……」

「ふん、ふん、それで？」

「それで、と申す訳でもございませぬけれども、そんなことから、ついその、何でござい
ます、……」

「あはゝゝゝゝ」

「どうぞ宜しく御推察を、……………」

「大方そんなことだろうと睨んでいたんですが、やっぱりそうだったんですね」

「恐れ入ります」

「で、何度ぐらい逢つておられる？」

「何度と申して、そうたびくはごいませなんだ。ほんのちよつと、一度か二度、……

…

「嘘を云われな」

「いえ、ほんとうで。……………その女房に媒を頼みまして、一度か二度はそう云うこともござ

いましたか知れませんが、格別打ち解ける、と云うところまでは参りませなんだ」

「ま、そんなことはどうでもよろしい。それより私が聞きたいのは、世評通りの美人に違いないかどうか、と云うことなんです」

「左様でございます、それはまあ、……………」

「それはまあ、どうだと云われる？」

「どう申したらよいのでしょうか」

と、平中はわざと気を持たせて、ニタ／＼笑いを噛み殺しながら、仔細らしく首を傾げた。

こゝで此の二人が噂をしている「帥の大納言」とその北の方と云うのは如何なる人であるか、と云うのに、大納言は藤原国経のことで、閑院左大臣冬嗣の孫に当り、権中納言長良の嫡男である。時平は此の国経の弟、長良の三男に当る基経の子であるから、彼と国経とはまさしく伯父甥の關係になるのであるが、地位から云えば故太政大臣関白基経の長子であり、摂家の正嫡である時平の方が遙かに上で、すでに左大臣の頭職にある年の若い甥は、老いぼれの伯父の大納言を眼下に見下していたのであった。

いったい国経はその頃としては大變長寿を保つた人で、延喜八年に八十一歳を以て歿したのであるが、生来一向働きのない、好人物と云うだけの男で、兎も角も從三位大納言の地位にまで昇り得たのは、長生きをしたお蔭であろう。嘗て太宰権帥に任じていたことがあるので、帥の大納言と呼ばれていたが、その大納言になったのは実に延喜二年の正月、彼が七十五歳の時であった。彼にたゞ一つの取柄と云えば、非常に健康に恵まれていたことで、肉体的精力が倫を絶していただであらうことは、そう云う高齢で二十何歳と云う夫人を擁し、男子を生ませている一事を以てしても想察するに足るのである。これは餘談であるけれども、昭和の現代に於いて、つい此の間、六十八九歳になる或る高名な老歌人が、四十何歳かの某夫人と「おいらくの恋」とやらをして新聞や雑誌に艷種を提供し、

大いに世間を騒がしたことはなおわれ々の記憶に新たなところである。当時此の老歌人の知己友人たちの間で一番問題になったのは、彼の体力がよく堪え得るであろうかと云うことであつたので、或る物好きな男がそつと夫人に質して見るなどのことがあつたが、その結果、夫人は少しもそう云う方面に不満を感じていない事実が明かにされ、われ々は改めて老歌人の精力を羨みもすれば驚きもした次第であつた。現代に於いてさえ云う組み合わせの性生活は類稀なこととして世の視聽を惹くのであるから、此の老歌人よりなお八九歳の高齡で、五十も歳下な婦人を妻にしていた国経のようなのは、平安朝の昔としたら餘程珍しいことではあるまいか。

次にその北の方と云うのは、筑前守在原棟梁の女であるから、在五中将業平の孫に当る訳であるが、此の夫人の正確な年齢は、ほんとうのところよく分らない。大納言と五十も歳が違ふと云うのは、まさかとも思われるけれども、世継物語には「わづか二十ばかりにてぞおはしける」とあり、今昔には「二十に餘る程」とあるので、二十一二歳であつたかと思える。彼女が業平を祖父に持っているからと云つて、美人であつたときめることは出来ないけれども、子の敦忠も美男であつたと云うことであるから、矢張美人系の一族たるに耻じない容姿だつたのであろう。時平は何処かゝらそう云う噂を聞き、而も

その人が時々夫の眼を忍んで情人を呼び込んでいると云うこと、その情人とは別人ならぬ平中であるらしいことをチラと小耳に挟はさんだので、それがほんとうなら、左様な美女をよぼくの老翁ろうおうや位の低い平中如ごときに任まかしておくと云う手はない、須すべからだい公こうが取つて代るべしである、と、ひそかに野心を燃やしていたところへ、そんなことゝは知らぬ平中がひよっこり今夜御機嫌伺いに罷まかり出たのであった。

後段に述べるが如く、時平はやがて望みを達して自分よりも十ほど若い此の義理の伯母を、見事伯父から奪い取つて自分のものにしたのであるが、大和物語には此の夫人がまだ国経の妻であつた時代に、平中が彼女に贈つたと云う和歌を載せている。――

春の野に緑にはえるさねかづら

わが君実きみざねとたのむいかにぞ

此の「君実」と云うのは本妻の意であつて、何処まで本気で云つていいのか分らないとしても、斯か様な文句を書き送るからには、平中も此の人に対して多少とも真剣な氣持があつたのであろう。彼は今、時平に突然みそかごとを発あはき立てられたので、うろたえた返事をしたのであるが、正直を云うと、まだ幾分か此の過去の恋人のことを忘れかねていたのであつた。浮気男のことであるから、今日迄に契ちぎつた女は数を知らず、大部分はその場かぎ

りで捨て、しまい、今では顔も名もおぼえていないのが多いのだけれども、此の美しい夫人とは、近頃しばら暫く遠のいているようなものゝ、一時はたしかに並々ならぬ関係にあつたのである。目下のところ、已やむに已まれぬ行きがゝりて侍しじゆう従の君きみを追い廻すような羽目になり、へんに懊じらされているものだから、一途に心がその方へばかり向いているのであるけれども、前者との縁も決して完全に切れてしまつてゐる訳ではなかつた。殊に思いもかけない時に、そう云う風に時平に尋ねられて見ると、又改めてその人のことが思い出されて来るのであつた。

「いや、先程も申しました通り、お逢いしたのは一二度でございますので、たしかなことは申せませんけれども、すぐれてめでたい御器量であられることは、先まずほんとうでございすな」

と、まだ平中は何となく胡麻ごま化しながら、少しずつ出し惜しみをするように云つた。

「ふうん、さては世間の噂たがに違ちがはず……」

「こうなりましたら隠さず申し上げますが、あれだけの顔だちのお方は、ちよつと外に見当らない、と申しても宜しゆうございましょうな。憚はばりながら、わたくしが今までにお逢いしました人々のうちでは、あの北の方が一番お美しゆういらつしやいます」

「ふうん」

と、時平は呻るうなように云つて息を詰めた。

「で、あなたの見たところ、夫婦仲はどんな工合です。矢張老人との間は巧く行つていないのでしょうね」

「さあ、身の不仕合わせを歎くようなことを申されて、涙ぐんでおられたこともございしましたが、大納言殿は世にも親切なお人で、非常に大切にしてくれる、なども仰おつしやつておられました。さればどう云うお心持でおられますか、實際のところは分りかねます、何しろ可愛い若君もおいでになりますし、……………」

「子達は何人おられるのです」

「お一人らしゆうございます。四つか五つぐらいになられる若君ですが、……………」

「ほゝう、では七十を越されてからのお子なのですね」

「えらいものでございますよ」

平中は、なおいろ／＼とその人のことを根掘り葉掘り問われるまゝに、知つている限りは知らしてやるのに吝やぶよけかでなかつた。いかさま、思い返して見れば、二度とあゝ云う蘭ろうだけた人に出遇えるかどうか分らないけれども、でもゝう自分は、あの人との恋は一往叶かなえた

のである、どう云う相手であつたにしろ、その人の魅力の程は知ってしまった、その人の夢は見つくした、自分はその人にもはや全く興味がないとは云わなければ、矢張それよりは未知の女、——次から次へ技巧を構えて自分の情熱を煽らずには措かない人の方へこそ、遙かに強く惹き着けられるのを感じる。——平中はそんな気持であつた。漁色家の心理と云うものは、王朝時代の搢紳も江戸時代の通人と同じようなもので、過ぎ去つた女のことの後々までこだわっているつもりはなかつた。もし左大臣が執心とあるならば、どうなと好きなようにされるもよからう、——と、彼はそれぐらいに思つたでもあろうし、それに又、あの大納言のような好人物の眼を偷んでそうく不義なことをするのは、他人は知らず、彼としては何となく気が済まないところもあつた。人の女を寝取ることにかけては常習犯の彼なのであるが、あの傷々しい、骸骨のように痩せた老翁が、たまく若い美しい妻を贏ち得て、後生大事にその人に冊き、それに満足しきつてゐるらしい様子を見ては、柄にもなく憐愍の情に似たものを感じていた訳であつた。なおついでながら、大納言国経と平中との間には、此の北の方の關係を外にして直接深い交渉はなかつたようであるが、或る年の秋、何かちよつとしたことで国経から平中の許へ使者が手紙を持って来た時に、平中が庭に咲いていた菊の一枝を取って返書に添えて渡し

たことが、平中日記に見えている。その時菊の花を貰った国経は、直ぐに次のような歌を詠んで贈った。

みよを経てふりたる翁杖おきなえつきて

花のありかを見るよしもがな

平中の返し、

たまほこに君し来寄らば浅茅生あさぢふに

まじれる菊の香はまさりなむ

これはいつ頃のことであつたか明かでないが、或は平中は、自分が此の翁の秘蔵の花を手折おつたことを考えて、いくらか皮肉にそんな贈物をしたのであろうか。

その三

それからと云うもの、時平は宮中で国経と顔を合わすと、急に如才じよさいなく挨拶あいさつするようになった。位は下でも、彼には正しく伯父まふに当る高齡の人を、敬うやまいいたわるのに不思議はないようなものだけれども、菅公かんこうを失脚せしめて以来、ひとしお態度が驕慢になつて、

満廷の朝臣どもに颯爽さつそうたる威容を誇っていた彼は、ついぞ此の伯父の存在などを眼中に置いたことはなかったのに、どう云う風の吹き廻しか、伯父に出遇うと変なニコ／＼顔をする。そして、御壮健で結構であるが、此の頃の寒さはおこたえになりはしないか、とか、お風邪かぜを召されぬように、とか、取って附けたような愛想を云う。或る日、分けても寒さの厳しい朝のことであったが、伯父の大納言の鼻先から水みず漬はなが滴たれているのを見ると、彼はそつと寄って行って、

「お漬が出ておりますぞ」

と、注意をして、

「お寒かったら綿の物をたくさんお着込みになることですね」

と、小声で云った。

長寿の人によくあるように、大納言は少し耳が遠いので、

「綿？………」

と聞き返すと、

「ふん、ふん」

と、時平はひとりうなずいて、何やら老人には聞き取れないことを云ったが、やがて老人

が館やかたに帰ると、左大臣からの使者だと云つて、雪のような綿を幾いくもち屯と云うほど届けて来た。「あなたのように齡よわい八十になんくとしてなお 矍かく鑠しゃくたる元氣を保ち、壯者を凌しのぐ趣おもむきがおりになるのは羨しい次第である。国に斯かまう様な朝臣があるのは寔まことにめでたい限りであるから、何卒どうぞ此の上とも体を大切にされて、一日でも多く長生きをして下さるようにと、使者はそう云う口上と共にくだんの贈物を置いて帰つたが、その二三日後、朝から大雪が降り出して一尺近くも積つた夕方に、又使者があつて、此の雪の白を如何いかように過すべしておられますか、今夜は大方なみくならず冷えることゝ存じますが、……と云うような言葉を述べ、何やら衣ころも 筥ぼこに収めたものを恭うやしく捧げながら運び入れた。そして、

「これは唐土とうどから伝来の品で、昔御先代の昭宣公が、冬になると召しておられたのですが、今の左大臣はまだ年がお若く、斯様なものを着用される折もないので、父君に代つて伯父君に召して戴きたいと仰つしやいまして」と、そう云つてそれを置いて行つたが、衣ころも 筥ぼこの中から出たものは、立派な貂てかわの裘ごろもで、昔の人の薰たきしめた香の匂が、今もなつかしくかおっているのであつた。

贈物はそれからも引きつゞいて数回に及んだ。或る時は錦にしき、綾あや、等々の織物、或る時はこ
れも唐土から渡つたと云う珍奇な幾種類もの香こう木ぼく、或る時は葡萄えびぞめ染、山吹、等々の御衣おんぞ

幾襲いくかさね、——折にふれて何とか彼とか口実を設けては、矢継ぎ早やに使者が来るのであつた。大納言は時平に格別な考があるのだらうなどは疑つてもみず、たゞもう有難さかたじけなと忝かたじけなさで一杯であつた。誰しも老年になると、若い人からちよつとしたわりの言葉をかけられても、つい嬉しさが身にこたえてほろりとするものであるのに、まして生れつきおめでたい、気の弱い国経なのである。殊に相手は甥おいと云つても、天下の一いちの人であり、昭宣公の跡を継いで撰せん政しやうにも関かん白ぱくにもなるべき人であるのが、さすがに骨肉こつにくの親しみを忘れず、何の取柄もない老いたる伯父に斯かくまで眼をかけてくれるとは。

「やっぱり長生きはするものですね」

と、或る晩老人は、北の方のゆたかな頬しわに皺しわだらけな顔を擦りつけて云つた。

「わたしはあなたのような人を妻に持つて、自分の幸福はもう十分だと思つていましたのに、そのうえ近頃は左大臣のようなお人から、斯かのように優やさしくして戴ける。……：ほんとうに、人はいつどんな時にどんな好運にありつくか分らないものです」

老人は、北の方が黙つてうなずいたのを自分の額で感じながら、一層つよく顔を擦り着け、両手うなじで項うなじを抱きかゝえるようにして彼女の髪を長い間愛撫した。二三年前まではそうでもなかつたのであるが、最近になつて老人はだん／＼愛し方が執しつ拗ようになり、冬の間は毎夜

北の方を片時も離さず、一と晩じゆう少しの隙間も出来ないようにぴったり体を喰つ着けて寝る。そこへ持つて来て、左大臣が好意を示すようになってからは、その感激のせいのでかい酒を過し、酩酊してから床に這入るので、なおさらしつこく手足に絡み着くようにする。それにもう一つ、此の老人の癖は、闇の中の暗いのを厭うて、なるべく燈火をあかるくしたがるのであった。と云うのは、老人は北の方を手を以て愛撫するだけでは足りず、とき／＼一二尺の距離に我が顔を退いて、彼女の美貌を讚嘆するように眺め入ることが好きなので、そのためにはあたりを明るくしておくことが必要なのであった。

「ですが、もうわたしなどは何を着ようと差支えない。あなたこそあの綿や錦を召して下さい」

「それでも大臣は、殿がお風邪を召さぬようにと仰つしやって、下されましたものを、……」

低い声でしかものを云わない北の方は、耳の遠い老人に分らせることが困難なので、自然夫に対しては言葉数が少く、分けても闇に這入つてからは殆ど無言で通すので、此の夫婦の間では寝物語が交されることはめつたになく、大概老人の方がひとりでしゃべりつづけるのであった。そして北の方はたゞうなずくか、たまに一と言か二と言、老人の耳の端へ

口を寄せて、唇が耳朶へ触れるくらいにして云うのであった。

「いゝや、わたしは何も要りはない。何も彼もあなたに進ぜます。……わたしには此の人さえあれば……」

そう云つて老人は又自分の顔を妻の顔から遠ざけながら、妻の額の上にかゝる髪の毛を掻きのけ、その目鼻だちへ燈火のあかりがほんのり当るようにした。こう云う時、いつも北の方は老人の節くれだつた歪んだ指がわなゝきながら髪をいじくったり頬をさすったりするのを感じつゝ、おとなしく老人のするまゝになつて眼を閉じているのである。それは顔の上にさす明りの晴れがましさを避けるため、と云うよりは、老人の貪るような瞳の凝視を避けるため、と云つた方が適當であるかも知れない。八十に近い老人に斯様な熱情があることは、不思議と云えば不思議であるが、実はさしにも頑健を誇つた此の老人も、一二年此のかた漸く体力が衰え始め、何よりも性生活の上で争われない證據が見え出して来たので、それを自覚する老人は、一つには遣る瀬なさの餘り変に慩れているのもあった。尤も彼の場合、その遣る瀬なさは、自分の悦樂が思うように叶えられないと云うよりは、此の若い妻に申訳ないと云う氣持から来る方が多いのではあつたが、……

「いゝえ、そんなお心づかいはなさらないで、——」

老人がその胸中を率直に打ち明けて、あなたに済まないと思つてゐる、と云う風に詫び言めかして云うと、北の方はしずかに頭を振つて、却つて夫を氣の毒がるのが常であつた。

お年を召せばそれが当り前なのであるから、何も氣になさることはない、その当り前の生理に背いて無理なことをなさるのこそ、お体のために宜しくない、そんなことより、殿が撰生をお守りなされて一年でも多く長寿を保つて下さる方が私もうれしい、と、北の方はそう云う意味に取れることを云う。

「そう云つて下さるのは忝いが」

老人は、そんな工合に北の方から優しい言葉で慰められると、一層北の方の心根がいとおしくなるのであつた。そして、又しても眼をつぶつてしまつた北の方の顔を見守りながら思うことは、いったい此の人は心の奥でどんなことを考へているのだろうか、と云うことであつた。それと云うのも、此の人がこんなにもすぐれた器量を持ちながら、五十以上も歳の違ふ夫に添わされた我が身の悲運を、それほどにも自覚してゐないように見えるのが不思議で、何か自分が世間知らずの妻を欺してゐるような氣がするばかりでなく、妻の犠牲の上に自分の幸福が築かれてゐると云う意識があるからなのであるが、内心にそう云う訝しみを蔵しつゝ眺めると、ひとしお此の顔が神秘に満ち、謎のように見えて来るので

ある。老人は、自分がこれほどの宝物を独り占めにしていること、世にこれほどの美女がいることを知っているのは自分だけで、当人さえもそれをはつきりとは知っていないらしいことを思うと、何となく得意の念の禁じ難いものがあり、どうかすると、此のような妻を持つているのを誰かに見せて、自慢してやりたい衝動をさえ感じるのであった。又翻つて思うのに、もし此の人が口で云う通りのことを考えているのであったら、——みずからの性的不満などは意に介せず、ひたすらに老いたる夫の命長かれとのみ願っているのが本心であるなら、——その有難い志に対して自分は何を報いたらよいのか、自分は此の後、たゞ此の顔を眺めるだけで満足しつゝ死んで行きもしようけれども、此の若い人の肉体を、自分と共に朽ち果てさせてしまふのは餘りにも不憫であり惜しくもある。で、両手の間にその宝物をしつかりと挟んで視つめてみると、いつそ自分のようなものは一日も早く消えてなくなつて、此の人を自由にさせてやりたいと云う怪しい気持ちにもなるのであった。

「どうなさいましたの」

老人の眼に浮かんだ涙が、自分の睫毛に伝わって来たのを感じると、北の方ははつとして眼を開けたが、

「いや、何でもない、くく」

と、老人はひとりごとのように云つて口を噤んだ。

そんなことがあつてから数日後、はやその年も残り少なくなつた十二月の二十日頃に、又しても時平の許から数々の贈物が届けられた。「大納言殿も来年は更に齡を加えられ、いよく八十路やそじに近くなられると承るにつけても、縁につながるわれく、共は慶賀に堪えない。これは些いささかながら、そのおよろこびのしるしまでに差上げるのですが、何卒どうぞこれらの品々を御受納なされて、よき初春をお迎えになつて下さい」と、使者はそう云う口上を述べたが、なお附け足して、時平が正月の三箇日のうちに、大納言の館やかたへ年賀に見えるであらうと云う意を伝えた。「大臣が仰せられますには、自分の伯父御おじごにこう云う長寿の人があるのは返す／＼も一門の榮譽である。自分はかね／＼此の伯父御とゆつくり酒を酌くみ交して、共によるこびを分ち、且は養生かつの術をも授かり、且は健康にあやからせて戴きたいと存じながら、今日まで折がなくて過して来たので、是非近々にその念願を遂げたいのであるが、それには此の正月がよい機会である。自分は毎年伯父御の邸へ年賀に参上したことがないのを、済まなく存じていた際でもあるから、来春から改めて御挨拶に伺い、年来の無礼をも詫びたいのである。と、左様に仰つしやっておいになりまして、三箇日

のうちには必ず参上致すからお含みおきを願うようにと、申し付かつて参りました」——
「使者はそう云つて歸つたのであつたが、此の申越しはいやが上にも国経を驚喜せしめた。
事實、時平が此の大納言の所へ年頭の礼を述べに来るなど、云うことは、嘗て前例がない
ばかりでなく、前代未聞の事件と云つても差支えない。此の恵み深い青年の左大臣は、一
門の年長者たるの故を以て一介の老骨に結構な財宝をあまた、び贈つてくれた上に、
今度は自身その邸宅に駕を枉げると云う光榮を授けてくれるのである。——ありていに
云うと国経は、先達から左大臣の測り知られぬ温情に対して何がな報いる道はないだ
ろうかと、寝ても覚めてもそのことを気に懸けていた矢先であつた。そして、大臣の邸と
は比べものにならない手狭な館ではあるけれども、一夕我が方へ臨席を仰いで饗宴
を催し、心の限りもてなしをして、感謝の念の萬分の一でも酌み取つて貰えないであらう
かと云うことも、考えないではなかつたのであるが、なか／＼大納言風情の所へなど来て
くれそうな人ではないので、申し出ても無駄であらう、却つて身の程を弁えぬ失礼な奴と、
物笑いになるだけであらう、と、そう思つて差控えていた際であつたのに、
人が自ら望んで客人にならうと云い出したのであつた。

その翌日から国経の邸は俄に活気づき、大勢の人夫共が出入りし始めた。もう正月に餘日

もないので、大切な客人を迎えるために急いで工匠や園丁を雇い、殿舎の修繕や林泉の手入れにかゝつたのである。家の中では板の間や柱をつやくと拭き込み、畳建具を新しく調え、屏風や几帳を動かして座敷の模様がえをする。家司や老女などが指図をしつゝ、あゝでもない、こうでもない、一つ調度を何回となく彼方へ持つて行かしたり、此方へ持つて来させたりしている。前裁では樹木を掘り起し、池の水を堰き止め、築山の一部を崩しなどしているが、此処では国経が自ら庭に下り立つて、木や石の布置をいろゝゝに工夫して見たりしている。国経にして見ればまことに一世一代の面目で、老後に花を咲かせるのであるから、此の支度のためにどれ程の人力と財力とを傾けても惜しくはなかつた。左大臣家からは正月の二日に前触れがあつて、明るる三日に、きらびやかな車や騎馬の列が大納言の邸へ乗り入れた。餘り仰々しくならないように、供の人数なども目立たぬ程にして参る、と云うことであつたけれども、右大将定国、式部大輔菅根などゝ云つた人々、——いつも時平の腰巾着を勤める末社どもの顔ぶれを始め、殿上人や上達部が猶相当に扈従して、平中も亦その中に加わつていた。客人たちの座に着いたのが申の刻を少し過ぎた時分で、宴が開かれると間もなく日が暮れたが、その晩は特に酒杯の進行が激しく、主客共に酔いの循り方が速かであつたのは、旨を啣んでいた定国

や菅根たちの取持ちのせいもあつたであろう。やがて時平が、

「酒ばかりでは面白くない、……………」

と、末座の方へこなしたのを合図に、或る少納言が横笛を取り出して吹き始める。それに合わせて誰かゞ琴きんのことを弾ひく。扇で拍子を取りながら唱歌をうたう。つゞいて箏そうのことや、和琴わこんや、琵琶びわが運び出された。

「御老体々々々、まずあなたからもつとお重ねにならなければ、……………」

「御主人公がそう慎しんでおいでになる手はありませんな。それではわれ々も酒がさめます」

「いや忝かたじけない〜、……………愚者はたゞもう忝うて〜、……………こんな嬉しいことは八十年來始めて〜、……………」

国経が酔い泣きしそうな口調で云うのを、

「あは〜、〜、〜」

と、時平が持ち前の潤かつたつ達な笑いで打ち消した。

「そんなことはお置きなされい。それよりもつと浮き〜と騒さわごうじやないですか」

「いかにも〜」

と云つて、国経は突然声を張り上げて謡った。

「我に酒を勧む、我辞せず、請ふ君歌へ、歌うて遅きこと莫れ。……………」

老人は白氏文集を愛読していて、興に乗ずると、こんな工合に文句を暗誦するのであるが、これが出る時はそろそろ酒が循つて来た證拠であつた。

「……………洛陽の兒女面は花に似たり、河南の大尹頭は雪の如し。……………」

老来量を節してはいても、もとく下地は好きな方で、過せばいくらでも過せる国経は、今宵は自分が主人役として容易ならぬ人を迎え、粗相があつてはならぬと思うところから、最初のうちは努めて引き締めていたのであつたが、何分胸中に抑えきれない喜びが溢れて、而も客人たちの方から頻りに杯を強いられるので、いつか心の緊張が弛んで、上機嫌になつて行つた。

「いや、頭は雪の如しでも、御精力のお盛んなことはお羨しい限りですな」
 そう云つたのは式部大輔の菅根であつた。

「わたくしなどは、老人と申しましても明けて五十歳になつたばかり、御老体から見ますれば孫のようなものですが、近頃めつきり衰えを感じておりますよ」

「そう云つて下さるのは忝いが、もう此の老人もともと駄目です、……………」

「駄目とは何が駄目なのです」

と、時平が云った。

「何も彼も駄目でございりますが、二三年來特に駄目になったものがございましてな」

「あツはゝゝゝゝ」

「玲瓏々々老いたるを奈何にせん」

と、老人が又白詩を唱えた。

二三人の公卿たちが代る／＼立って舞い出した頃から、宴はだん／＼闌になつて行つた。春とは云つてもまだ冬の感じの、うすら寒い宵であるのに、此処ばかりは陽気に花やいで、笑い声と歌声と歓語の聲が沸き返り、人々は皆上衣の襟を外したり、片袖を脱いで下着を出したり、行儀作法を打ち忘れて騒いでいた。

その四

主人の妻、大納言の北の方はこう云う座敷の有様を、御簾のうちにいてさつきから隙見していた。初めのうちは、客人の席のうしろを囲っていた屏風が邪魔になつて見えにく

かつたのであるが、故意にか偶然にか、追い／＼騒ぎがはげしくなり、人々が起つたり居たりするにつれて、その屏風の端が少しずつ畳まれて行き、斜はすかに開いたので、今は左大臣の姿形がほゞ正面に見えるようになった。御簾越しにはあるけれども、左大臣はいそこに、北の方とはな／＼めに畳三四畳を隔てたあたりに、此方を向いて坐っているのが、ちようどその前に燈台が据えてあるので、残るところなく分るのであるが、色白のふつくらした顔が酔いのために紅く火照ほてっていて、眉まゆの附け根をとき／＼癩癩かんぺきが強そうにふるわせるくせはあるけれども、笑うとひどく愛嬌あいぎょうがあつて、眼もとや口もとに子供のよ
うな無邪気さが溢れる。

「まあ、何と云うお立派な、……………」

「やつぱりあゝ云うお方は何処か違つていらつしやいますのね」

お側の女房たちがそつと袖を引き合つて溜息を洩らしたのは、北の方の同感を求めるためであつたらしいが、北の方は眼顔でそれをたしなめて、ただ吸い寄せられるように御簾の方へ体を擦りつけていた。北の方が先ず驚いたのは、主人の国経が常になく酔態すいたいをさらけ出し、だらしない恰好で何か呂律ろれつの廻らない濁だみこえ声を挙げていることであつたが、左大臣もそれに劣らず酔っているらしい。だが此の方はさすがに夫の大納言のような見つとも

ない態ざまはしていない。大納言は坐つていても彼方へよろ／＼此方へよろ／＼し、眼がどろんとして何を見ているのやら分らないが、左大臣は居ずまいも正しく、しゃんとしていて、酔つても威容を崩さない。それでいて絶えず杯に満を引いて、いくらでも酒を呷あおっている。管絃かんげんの合間々に皆が催馬楽さいばらを謡うたうのであるが、左大臣の声の美しさと節廻ふしまわしの巧うまさには、誰も及ぶ者がないように感ぜられる。——但し、これは北の方や附添いの女房たちが左様さように感じた迄であつて、時平が果して音曲おんぎょくの才を備えていたかどうか、別段それを證拠立てるような記録があるのではない。が、時平の弟の兼平は琵琶びわの上手じょうずで、琵琶宮内卿わくくないぎょうと云われた人であつたこと、悴せがれの敦忠も管絃の名手で、博雅はくがの三位さんみに劣らない人であつたこと、などを思い合わせると、或は時平にも多少その方面の天分があつたかも知れず、満まんざら更さらこれらの婦人たちの鼻眉目ひいきめではなかつたでもあろうか。——

北の方がなお気を付けて見ていると、左大臣はさつきから時々ちら／＼と御簾の方へ流ながし眇めを使う。それも最初は遠慮がちな眼つきで、こつそり偷ぬすむように視線を投げ、すぐ又しらを切つていたが、酔いがすゝむに従つてその眼づかいが大胆になり、いかにも様子ありげな、色気たつぷりな表情をたゞえて見るのであつた。

我が門かどを

とさんかうさん練る男

よしこさるらしや

よしこさるらしや

これは催馬楽の「我門^{わがかどを}乎」の文句であるが、左大臣はこれを謡いながら、「よしこさるらしや」の繰り返しのところへ来ると、一段と声に力をこめて唱えた。そして訴えるような眼^{まな}ざしを、臆^{おく}するところなく真つ直ぐ御簾の裡^{うち}へ注いだ。北の方は、自分が左大臣を隙^す見^きしていることを、左大臣が知っているかどうか半ば疑問にしていたのであったが、今は疑う餘地もないと思うと、自分の顔が俄^{にわ}かに赧^{あか}くなるのを感じた。現に左大臣の装束に薫^たきしめてある香^{かう}の匂^{におい}が、此の御簾のうちへかぐわしく匂^{におい}つて来るのを見れば、彼女の衣の薫^{たきもの}物の香も左大臣の席へ匂^{におい}つているに違いない。事に依るとあの屏風の畳まれたのも、誰かゞ左大臣の意を酌^くんで、わざとあんな風に動かしたのであるかも知れない。それかあらぬか、左大臣は御簾のうちにある北の方の顔を、何とかして見届けようとする如く、探るような瞳を挙げてしきりにキョロ／＼するのであった。

左大臣の席からはずつと離れた遙かな末座に、別にもう一人、矢張此の御簾のあたりへ密^{ひそ}かな視線を注いでいる男があるのを、北の方は疾^とうから意識していたが、それは云う迄も

なく平中であつた。女房たちは勿論それに気が付いていたのであるが、今の場合北の方に憚かつて、此の優男の噂をするのを差控えながら、心の中では左大臣と比較して、孰方がより美男子であるかを批判していてもあろう。北の方は、嘗て幾夜となくす暗い闇の燈火のはためく蔭に、夫の大納言の眼をかすめて此の男の抱擁に身をゆだねたおぼえはあるが、こう云う晴れの席上で、歴々の人々の間に伍している彼を見るのは始めてあつた。が、さしもの平中もこう云う座敷では、堂々たる時平の貫禄に押されて、別人のように貧弱に見え、蘭燈なまめかしき帳の奥で逢う時のような魅力がない。それに今宵は誰も彼もが羽目を外して燥いでいるのに、どう云うわけか平中はひとり沈んで、自分だけは酒が甘くないと云いたげな様子をしていたのであつた。

と、時平がそれに眼をつけて、

「佐殿」

と、遠く隔たつた席から呼んだ。

「あなたは今日は妙に萎けておられるね。何か仔細があるんですか」

時平の顔にいたずら好きな子供がするような、意地悪な微笑が浮かんだのを、平中は世にも恨めしそうに横眼で見たが、

「いや、そんなことはございませんが、……………」

と、強^しいて苦しそうな愛想笑いを洩らして云った。

「でも可笑しいですね、酒がちつとも行かんようじやないですか、もつと飲み給え〜」

「十分戴いているのでございます」

「そんなら一つ、得意の猥^{わい}談^{だん}でも聴かせ給え」

「御、御冗談を仰^おつしやつては、……………」

「あツは、、、、、、どうですか方^{かた}々^{がた}々」

と、時平は一座を見廻して、平中を指さしながら、

「此の人は猥^{わい}談^{だん}と惚^{のろ}気^け話^わが頗^{すこ}る得意^がなんです、一席^{いっせき}こゝでやつて貰^{もら}おうじやないですか」

「ようよう!」

「謹聴々々!」

と、皆が拍手したが、平中は泣き出しそんな顔をして、

「御勘弁を〜」

と、頻^{しき}りに首を振るのであった。時平はいよ〜意地悪な笑いを露骨に示して、いつも私に聴かしてくれるのに、なぜ此の席ではやれないのか、聞かれて困る人でもいるのか、ど

うしてもやらないなら、私が素ツ葉すは抜くがよいか、此の間のあの話を、代りに披露ひろうしてやるぞ、など云つて脅迫する。平中はいよくべそを搔いて、拜まんばかりの恰好をして、「御勘弁を〜」

を繰り返すのであつた。

夜はすっかり更ふけ渡つたが、宴はいつ終るとも見えず、馬鹿騒ぎは一層盛んになつて行つた。左大臣は又「我が駒」を謡い出して、

待乳山まつちやま

待つらん人を

行きてはや

あはれ

行きてはや見ん

と云いながら、しまいには伸び上るような風をして御簾の方へ秋波しゅうはを送つた。それから誰か「東屋あづまや」の文句を謡つたり「我家わいへん」の文句を謡つたりした。

「押開いて来ませ、我や人妻、……………」

鮑あはびさだをか石陰子かかげよけん、……………」

「りららりるろ、……………」

そのあとはみんな勝手に、てん／＼ばら／＼に好きなことを我鳴り散らして、誰も他人の云うことなんぞに耳を傾ける者はなかった。

国経の取り乱し方は一段と甚しかった。坐っていても倒れそうになる上半身を辛うじて支えて、

「玲瓏々々老いたるを奈何にせん」

と、まだあの文句を世迷い言のように口号むかと思うと、誰彼の区別なく傍に來た者を掴まえては、

「愚老はたゞもう忝うて／＼、……………こんな嬉しいことは八十年来……………」

と云いながら、ぽろ／＼涙をこぼしつゞけた。それでも感心に、主人の為すべき勤めは忘れず、左大臣が礼を述べて帰り支度をしかけると、かねて今夜の引出物に用意しておいた箏のこつを持つて來させたり、白栗毛と黒鹿毛の見事な馬を曳いて來させたりして披露をした。そして、左大臣がよろめきながら座を立ちかけると、

「殿々、失礼ながら、お足元が心もとない」

と、自分も同じように危い足取りで立ち上つて、

「御車を此方へ着けさせましょう」

と、時平の車を階はしがくし隠まの間へ寄せるように命じたりした。

「あツは、、、、、、、こう見えても私は大丈夫、あなたこそえらい御酩酊ごめいていではないか」

そう云う時平は、これも正体なく酔っていて、車が勾欄こうらんの際きわへびつたりと引き寄せられ、
でも、そこまで歩いて行くことさえ困難に見えた。そして、二三步足を運んだところで、
どしんと臀餅しりもちをついてしまった。

「あ、これはいかん、……………」

「それ、それ、そのようにふらくしておいでなされて、……………」

「何でもない、くく」

そう云つて時平は立ちかけたが、立つと又すぐ臀餅をついた。

「これはく、我ながら醜態きわ極まる」

「それではとても御車にはお召しになれませんな」

定国がそう云うと、

「左様々々」

と、菅根が応じた。

「いつそのこと、今暫く酔いをお覚ましなされてからお帰りになることですか」

「いや／＼、あまり長座をしては主あるじどの殿が御迷惑だ」

「何を仰つしやる！　こんなむさくろしい所ですが、お気に召したらいつ迄でも御ゆつくり願いたい！」

いつの間にか国経は時平に体を擦り寄せて坐つて、その手を執とらんばかりにして口説くどいた。

「殿々、愚老はあなたを無理にでもお引き止めしますぞ、帰ろうと仰つしやっても決してお歸し申しませんぞ」

「ほ／＼、長座をしてもよいと云われるか」

「よいどころの段ではござらぬ」

「しかし私をお引き止めになるなら、もそつと何か、特別のおもてなしをなさる必要がありますな。――」

突然時平の声の調子が変わつたので、国経が見ると、さつきまで赤味を帯びていた顔の色が蒼そうはく白になり、唇の端を神経質にピクピクさせているのであった。

「――今宵は至れり盡せりの御饗応ごきようおうに与あずかり、結構な引出物まで頂戴したことはしまし

たが、まだこれだけでは、はゞか憚りながら此の左大臣を引き止めるには足りませんな」

「そう仰つしやられると穴へでも這入りたい！ 愚老としましては此れが精一杯なのです
が、……………」

「あなたは此れで精一杯だと仰つしやるが、失礼ながらあのそ箏のこゝ馬二匹では、まだ引出物が不足ですな」

「と仰つしやいますと、外に何ぞご御所望の品が
おありでしょうか」

「それをわたくしに云わせなくても、何かそちらにお心あたりがありそうなものじやありませんか。——ねえ、御老体、そう物惜しみをなさるなよ」

「物惜しみとは心外な！ 愚老は何とかして日頃の御恩報じがしたい、御満足が得られま
すなら、どんな物でも差上げたいんです」

「どんな物でも！ ですか、あツはゝゝゝゝ」

と、時平は体をの仰け反らして、さすがにいくらか照れ臭いらしく、例の豪傑笑いをした。

「でははつきりと申しますぞ」

「どうぞ〜」

「もしほんとうに、あなたが口で仰つしやるように、私の日頃の好意に対して、感謝して

おいでになるならば、——ですな。——」

「はい、はい」

「あツは、、、、、、なんぼう酔つ払つておつても、ちと物狂おしいようで、此の先は申しにくい」

「そう仰つしやらずに、どうぞく」

「それは私の館には勿論、やんごとない九重の奥にさえないので、御老体のお手もとにだけあるもの。——御老体に取つて命より大切な、天にも地にもかけがえのないの。——箏のことだの、馬なんかとは比較にならない宝物。——」

「そんなものが愚老の所にございましょうか」

「あります！ たつた一つあります！——さ、御老体、それを引出物に下さい！」

時平はそう云つて、愕然としてゐる老人の眼の中を視据えた。

「さ、それを下さい、物惜しみをなさらない證據に！」

「お、物惜しみをしない證據に！」

何と思つたか国経は、鸚鵡返しに云つた。そして次の瞬間に、座敷のうしろを囲つていた屏風の方へ歩み寄つて、それを手早く押し畳むと、御簾の隙間へ手を挿し入れて、中

に隠れていた人の袂の端をぐいと捉えた。

「左大臣殿、御覧下さい。——愚老の命より大切な、天にも地にもかけがえのない物、あらゆる宝物にまさる宝物、愚老の館より外に、何処を尋ねてもない宝物は此れなのです。

——」

今までぐでんぐに酔いしれていた国経は、急に活を入れられたようにしやんとして立っていた。言葉も呂律が廻らなかつたのが、てきぱきした物云いで、りん／＼と響き渡るように云つた。たゞその大きく見開かれた眼には、何か発狂したような怪しい輝きが満ちていた。

「殿、物惜しみをしない證據に、これを引出物に差上げます。お受け取り下さい！」

時平を始め満座の公卿たちは一言も発せず、眼前に展開した思いがけない光景に恍惚としていた。——最初、国経が御簾の蔭へ手をさし入れると、御簾の面が中からふくらんで盛り上つて来、紫や紅梅や薄紅梅やさま／＼な色を重ねた袖口が、夜目にもしくこぼれ出して来た。それは北の方の着ている衣裳の一部だったのであるが、そんな工合に隙間からわずかに洩れている有様は、萬華鏡のようにきら／＼した眼まぐるしい色彩を持った波がうねり出したようでもあり、非常に嵩のある罌粟か牡丹の花が揺ぎ出たよう

でもあつた。そして、その、人間の大きさを持った一輪の花の如きものは、漸ようよう半身を現わしたところで、まだ国経に袂をとらえられたまゝ静止して、それ以上姿を現わすことを拒んでいるように見えた。国経はやおらその肩へ手を廻して抱きかゝえるようにしながら、もつとその人を客人たちの方へ引つ張つて来ようとする風であつたが、そうされるとなその人は、御簾のかげに身を潜めようとした。顔に扇をかざしているので、目鼻うかがだけは窺うよしもなく、扇を支えている指先さえも袖の中に隠れていて、たゞ両肩からすべつている髪の毛だけが見えるのであつたが、

「おゝー！」

と叫んで、時平は恰あたかも美しい夢魔むまから解き放たれたように、つと御簾の傍へ走り寄ると、大納言の手を振り払つて、自分がその袂をしっかりと掴つかんだ。

「帥そち殿、此の引出物はたしかに頂戴しましたぞ。これでこそ今宵参つた甲斐かいがありました。心からお礼を申します！」

「おゝ、世に二つとない宝物が始めて所を得たのです。愚老こそお礼を申さなければ！」
国経は時平に席を譲ると、屏風の此方へ引き下つて来て、

「方々かたがた！」

と、事のなりゆきを呆然と眺めていた公卿や上達部たちに声をかけた。

「さあ、方々、——御一同はもはや御用はございますまい。そうして待つておいでになつても、恐らく大臣は急にはお出ましになるまいと存ずる。どうぞ御遠慮なく、御自由にお引き取りになつて下さい」

そう云いながら、畳んだ屏風を再びひろげて、御簾の前を囲つてしまった。

意外なことがつきくと起るのに、客人たちは度胆を抜かれて、館の主から「帰れ」と云われても直ぐには動くけしきもなく、興奮しきつた主の顔の、喜んでいるのか泣いているのか判断のつかない眼つきを見ていた。

「さあ、どうぞお引き取りを」

と、重ねて主が促すと、人々の間に漸くざわめきが湧き上つたが、それでもなお、あつさりその場を出て行った者は幾人もいなかった。不承々に立ち上つたものゝ、大部分はへんな眼をして顔を見合わせ、ちよつと出て行きそうにして又立ち止つてしまつたり、柱や戸の蔭にひそんだりして、事件の落着を見届けなければ気が済まないと言ふ風であつた。

此の人たちの好奇心に充ちた視線が、期せずして屏風に囲まれた御簾の方に注がれていた時、屏風の向う側ではどんなことが起りつゝあつたか。——時平は国経が袂の端を彼に

渡して彼方へ逃げて行つたのを知ると、無言でその袂を自分の方へしずかに引いた。そして、今しがた国経がしていた通りに、御簾の隙間へ半身を入れて、うしろから此の大輪の花の如きものを抱きかゝえた。と、さつき屏風の彼方で嗅いた、あの甘いほのかな薫りが今はしたゝか咽せ返るように鼻を撲つのであつた。女はその時までなお扇をかざしていたが、

「憚りながら、もうわたくしのものにおなりになつたのですよ。お顔をお見せになつて下さう」

と、そう云つて時平がそつと袂の上から手をとらえると、手はわな／＼とふるえながら扇を膝のあたりへ置いた。御簾の間には燈火がないので、うたげの席にともっている油の穂先が、屏風に遮られながら遠く此方側へまたゝきを送っているのであるが、そのうすら明りの中に匂うほのじろいものが始めて接するその人の面輪であることが分ると、時平は自分の計畫がいみじくも此処まで運んだことに云いような満足をおぼえた。

「さあ、御一緒に、わたくしの館へ参りましょう」

彼はいきなりその人の腕を取つて肩にかけた。女は引き立てられながらさすがに躊躇するらしく見えたが、でもしなやかに少し抵抗したゞけで、やがてする／＼と体を起して

行くのであった。

屏風の外で待つていた人々は、急には出て来ないであろうと思えた左大臣が、忽ち恐ろしく嵩高かさだかな、色彩のゆたかなものを肩にかけながら物々しい衣きぬすれの音をひびかせて出て来たのに、又驚きを新たにした。左大臣の肩にあるものは、よく見ると一人の上じょうろう藤、

——此の館の主が「宝物」だと云つたその人に違ひなかつた。その人は右の腕を左大臣の右の肩にかけ、面を深く左大臣の背に打つ俯ぶつせて、死んだようにぐつたりとなりながら、それでもどうやら自分の力で歩みを運んでいるのであつたが、さつき御簾からこぼれて見えたきらびやかな袂たけや裾すそが、丈たけなす髪とよじれ合いもつれ合いつゝ床を引きずつて行く間、左大臣の装束とその人の五いつ、ぎぬ衣ぎぬとが一つの大きなかたまりになつて、さや／＼と鳴りわたりながら階はしがくし隱かくしの方へうねつて行くのに、人々はさつと道を開いた。

「帥そち殿、それでは戴いて帰ります！」

「はっ」

と云つて国経は、畏かしこまつて頭を下げたが、すぐ立ち上つて、

「御車、御車」

と云いながら、自分が先に階きざはしを下りると、車の簾すだれを両手で高くかゝげ持った。時平が重く

て美しい肩の荷物を持って扱いながら、喘ぎ／＼車の際まで辿り着くと、雑色や舎人たちが手に／＼かぎす松明の火のゆらめく中で定国や菅根やその他の人々が力を添え、両側から掬い上げるようにして辛うじてその嵩張るものを車へ入れた。国経は簾をおろす時に、「私をお忘れにならないで」

と、一と言云つたが、生憎なことに車の中は真つ暗で、もうその人の顔は見えず、せめて別れの言葉ぐらい聞かしてくるかと思つていゝうちに、あとから乗り込んだ時平の姿で、眼の前が一杯に塞がれてしまった。

その時、——と云うのは、北の方のあとに続いて時平が車に乗った時、下襲の尻が簾から食み出して地に垂れたのを、誰か混雑に紛れつゝ寄つて来て、手に取り上げて、簾の中へ押し入れてやつた者があつたが、それが平中であつたのに気づいた人は殆どなかつた。その夜平中は席にいたゞまれない心持で暫く席を外していたのであつたが、昔の恋人が時平に拉し去られるのを見ては恠えきれなくなつたのであろう。あり合う陸奥紙に、物をこそいはねの松の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

と、走り書きをして、小さく畳んで、不意に何処からか左大臣の車の側に現れ、下襲の尻

を簾の中へ押し込むのと一緒に、人知れずそれを北の方の袖の下へ挿し入れたのであった。

その五

国経は、北の方を乗せた時平しへいの車くるまが供ともの人数を従えて去つて行くのを見送つたまでは、幾分か意識がはつきりしていたけれども、車の影が見えなくなると、俄にわかに緊張が弛ゆるんだせいか、内攻うちこうしていた酔よいが発して、勾欄こうらんのもとにくたくとくずおれてしまった。そしてそのまゝ、簀すのこ子の板敷に倒れ伏して寝入りかけたのを、女房たちが扶たすけ起して寝所へ連れて行き、装束を脱がしたり、床に就つかしたり、枕まくらをあてがったりしたのであったが、当人は一切前後不覚で、それきりぐつすりひと息に眠つた。が、およそ何時間ぐらい過ぎた時分か、へんに襟えりもとがうすら寒く、何処どこからか蓐しとねの中へすう／＼風が入り込むようなので、ふと眼を覚ますと、もう閨ねやの中がしら／＼と暁あけに近いほの明るさになっていた。国経はぞつと身ぶるいをして、なぜこう今朝けさは寒いのか、自分は何処どこに寝ているのか、此処はいつもの自分の寝所と違うのか、——と思ひながら、そこらあたりを見廻すと、眼に触ふれる帳とばりや蓐とばりや、それらに沁しみ着きいている香かうの匂におや、すべて朝あゆう馴染なじみの深い我が家の閨

であることは疑うべくもないのであったが、一ついつもと違ふところは、今朝は自分がひとりぼっちで寝ているのであった。彼も世間の老人なみに早くから眼が覚める方なので、夜明け方の鶏とりの鳴く音を聞きながら、まだすやくと眠っている妻の顔を、ちようど今朝ぐらいのうすら明りの中で打ち眺めるのが常なのであるが、今朝はその顔のあるべきところに、主ぬしのない枕まくらが空むなしく置いてあるばかり。いや、それより何より、いつもはしっかりと北の方に纏まとわり着き、隙間もなく手足を絡からみ着かせて、二つの体が一つ塊かたまりのようになって寝ているのに、今朝は襟えりや腋わきの下や方々に隙間が出来、そこをすうくした風が通り抜けるので、これではいかさま肌寒いのも道理であった。………

今朝に限つてあの人ひとが此処こゝに、自分の腕うでの中に抱かかれていないのはどう云う訳か。あの人は何処へ行つたのか。——国経はそう考えると、何か奇怪な幻げんえい影えいのようなものが頭の隅すみにこびりついていて、それが少しずつ髻ぼうふつとよみがえつて来、朝の光が次第に明るさを増すのにつれて、その幻影もいよ／＼あざやかな輪郭を取つて浮かび上つて来るのを覺えた。彼は何とかしてその幻影を、酔餘すいよの揚句あげくに見た一場の悪夢である、と云う風に思い做なそうとしてみたが、昨日の夕方からの出来事の記憶を、一つ／＼気を落ち着けてじつくりと呼び返しつゝ吟味してみると、どうやらそれは夢ではなくて事実であるらしいことが、

否^{いな}み難^{がた}くなつて来るのであつた。

「讚^{さぬき}岐、………」

と、国経は次の間^まに控えている筈の老女を呼んだ。これはむかし北の方の乳人^{めのと}をしたことのある、四十あまりになる女で、嘗^{かつ}て讚岐介の妻になり任国へ下つて暮すうちに、夫に死なれたので北の方の縁を頼つて来、こゝ数年来大納言家に奉公をしているのであるが、大納言にすれば年の若い北の方を娘のように思うところから、どうかした折には此の女房を娘の母親のように思い、夫婦間のことは勿論、家事^{ばんたん}萬端の相談をしたりするのであつた。

「もうお眼ざめでいらつしやいますか」

と、讚岐はそう云つて枕^{まくらもと}許に畏まつたが、国経は顔を夜着の襟に埋めたまゝ、

「うむ」

と一言、不機嫌に答えた。

「いかゞでいらつしやいますか、御気分は」

「頭痛がして、胸がむかゝする。わしは二日酔いをしたようだ。………」

「何ぞお薬を持つて参りませうか」

「昨夜は大分過^{すこ}したらしいが、どのくらい飲んだであらうか」

「さあ、どのくらい召上りましたやら。……あんなにお酔い遊ばしたのを、ついぞ見たことはございません」

「そうか、そんなに酔つておつたか」

国経はそこで顔を出して、

「讃岐」

と、少し調子を変えて云つた。

「今朝眼がさめたら、わしはひとりで寝ている。……」

「はい」

「これはどう云うことなのか。上は何処へ行かれたのか」

「はい、……」

「はいでは分らん。いったいどう云う訳なのだ。……」

「昨夜のことを、おぼえておいでにならないのでございませうか」

「今少しづつ思い出しているのだが、……上はもう此の館やかたにおられないのだろうか。……

……あれは夢ではなかったのだろうか。……わしは左大臣がお帰りになるうとするのを、無理にお引き止めした。そうしたら左大臣が、箏そうのこと、馬だけでは物足らぬ、もつと立

派な引出物をせい、物惜しみをすると仰せになった。そこでわしはあの命よりも大切な人を、引出物として差上げた。……………あれは夢ではなかったのだろうか」

「ほんとうに、お夢であつたらようございませぬものを。……………」

不意に、何だか鼻をすゝるような音がしたので、国経が顔を上げてみると、讃岐は袖で面を隠して、じつと俯向うつむいているのであつた。

「それでは、夢ではなかつたのか。……………」

「憚はげりながら、何ぼう酔うていらつしやつたにしましても、どうしてあんな物狂おしい真似をなさいましたか。……………」

「もうそんなことを云うのは止せ。今更取返いまさらしのつかないことだ」

「でも、左大臣とも云われるお方が、本気で人妻を奪い取るようなことをなさいましょうか。昨夜のことはお戯たわむれで、今朝はきつとお返し下さるのではございませうまいか」

「そうであつてくれたらよいが、……………」

「何なら、お迎えの人を出して御覧になりましたら、……………」

「そんなことが出来るものか。……………」

国経は又すつぽりと夜着を被かぶつて、

「もうよい、彼方へ行つてくれ」

と、聞き取りにくい濁声だみごえで云つた。

今になつて考えれば、なるほどそれは自分の胸むねに正しく覚えのあることである。氣狂いじみた行為ではあるが、左様なことを仕出来しでかした心理については、自分には説明が付かないでもない。自分は昨夜の饗宴を、平素の左大臣の恩に報いる絶好の機会であると思ひ、出来るだけのもてなしをしたには違ひなかつたが、一方では、自分の力に限りがあつて、到底左大臣を満足させる程の款待かんたいをなし得ないので、耻はがずかしくも齒痒はがゆくも感ずる念が一杯であつた。自分にそう云う自責の心持、——こんな貧弱な饗応をしたのでは相濟まない、何かなもつと喜んで戴くことは、——と云う心持があつた矢先に、左大臣からあゝ云う風に云われ、剩あまつぎえ「物惜しみをするな」とまで云われたのがぐつと答えて、左大臣が所望しょうぼうとあらば、どんな物でも差出す料簡りょうけんになつたのであつた。それに自分は、謎をかけられるまでもなく、左大臣の所望するものが何であるかを、大凡おおよそ察し得たのであつた。昨夜の左大臣は、あの御簾の方へ始終横眼を使つてばかりいた。最初はそれも控え目であつたが、だんく露骨になり、しまいには夫である自分の見ている前で、伸び上つて秋波しゅうはを送つたりした。……：……：自分がいかに老耄ろうもうし、血のめぐりが悪くなつてゐるからと

云つて、あんなにまでされて気が付かずにいられようか。……………

……………国経はこゝまで記憶を辿つて来て、さて、昨夜のあの時の自分の感情が妙な風に動いたことを思い出すのであつた。と云うのは、時平のそう云う眼に餘る行動を見ながら、奇怪にも彼はその無礼を不愉快に感ぜず、却つて幾分かうれいような気がしていたのであつた。……………

……………なぜ自分は嬉しかつたのか。……………なぜ嫉妬を感じないで、得意に感じたのだろうか。……………自分は前から、あゝ云う世にも稀な人を自分が妻にしていることを、無上の幸福としていたのであるが、正直を云うと、世間がその事実に関心でいることが物足りなくもあつたのだ。自分は誰かに、時々自分の此の幸福を見せびらかして、羨ましがらせてやりたかつたのだ。だから左大臣が羨望に堪えぬ顔つきをして簾の奥へ流眊を送つたのを見ては、大いに満足したわけであつた。自分は斯様に老耄し、官位は漸く正三位大納言を以て終る運命にあるけれども、而も自分は、此の年の若い美男子の左大臣にさえ缺けているものを持つている、いや、恐らくは、九重の奥にまします帝でさえも、此れほどの人を後宮に持つてはおられないであろう。自分はそう思うことで云うに云われぬ誇りを感じ、それで嬉しかつたのであつた。……………が、それだけならば誰に話しても分つて貰

えることだけれども、実は自分の胸の中には、又もう一つの感情があった。つまり自分は、二三年来生理的に夫たる資格を失いかけているところから、此のまゝでは、——何とかしてやらなければ、——妻に申訳がないと云う気持が、昂じて来ていたのであった。自分は自分を幸福だと感ずる半面に、自分のような老いぼれを夫に持った人の不幸を、だんく強く感じつゝあつたのだ。尤も世には悲惨な運命に泣く女はいくらもあるので、そのくらいなことを一々不憫が^{ふびん}つていては際限がないけれども、これは普通の、ありふれた女ではないのである。左大臣はおろか、帝の后と云つてもよい程の容貌と品威に恵まれた人が、相手もあろうに無能力者の老翁の伴^{はんりよ}侶となつたのである。自分は最初はその人の不幸を、努めて見て見ないふりをしていたのであつたが、その人のめでたさ、いみじさが、肝^{きも}に銘じて分つて来るに従い、自分のようなものがこれだけの人を独占している罪の深さを、反省しないではいられなくなつた。自分は天下に自分ほどの仕合わせ者はないと思つているけれども、妻の方では何と思つていよう。自分がどんなにその人を大切にしている、いづくしんだにしたところで、妻は内心迷惑こそすれ、決して有難いとは感じてまい。妻は此方が何を問うてもはつきり答えない人なので、お腹^{なか}の中は知るよしもないが、ひよつとすると、此の老翁が早く死んでさえくれたらと、いつまでも長寿を保っている夫を恨

み、その存在を呪のろっているのではなからうか。……………

……………自分はそれに気が付くにつれ、もし適当な相手があつて、此の気の毒な、いとしい人を、今の不幸な境涯から救い上げ、真に仕合わせにしてやる事が出来るのであるなら、進んでその人に彼女を譲つてやつてもよい、いや、譲るべきが至当である、と思うようになったのであつた。どうせ自分の餘命はいくばくもないのであるから、晩おそかれ早かれ、彼女にそう云う運命が廻つて来ることであらうけれども、女の若さと美しさにも自おのずから限りがあることを思えば、彼女のためには一日も早くそうなつた方がよいのである。自分も彼女から死ぬのを待たれていくくらいなら、今から死んだつもりになつて、彼女の半生を明るくしてやりたい。恋しい人を此の世に遺のこして死んだ人間が、草葉の蔭からその人の将来を絶えず見守つてやるように、自分は生きながら死んだと同じ心持になるのだ。そうしてやつたら、彼女も始めて、此の老人の愛情がいかに献身的なものであつたかと云うことを、理解するであらう。その暁にこそ、彼女は此の老人に向つて無限の感謝と萬ばんこく斛の涙をそぐであらう。彼女は恰あたかも、故人の墓に額ぬかすくような気持で、あゝあの人は私のためにこんなに親切にしてくれた、ほんとうに可哀そうな老人であつたと、泣いて礼を云つてくれるであらう。自分は何処か、彼女からは見えない所に身を隠して、餘よそ所ながら彼女のその涙

を見、その声を聞いて餘生を送る。その方が、いとしい人から恨まれたり呪われたりして暮すよりは、自分としてもどんなに幸福であるか知れない。……………

自分は昨夜、左大臣のあのしつっこい所作しぐさを見ているうちに、平素胸中にわだかまっていたそう云ういろ／＼なもや／＼が、酔いが発するのと共に次第に湧き上って来るのを覚えた。いったい此の人が、そんなにも自分の妻に気があるのだろうか。もしそうならば、自分が日頃夢見ていたことが、或は実現あるいされるかも知れない。自分が本気で、その計畫を實行に移すつもりなら、今こそ無二の機会であり、此の人こそその資格のある人物である。官位、才能、容貌、年齢、あらゆる点から云つて、此の人こそ、自分の妻にふさわしい相手である。此の人ならば、ほんとうにあの人を幸福にしてやる事が出来るのである、と、自分はそう思つたのであつた。

自分の心にそう云う考が萌きざしていたところへ、左大臣があんな工合に積極的に出て来たので、自分は一も二もなかつた。自分の念願と左大臣の念願とがはからず合致したことに、自分は何どく感激した。一つには左大臣の恩に報い、一つにはいとしい人への罪のつぐないが出来ると思うと、自分は有頂天になつた。そして咄嗟とつさにあゝ云う行動に出てしまった。

……………あの瞬間にも、お前はそんなことをしてよいのか、いくら恩返しをすると云つても、

餘り寛大過ぎはしないか、……酔った勢で飛んだことをして、覚めてから地団太蹈むのではないか、……お前が愛する人のために献身的になるのはよいが、果してお前はその後、後の孤独に堪えられるのか、と云う嘔きが聞えないでもなかったのであるが、なに構うものか、後のことは後のことだ、善と信じて疑われないなら、酒の勢を借りてゞも断行すべきだ、生きながら死んだ人間になる覚悟をした者が、何で孤独が恐いものか、……と、強いて自ら危惧の念を嘲って、とう／＼あの人の袂の端を、左大臣に執らせてしまったのであつた。……

国経は、昨夜の自分の行動がどう云う動機に基づいていたかを、今は詳細に突き止めることが出来るのであつたが、でもそのために少しでも心の憂鬱が軽くなるのではなかつた。彼はしずかに夜着の中に顔を埋めて、ひし／＼と迫る悔恨の情に身を委ねた。あゝ、己は何と云う軽卒なことをしたのか。……いくら恩返しのためだからと云つて、恋しい妻を人に譲るなんと云う馬鹿をする者があるだろうか。……こんなことが世間に知れたら、全く物笑いの種でしかない。……左大臣だつて感謝するよりは舌を出して可笑しがつておられるだろう。あの人にしたつて、熱狂的な愛情から出た行動であることを理解しないで、却つて己の薄情を恨んでいるだろう。……実際、左大臣のような人なら他にいくら

でも美しい妻を求めることが出来るけれども、自分があの人を逸してしまつたら、二度と再びこんな所へ誰が来てくれよう。それを考えたら、自分こそ最もあの人を必要としたのだ。自分は死んでもあの人を手放すべきではなかつたのだ。……：昨夜は一時の興奮に駆られて、孤独なんか恐くはないような気がしたけれども、今朝覚めてからの数時間でさえこんな辛いのに、此れからずっと此の淋しさがつゞくとしたら、何として堪えて行けるであろう。……：国経はそう思つた途端に、涙がぼろ／＼とこぼれて来た。老いれば小児に復ると云うが、八十翁の大納言は、子供が母を呼ぶように大きな声で泣き喚きたか

その六

妻を奪われた国経が、恋慕と絶望に苛まれつゝその後なお三年半の歳月を生きた間のことは、後段滋幹のくだりに於いてやゝ詳細に触れる折がある。今は暫く筆を転じて、あの夜あの車の中へ「物をこそ」の歌を投げ入れた平中の方へ叙述を移そう。

平中も亦、国経ほどではなかつたにしても、やゝそれに似た、或る後味のほろ苦いものを

嘗めさせられたのであった。もとく此の事の起りは、去年の冬の或る夜、彼が本院の館に伺候した折、左大臣からあの北の方のことをいろく尋ねられたので、ついうつかりと、好い気になつておしやべりをしたのが始まりであることを思えば、彼は誰を恨むよりも、己れの浅慮を恨まねばならない。いったい彼は、「われこそは当代一の色事師である」と己惚れているところへ持つて来て、おつちよこちよいの癖があるので、しばく時平に巧い工合におだてられて、泥を吐かされるのであるが、それにしても、もしあの当時時平があゝ云う暴挙に出るであろうことが豫想されたら、あんなおしやべりはしなかつた筈であつた。彼も、此の道にかけては油断のならない左大臣が、あの北の方のことを知つたら何かいたずらをしはしないか、と云う懸念は抱いたけれども、自分のような官位の低い輕輩と違つて、まさかに朝廷の重臣である人が、そう輕々しく夜遊びに出かけ、他人の家に忍び込んで北の方の閨へ這い寄る、と云う訳にも行くまい、そこは一介の左兵衛佐の方が氣楽だと、そう思つて安心していたので、あんな工合に、衆人環視の中に於いて堂々と人妻を浚つて行くような派手なことが可能であろうとは、全く考え及ばなかつたのであつた。彼に云わせれば、妻は夫の眼を掠め、夫は妻の眼を掠めて、無理な首尾をし、危い瀬戸を渡り、こつそりと切ない逢う瀬を楽しむところにこそ恋の面白味は存するのである。地位

や権勢を利用して他人の所有物を強奪ごうだつするのでは、身みも蓋ふたもない野暮やぼな話で、自慢にも何もなりはしない。左大臣のやり方は、他人の面目や世間の掟おきてを踏み躪にじつた傍若無人ぼうじやくぶじんな行為であるのみか、色道の方でも仲間の仁義を無視した仕方、あれでは色事師の資格はないと云うべきである。そう思うと平中は、何か知ら不愉快なものが胸に残るのであった。女に好かれる男の常として、なまけ者ではあるけれども、洒脱しゃだつで、のんきで、人あたりがよくて、めつたに物にこだわらない彼なのであるが、今度は例になく、時平のしたことが腹が立つてならなかった。

元来彼がああの方の方に寄せていた感情は、前にも云うように通り一遍の色恋よりは深いものがあつたので、あの当時もしあのまゝで進んだならば、まだもつと関係が続いたかも知れないのに、彼にしては柄がらにもなくあの好人物の老大納言に惻隱そくいんの情を催して、これ以上罪を重ねることが厭いとわしくなつたところから、努めて彼女のことを忘れるようにして、遠のいたのであつた。時平は勿論彼のそう云う胸中を知つていよう筈はないけれども、それにしても平中は、時平のためにその折角の心づかいを無駄にされてしまったのである。平中は罪を重ねると云つても、たゞ内々で大納言の妻である人と契ちぎり、とき／＼数時間逢つていたに過ぎないのであるが、時平は大納言に僅かばかりの恩を売り、あの老人を前

後不覺に酔わしておいて、彼が命よりも大切にしているものを、あつさりと自分の所有に移した。平中の場合と時平の場合と、老人に取って執方が餘計残酷であるかは言を俟たない。平中は今、自分の過去の恋人がたま／＼彼の手の届かない貴人の許へ拉し去られたと云うだけのことに、遣る方ない忿懣を感じているのであるが、老大納言の災厄はなか／＼そんな生やさしいものではない。而もあの老人がそう云う災厄を蒙むるに至つたのは、平中が時平に詰まらぬおしやべりをしたからなのである。平中は、老人を不幸に陥れた元兇んぎょうは自分であり、老人は何もそのことを知らずにいるのだと思うと、何と詫び言を云つてよいか分らないのであつた。

だが人間は身勝手なもので、平中にして見れば、自分よりは老人の方が比較にならぬほど気の毒なことは分つていながら、馬鹿を見たのは誰よりも自分であると云う気がして、ひどく忌ま／＼しいのであつた。それと云うのが、何分今云つたような事情もあつて疎遠になつたのであるから、もはやその人に興味を失つたとは云つても、実のところはまだ心底から忘れ去つていたのではなかつた。もつとはつきり云うならば、一往は忘れていたのだけれども、時平がその人に好奇心を抱いていることが明かになるや否や、意地悪くも一旦失いかけていた興味が、猛然と復活して来たのであつた。彼は去年のあの晩以来、時平が

急に伯父の大納言に接近し始め、しきりに歡心を求めるようになり出したのを、何となく不安な気持ちで眺めながら、それにしてもどう云う積りつもであろうかと、密ひそかに時平の意図を疑い、事件のなりゆきに注意を怠らなかつたのであるが、恰あたかもその矢先に、あの饗宴の話が持ち上り、自分もそれに随行するように命ぜられたのであつた。

あの晩、平中は虫が知らすと云うのか、今に何かゞ起るのではないかと云う豫覺があつて、最初から憂鬱になつていた。彼は左大臣が自分を此の席に加えたことを、必ず訳がありそうに感じていたが、宴が始まると非常な速度で酒が進行し、左大臣や取巻き連中が寄つてたかつて老翁を酔わせるようにしたり、左大臣が一方ではあの御簾みすの方へ頻ひん々と色目を使い、一方では平中を掴つかまえて変な皮肉を浴びせたりしたので、一層不安が募つつたのであつた。彼は時平が腕白小僧のように眼を光らして、泥酔した顔を火照ほてらし、喚わめき、唄い、笑うのを見ると、いよゝゝ何か大きな危険が御簾の中の人の上に迫りつゝあるように見え、それにつれてだんゝ昔の愛情が、昔と同じ強さを以て蘇よみがえ生なまつて来るのを覺えた。そして時平が簾れん中ちゆうに闖ちん入にゆうした時は、座に堪えられず慌てゝ席はすを外したのであつたが、やがてその人が車に乗せられて連れて行かれようとするけはいに、又じつとしていられないで、車の際へ走り寄つて、夢中であの歌を投げ込んだのであつた。

その夜平中は、再び警固けいこの人数に加わって車の跡に付き随い、左大臣の邸まで供をして行って、そこからひとりとぼくと深夜の街を家路に就いたが、その途々も、一步は一步毎ごとに恋しさが増して行つた。行列が本院の館やかたに着いて、その人が車から下りる時に、せめて一と眼逢えもしようかと願つていたのに、とうとうその望みも空しく終り、もはや永久に隔絶し去つたことを思うと、更にその人を愛惜あいせきする念が燃え上つて来るのであつた。自分はあるの人をまだこんなにも恋していたのか、あの人へ寄せる熱情が、どうしてこんなにも消えずにいたのかと、彼は自分を訝あやしまずにはいられなかつたが、蓋けだし平中の思慕の情は、夫人が彼の及び難い高根たかねの花になつたと云う事實に依つて、挑ちようはつ発はつされたところもあろう。つまり夫人が老大納言の北の方であるうちは、いつでも自分の欲する時に撚よりを戻すことが出来たのに、今やそのことが不可能になつたので、そのための口惜しさが重おもな原因であつたのだと、云えなくもあるまい。

因ちなみに云うが、前掲の平中の「物をこそ」の歌は、古今集には読人よみびとしらずとして載つており、「物をこそいはねの松の」が「思ひ出づるときはの山の」となつてゐる。又十訓抄じゅうしんしょうは此の歌の作者を国経としてゐるが、その文に曰いわく、

時平公はすべておごれる人にておはしけるにや、御をちの国経大納言の室しつは在原棟ありわらむねや

梁なの女なりけるを、たばかりとりて我が北の方にし給ひけり、敦忠卿の母なり、国経卿
 歎き給ひけれども、世のきこえにはゞかりてちから及ばざりけり

思ひ出づるときはの山の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

此の歌は、国経卿その比ころよみ給ひけるとぞ

と。なるほど、歌としては「物をこそ」より「思ひ出づる」の方が格調が高いように感じられるし、又これを国経老人が詠んだと云う風に考えて見るのも哀れが深いが、そう云う詮議せんぎ立ては此の小説の埒らちが外であるから、今は孰方どちらでもよいとしておこう。たゞ、こゝにもある通り、時平は夫人在原氏をたばかり取る目的で連れ去つたのであるから、もちろん明くる朝になつても大納言の所へ返して寄越しはしなかつた。それどころか、豫あらかじめしつらえて置いた寢殿の奥の一と間に住まわせて寵ちやうあい愛したので、翌年には早くも後の中納言敦忠である男子を生むに至り、遂には世人も此の夫人を貴んで「本院の北の方」と呼ぶようになった。気の弱い国経はそんな有様を見ながらどうすることも出来ず、今昔物語の叙述に従えば、「妬ねたく悔しく悲しく恋しく、人目には我が心としたる事のやうに思はせて、心のうちにはわりなく恋しく」思いつゝ遣やる瀬せない日を送つたのであるが、平中はなおあ

きらめ切れず、大胆にも今は左大臣の妻である人に、隙があつたら密かに云い寄ろうとしたのであつた。後撰集卷十一恋三の部に、「大納言国経朝臣の家に侍りける女に、いと忍びて語らひ侍りて行末まで契りける比、此の女俄かに贈太政大臣（時平）に迎へられて渡り侍りにければ、文だにも通はず方なくなりなければ、かの女の子の五つばかりなる、本院の西の対に遊び歩きけるを呼び寄せて、母に見せ奉れとて腕に書きつけ侍りける。平たひらのさだぶみ
定文」として、

昔せしわがかねごとの悲しきは

いかに契りし名残なるらん

と云う歌が載っているのは、その何よりの證據であるが、この歌のあとに又、「返し、読人しらず」として次のような歌が見えるのは注目に値いする。――

うつゝにて誰ちぎりけん定めなき

夢路にまよふ我は我かは

時平は国経や平中とのいきさつがあるので、新夫人の身边を油断なく見張らせ、めつたな人は寄せつけぬように用心したであろうことは想像に難くないのであるが、平中はいかにかして警戒の目をくゞり、幼童を手馴ずけて歌の取次をさせることには成功したのである。

此の幼童と云うのは、十訓抄には「かの女の若君の、とし五つばかりなるが」とあり、世継物語にも「若君のかひなに書いて」とあつて、夫人在原氏と国経との間に生れた男の子、後の少将滋幹しげもとのことなのであるが、蓋し此の児だけは、母なる人が本院の館へ連れ去られた後も、乳人めのとなどに伴われて自由に入出入りすることを許されていたか、又は大目に見て貰つていたのであつた。如才じよさいのない平中はかねてからそれに眼をつけ、巧く此の児に入つていて、或る日此の児が本院の館へ来、母が住んでいる寢殿の、西の対屋たいのやで遊んでいるところへ行き通わして、すかさず取次を頼んだのであろう。それにつけても、彼が何とかしてその人に近づこうと思ひ、暇があれば此のあたりをうろくしていた情況が察しられるが、少年の腕に歌を書いたとは、急の場合で紙などの持ち合わせがなかつたのか、紙では却つて落ち散る恐れがあつたからであらうか。北の方は、我が子の腕に書いてある昔の男の歌を読んで、ひどく泣いたが、やがてその文字を拭ぬぐい取つて、「うつゝにて」の返歌を、同じように腕に書き記し、「これをその方かたにお見せ」と云つて我が子を突き遣ると、自分は慌あわて、几帳きちようのかけに身を隠した。

今を時めく左大臣の北の方に、こんな工合にして平中が取次を頼んだのは一度や二度ではなかつたと見えて、大和物語には又別な歌が伝わっている。――

ゆくすゑの宿世すくせも知らず我がむかし

契りしことはおもほゆや君

北の方はこれにも返歌を与えたらしいのであるが、生憎あいにくその歌は残っていない。が、文を通わすことは出来ても逢うことは許されなかつたので、さしもの平中も次第に望みを失つて匙さしをなげたらしく、やがて此の夫人との関係は果敢はかない終りを告げたのであつたが、そうなるに自然、此の好色漢の心は、再び嘗かつてのもう一人の恋人、あの侍従の君の方へと傾いて行つた。それと云うのが、此の人も左大臣家の女房として、同じ本院の館のうちにいるのであるから、夫人の方が脈がないと極きまれば、平中としては手ぶらですごく引込む気になれず、もとく嫌きらいでも何でもなかつた此の人を、せめて此の際物にしななければ自分の男が廢すたつてしまうように、恐らくは考えたことでもあろう。しかし意地の悪いことにかけては一と通りでない侍従の君が、今となつては尚更おいそれと平中に靡なびく筈はなかつた。もし平中があの時翻弄ひんろうされながらも一途いちずに熱意を失わないで追い廻したら、結局試験に及第したことになつて、許されたのに違ちがひないのであるが、途中で脇道わきみちへ外それたゝめに、相手はすっかり機嫌を損じて一層旋毛つむじを曲げてしまい、もう何を云つて来ても鼻であしらつて、てんで取り上げないのであつた。

一人の恋人は他人に奪われ、もう一人の恋人には手きびしくはねつけられた平中が、色いろこ事師としの面目にかけてもと、必死になつて侍従の君に泣きを入れたいきさつは、煩わづらわしいので茲こゝに詳述するのを避けよう。読者は世にも自尊心の高い、男を憫じらすことに特別な興味を抱く侍従の君が、再び前と同じような、或は前よりも何層倍か苛酷かこくな試練を平中に課したのであるうことを、そして平中が、今度は実に辛抱強く一つ一つの試練に堪えて、兎とにも彼女かみの誇りを満足させ、許しを得る迄に漕こぎ着けたやゝこしい経路を、宜しく想像すべきである。が、漸く平中も思いを遂げて、長い間のあこがれの的であつた人と逢う瀬を楽しむ境涯きようがいになつたものゝ、それから後も皮肉屋の女の癖は改まらず、やゝもすれば意想外な悪戯いたずらを考え出して黜なぶりものにし、目的を果たさずに歸つて行く男のあとから舌を出したり、べかこうをしたりすることが、三度に一度ぐらいは必ずあるので、平中もしまいには業ごうを煮やして、糞くそ、忌ましくしい、いつ迄馬鹿にされているのだ、こんな女を思い切れないなんてことがあるものかと、何度か決心をしては、何度か誘惑に負ける、と云うようなことを繰り返していたのであつたが、あの今こん昔しやく物語や宇治拾遺物語うじしゆいに出ている有名な逸話は、多分その頃の出来事だったのであろう。聞くところに依れば、此の逸話は故芥川龍之介氏の著書にも紹介されているそうであるから、読者の多くは既に知つ

ておられるであろうが、それを読まない人々のために、今その大要を物語ることにしよう。さて平中は、何とかして侍従の君のアラを捜し出してやりたい、いくらあの女が非の打ちどころのない美婦人であるからと云つて、結局は普通の人間に過ぎないのだと云う證據を見たら、これほどに迷い込んだ夢もさめて、愛憎を盡かすことが出来るであろう、と、そう思った末に考えついたのは、あのようなみめうるわしい女であっても、その体から排泄するものは、われ／＼と同じ汚物であろう、ついでは何とかしてあの女のお虎子を盗み出し、中にしてあるものを見届けてやりたい、そうしたら己も、あんな顔をしてこんなむさい物を出すかと思つて、一遍に厭気がさすであろう、と云うことであつた。

ついでながら、筆者はその時分のお虎子がどんなものであつたかを知らない。今昔にはたゞ「筥」と云つてあるが、宇治拾遺には「かはご」とあるので、皮で造つた筥が普通だったのであろうか。何にしてもそう云う地位の女房たちは、筥の中に用を足して、それを時々召使の女に捨てに行かしたのであつた。で、平中が例の局のあたりへ行つて物蔭にひそみながら、筥の始末をする召使の出て来るのを待つていと、或る日、年の頃十七八の、可愛らしい姿形をした、髪あこめの長さは袖たけの丈に二三寸足りない程なのが、瞿なでしこ麦重ねの薄物の袖を着、濃い袴はかまをしどけなく引き上げて、問題の筥を香染めの布に包み、紅い色紙いろがみに絵

を書いた扇でさし隠しながら出て来たので、こっそり跡をつけて行って、人目のない所へ来た時、不意に駈け寄って筥に手をかけた。

「あれ！ 何なさいますの」

「ちよつと！ ちよつと此れを……」

「あれ！ 此れはあなた……」

「いゝんだよ、分つてるよ！ ちよつと寄越し給え」

女が呆れている隙に、平中はすばやく筥を奪い取って一目散に走り去った。

後生大事にその品物を袂のかげに抱えながら、我が家へ逃げ帰った平中は、一と間のうちに閉じ籠つてあたりに誰もいないのを確かめてから、先ずそれを恭しく座敷にすえて、とみこうみした。これが自分の深くも心を打ち込んだ人の物を入れてある容器かと思うと、直ぐには蓋を開けるのが惜しい気がして、なおよく見ると、普通にあるような皮籠ではなくて、金色の漆の塗つてある立派な筥であつた。彼は改めてそれを手に取り、上げて見たり、下げて見たり、廻して見たり、中の重みを測つて見たりしていたが、やがて恐るゝ蓋を除けると、丁子の香に似た馥郁たる匂が鼻を撲つた。不思議に思つて中を覗くと、香の色をした液体が半分ばかり灑んでいる底の方に、親指ぐらいの太さの二三寸の長さの

黒っぽい黄色い固形物が、三きれほど圓くかたまっていた。が、何しろそう云うものらしくない世にもかぐわしい匂がするので、試みに木の端きれに突き刺して、鼻の先に持って来て見ると、あの黒方くろほうと云う薫物たきもの、——沈しんと、丁子ちようじと、甲香こうこうと、白檀びやくだんと、麝香じやくかうとを煉り合ねわせて作った香の匂にそっくりなのであった。

「中を突き刺して鼻にあて、嗅げば、えも云はず馥かぐはしき黒方の香にてあり、すべて心も及ばず、これは世の人にあらぬなりけりと思ひて、これを見るにつけても、いかで此の人に馴なれ睦むつびんと思ふ心狂ふやうにつきぬ」とは今昔の描写であるが、要するに、たゞの人間に過ぎないと云う證據を見てあきらめようとしてかゝったのが、却つて反対の結果を生み、なか／＼愛憎を盡かすどころではなかつたのであった。でも平中は、あまり不思議でたまらないので、その筥を引き寄せて、中にある液体を少し啜すつて見た。と、やはり非常に濃い丁子の匂がした。平中は又、棒ぎれに突き刺したものをちよつぱり舌に載せて見ると、苦い甘い味がした。で、よく／＼舌で味わいながら考えると、尿にようのように見えた液体は、丁子を煮出した汁であるらしく、糞のように見えた固形物は、野老ところや合あ薫物あわせたきものを甘葛あますらの汁で煉り固めて、大きな筆つかのつかに入れて押し出したものらしいのであったが、しかしそうと分つてみても、いみじくも此方の心を見抜いてお虎子まるにこれだけの趣向を凝こらし、男

を悩殺するようなことを工むとは、何と云う機智に長けた女か、矢張彼女は尋常の人ではあり得ない、と云う風に思えて、いよ／＼諦めがつきにくく、恋しさはまさるのみであった。

人間の運は、一遍悪い方へ曲り始めると何処まで曲るか分らないもので、さすがの平中も、侍従の君のお虎子の匂を嗅いでからと云うものは、何処へ行っても色事が成功せず、悉く失敗つゞきであった。まして侍従の君はます／＼驕慢に、残酷になり、彼が熱を上げれば上げるほど冷かな仕打をし、もう少しと云う所へ来ては突つ放すので、可哀そうな平中は、とう／＼それが原因で病氣になり、悩み死に、死んでしまった。——「いかで此の人に逢はで止みなんと思ひ迷ひける程に、平中病み付きにけり、さて悩みける程に死に、けり」と、今昔物語ではそうなっているのである。尤も、こゝに一つ書き洩らしてならないことは、十訓抄に依ると、侍従の君は本来平中の女であったのを、これも時平が邪魔をして横取りをした、と云うことになっている。そこで筆者が想像するのにもと／＼此の婦人は本院の館に仕えていた女房なのであるから、恐らくは早くから時平が手を着けていなかった筈はなく、平中はそれを知らずにか、或は知りつゝか、三角関係を結んだのであろう。されば、お虎子の一件を始めとして侍従の君の彼に対するさま／＼な悪戯の数々

は、ひよつとすると背後で此の女を操っていた左大臣の入れ智慧であつたかも知れない。そうだとすれば、平中を殺したのは時平であると云うことにもなる。

その七

筆者は前に、平中の歿年は延長元年とも六年とも云われていて、確かでないと言うことを記した。今、侍従の君のことが原因で病死したと云う。今昔の記事に従えば、何となく平中の方が時平より先に死んだような感じを受けるが、前掲の後撰集の詞書などを読むと、矢張平中は最後まで生きていたのであろうか。だがまあそれも執方でもよいとして、北の方奪取事件があつてから四五年の後、延喜九年四月四日に、時平が三十九歳の若さを以て卒去したことははっきりしている。

此の左大臣が有為の材を抱いて早死をしたのは、積る悪業の報いであるように当時の人々を見たのであるが、就中その報いの最たるものは、菅公の怨霊の祟りであるとされたのであつた。これより先、菅公が筑紫の配所で薨じたのは延喜三年二月二十五日であるが、同六年の七月二日には、時平と共に菅公讒奏の謀議に加わつた右大将大納言

定国が四十一歳を以て卒し、同八年十月七日には、これも時平の一味であつた参議式部大輔菅根が五十三歳を以て卒した。而も菅根の場合は、雷神と化した菅公の靈に蹴殺されたことになつてゐるが、菅公が雷になつて生前の怨みを報じたと云う怪異談のうち、時平とその一族に關係のある部分を、以下に少しく述べて見よう。

菅公の靈が始めて姿を現わしたのは、こうきよ 薨去の年の夏、或る月の明かな夜、五更ごごうが過ぎて天がまだ全く明けきらない頃、えんりやくじ 延暦寺第十三世の座主ざす法性ほつしょう房ぼう尊意そんいが四明が嶽の頂に於いてさんみつ三密の觀想を凝こらしている時であつた。中門のあたりと覺おぼしい所にほとくと戸を叩く者があるので、開けて見ると、亡くなつた筈の菅丞相がたゝずイんでいた。尊意は胸騒ぎを隠しながら、うやく 恭しく持佛堂に請しやうじ入れて、深夜の御光臨は何御用にて候哉せうろうやと問うと、丞相の靈が答えて、自分は口惜しくも濁世じよくせに生れ合わせて無実の讒奏を蒙こうむり、左遷流罪させんるざいの身となつたについては、その怨みを報ぜんために雷神となつて都の空を翔あまがけり、鳳闕ほうけつに近づき奉ろうと思つてゐる、此の事は既に梵天ぼんでん、四王、閻魔えんま、帝釈たいしやく、釈やく、五道冥官みようかん、司令、司録等の許しを得ているので、誰に憚はぶるところもないのだが、たゞ貴僧は法驗ほうげんがめでたくおわしますので、貴僧の法ほうりき力りきで抑えられるのが一番恐ろしい、何卒なにとぞ年来の師壇の契ちぎりを思つて、たといその折朝廷からお召しがあつても、お請うけにならないように願ひ

たい、自分は此のことを申し上げたいと存じて、只今態々筑紫から参つたのです、と云うのであつた。

そこで尊意は、おん歎きの次第は御尤もであるけれども、古えより賢人が小人のために禍を蒙つた例は珍しからず、貴下御一人に限つた運命ではないのであるし、凡そ世の中は無道なものなのであるから、左様にお恨みなさるのは浅ましゆう存ずる、どうかそのようなお考は思い止つて戴きたい、だが、そう云つても貴下と愚僧とは年来のよしみも深いことなので、折角のお頼みとあるなら、たとひ眼を抜かれてもお言葉に従つて、宣旨を御請けしないことに致しましょう、但し天下は皆王土であり、愚僧も王民の一人である上は、もしお召しの宣旨が数度に及んだら、二度まではお断り申上げるけれども、三度目にはお請けしなければなりませんまい、と、そう答えると、丞相の霊が忽ち顔色を変じて凄じい形相になつた。尊意が、咽喉が渴いておいでしよう云つて柘榴をすゝめたのを、丞相は取つて口に啣んでひしひしと噛み砕き、妻戸のふちに吐きかけたかと思つと、見る／＼一条の火焰となつて燃え上つたが、尊意が灑水の印を結ぶと、たちどころにその火が消えた。

それから間もなく、洛中の空に黒雲が蔽い廣がつて大雷雨が襲来し、風を起し雹を降ら

して、宮中の此処こゝ彼処かしこに落雷した。滿廷の朝臣たちが戦おのき恐れ、或は板敷の下に這はい入り、或は唐櫃からびつの底に隠れ、或は畳を担かついで泣き、或は普門品ふもんほんを誦ずしなどする中で、時平がひとり毅然きぜんとして剣を抜き放ち、空に向つて雷らい霆ていを叱咤しつたしたのは此の時の話であるが、その後風雨がなお止まず、遂に鴨川の洪水こうずいを見るに至つた。法性房尊意も宣旨が三度に及んだので、已やむを得ず参内して、法力を以て雷電を取り鎮め、帝のおん悩みを除いたのであつたが、その時尊意の乗つた車が鴨川の浜にさしかゝると、水が自然に退ひいて車を通した。又宮中に於いて尊意が加持祈祷かじきとうしている時、帝は夢に不動明王ふどうみやうおうが火焰の中で声を厲はげまして呪文じゆもんを唱えていると見給い、おん眼がさめて御覧になると、それは尊意の読ど経きやうの声であつたと云う。

しかし尊意の法力も度重なつては効を奏さなかつたのか、その後五年を経へ、八年の十月には菅根朝臣が電撃を受けて震死した。時平は九年の三月頃から何となく所労の気味で床についたが、菅丞相の怨霊がしばしば枕頭ちんとうに現れて呪いの言葉を洩らすので、陰陽師おんみやうじや医師を招いて、さま／＼の祈祷、療治、灸治きゆうじ等をして見るけれども一向に利きき目がななく、今はたゞ死を待つばかりの状態となつた。一家一門の悲歎やる方なく、此の上は高德ひじりの聖を聘へいしてその法力に縋すがろうと云うことになつたが、それには当時天下にその名が著聞

していた浄蔵法師を措いて他になかった。此の浄蔵と云う僧は、昌泰三年の昔、菅公がまだ右大臣として時平と昇進を競っていた頃、「離朱の明も 暎 上の塵を視る能はず、仲尼の智も 篋 中の物を知る能はず云々」の句のある一書を菅公に呈して、明年必ず公に禍の及ぶであろうことを告げ、早く官を退いて保身の術を講ずべきことを諷した文章博士三善清行の第八子で、母は弘仁天皇の孫女であった。幼にして聡敏比なく、四歳にして千字文を読み、七歳にして出家せんことを求めたが、十二歳の時宇多上皇に見出されて、上皇の法の弟子となつた。その後上皇は勅して彼を叡山に上らせて登壇受戒せしめ給い、玄昭律師に附して密教を学ばしめ給うたが、生来多才多藝の人で、頭密の両宗は勿論のこと、十種に餘る学問技術を身につけていたと云われ、医道、天文、悉曇、相人、管絃、文章、卜筮、占相、舟師、絵師、験者、持経者等々の道に練達して、音曲などの諸藝にかけても肩を並べる人がなかつたと云われる。左大臣家では此の浄蔵を懇請したので、浄蔵が行つてみると、既に時平の面上に死相が現れているので、もはや定業は免れ難く、たといいかよの術を施しても萬死に一生を得ることはむずかしい旨を申したのであつたが、病人も、付き添う家族の人々も、頻りに乞うて止まないもので、辞するに由なく、兎も角も加持祈祷に努めた。折柄浄蔵の父の清行も見舞いに行つて枕頭

に坐していたが、浄蔵が一心に祈りつゞけると、病人の左右の耳から青龍が出て口より火焰を吐き、清行に向つて云うのに、自分は生前尊閣の諷諫を用いなかつたゝめに左遷の憂き目を見、筑紫の空に流寓して果敢ない最後を遂げたのであるが、今、梵天帝釈の許しを得、雷となつて自分に辛かつた人々に怨みを報じようとしているのに、尊閣の息浄蔵が法力を以て妨げをなし、自分を降伏させようとするのは心外である、尊閣願わくは浄蔵法師を制せられよ、と云うのであつた。清行はそれを聞いて恐れ畏み、浄蔵に命じて直ちに祈祷を中止せしめたが、浄蔵が病室を退去するや、須臾にして時平は事切れてしまつた。

宇多上皇は、上皇の法の弟子である浄蔵が左大臣の邸に於いて最後まで加持祈祷の勤めをせず、途中で退出したことを聞召されて大いに御氣色を損ぜられたので、浄蔵は深く勅勘の身を慎み、三箇年の間横川の首楞嚴院に籠居して修練苦行の日を送つたと云うが、世間一般の人々は、時平がそう云う死に方をしたことを当然のように考えて、あまり同情する者はなかつた。而も報いは時平一人に止まらず、長く子孫にまで及んだのであつて、彼の三人の子息のうち、長男の八条大将保忠は、承平六年七月十四日に四十七歳を以て歿し、三男の中納言敦忠、——あの新夫人在原氏が生んだ晩年の子は、天慶

六年三月七日に三十八歳を以て歿した。尤も保忠の歿年は四十七歳と云うのであるから、その頃として若死とは云えないかも知れないが、事實は菅公のたゞりを氣に病む餘り病氣に取り憑かれ、枕許に驗者を招いて薬師經を読み上げさせていたところ、經の中に宮毘羅大将と云う文句があつたのを、「汝を縊る」と聞き違えて悶絶し、それきりになつてしまつたと云うので、矢張尋常の死に方ではなかつた。そのほか、宇多天皇の女御に上つて京極御息所と云われた女子があつたが、これも短命を以て終り、他の一人の女子仁善子と醍醐天皇の皇太子保明親王との間に生れた康頼王は、時平の外孫に当り、保明親王の薨去後に皇太子に立つたが、これも延長三年六月十八日に、僅か五歳を以て薨じた。たゞ二男の富小路右大臣顕忠が、康保二年四月廿四日を以て六十八歳で歿したのは例外であるが、此の人は心がけのよい人で、平生菅公の靈を畏れ敬い、毎夜庭に出て天神を拝した。又身を持すること謹嚴で、儉約を旨とし、大臣の位に六年の間いたけれども、家にあつても、外にあつても、大臣の作法を振舞わず、外出の時は前驅を具して行くことはめつたになく、車ぞいにも四人の供は召連れず、いつも車の尻の方に乗つた。食事をするにも贅沢な器を用いず、土器に盛つて、台などもなしに、折敷に載せて直かに畳の上に置いた。手水を使うにも半挿盥を用うることはなく、寢殿の日隠の間に

棚を作らせて、小桶に小さい柄杓ひしゃくをつけておき、毎朝仕丁しちようがそれに湯を入れるだけで、手を洗う時は自ら水をかけに行くようにし、人手を煩わづらわすことはなかった。そう云う人であつたから、右大臣にまで昇進し、後に正二位を贈られたのであるが、此の大臣の孫たちのうちで、三井寺の心誉、興福寺の扶公等、佛門に入った者は恙つがなきことを得て、大僧だいそう都ずや権僧こんそう正しょうの地位に至つた。僧になつた者は、此の外にも敦忠中納言の子右兵衛佐すけまさ佐理さ、その子の岩倉の菩提房文慶等があり、これらは孰いすれも佛道に帰依きえしたお蔭で禍を免れることが出来たのであるが、結局昭宣公の長男たる時平の後裔こうえいは榮えずにしまつて、四男の忠平が、後に従一位撰政関白太政大臣になつたのみならず、その一門は皆出世して顯要けんようの職に就ついた。それは菅公が左遷の時、右大弁であつた忠平は密ひそかに菅公に同情して兄あにに与くみせず、その後も絶えず配所へ消息を通わして、慇懃いんぎんを結んでいたからであると云われる。

時平の三男の敦忠は、三十六歌仙の一人であつて、本院中納言とも、枇杷中納言とも、又土御門中納言とも云われ、百人一首の、「あひ見ての後の心にくらぶれば」の作者として知られているが、「此の権中納言は本院の大臣の在原の北の方の腹に生まれ給へる子也、年は四十ばかりにて形有様美麗になんありける、人柄もよかりければ世のおぼえも花やか

にて」と今昔物語も書いてるように、時平とは違って、優しい、人好きのする人物であり、一面には母方の曾祖父業平の血を引いた、多感で情熱に富む詩人でもあった。但し百人一首一夕話いっせきわに、夫人在原氏は国経の館から時平に拉らっし去られる時に、既に敦忠を懐妊していた、されば敦忠はまことは国経の胤たねであるが、夫人が本院へ移ってから生れたゝめに、時平の子として育てられたのであると云う記事が見える。そうだとすれば、敦忠は少将滋幹の実弟になる訳であるが、一夕話の記事は何に基づいているものか、筆者はその出所つまひらを詳かにしないけれども、或は当時世上にそう云う風説もあつたのであろうか。此の敦忠が天慶六年に早世そうせいしてからは、禁中で管絃の御遊ぎょゆうがある時は博雅三位がなくてはならない人になり、三位に差支えがあるとその日の御遊を中止し給うようになったが、故老たちはそれを聞いて、今は世が末で管絃の名手もいなくなつた、敦忠中納言が存生中は、博雅三位が左様に重んぜられることはなかつたのに、と云つて歎いたと云う。此の一事を以ても、敦忠の死が人々に惜しまれたこと、又敦忠が和歌ばかりでなく、管絃の道にも秀ひいでゝいたことが偲しのばれるのである。

参議藤原玄上はるかみの女子で、皇太子保明親王の御息所みやすどころに上つた人があつたが、敦忠がまだ左近少将であつた時分に、お二人の間の後朝きぬの使を勤めさせられたものであつた。そ

んな縁故から、その、ち親王がおかれになると、御息所は敦忠と契ちぎるようになり、敦忠は限りもなく此のお方をいとしい人に思つたのであつたが、或る時、「わたくしの一族は皆短命でございますから、私もそう長いことはございませぬ。わたくしが死にましたら、あなたはあの文範ぶんのりのものになられますでしょう」と云つたことがあつた。文範と云うのは民部卿播磨守で、敦忠の家の家司けいしをしてゐる男だつたので、御息所が、「まあ、そんなことがあるものですか」と云われると、「いゝえ、きつとそうなります、私は空から見えますよ」と敦忠は云つたが、果してその豫言の通りになつた。時平の子たちや孫たちが天神の崇たりと云うことを神経たに痛んで、始終安き心地もなかつたことは、保忠の例を見ても察さしられるが、敦忠も亦また、自分が到底長生きの出来ない運命にを担なつてゐることを知り、ひそかに諦めていたのであつた。

前記の御息所の外に、敦忠にはなお数人の思い人があつた。今、敦忠集を見ると、その大部分は恋歌であつて、中にも斎さい宮いぐう雅子内親王との贈答が多く、此のおん方とは随分長く契り交してゐたことが想像されるが、後撰集卷十三恋五の部には、宮が斎宮にならせられて伊勢へお下りになつた時の敦忠の歌が、次のような詞書と共に載つてゐる。――

西四条の前まへ齋宮さいぐうまだみこにもものし給たまひし時心ときこころざしありて思ふこと侍りける間に、齋宮に

走り給ひにければ、その明くる朝あしたさかきに榊かきの枝につけてさしおかせ侍りける

伊勢の海の千尋ちひろの浜に拾ふとも

今は何てふかひかあるべき

又、小野宮左大臣実頼の女子で、彼が「みくしげ殿の別当」と呼んでゐる人を、久しく恋
いわたりながらなかく逢うことが出来ないので、或る年の師走しわすの晦日つごもりに、

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに

今年もけふに果てぬとか聞く

と書いて送つたが、父の左大臣が事情を嗅かぎつけていよく逢かわせないようにしたので、
又次のように書いて送つた。

いかにしてかく思ふてふことをだに

人づてならで君に語らん

季すえなわ縄すえなわの少将の女子の右近うごんと云う人とも、此の女がまだ宮中に奉公をしていた頃に云い交
したことがあつたが、後に宮仕えを止めて里へ帰つてからは、ふつつり訪ねても来ないよ
うになつたので、女の方から、

忘れじと頼めし人はありときく

いひしことの葉いづちにけん

と云つてやると、矢張何とも返事はしないで、雉子きじを贈つてよこしたので、女が重ねて云つてやった。――

栗駒の山に朝たつ雉子よりも

かりにあはじと思ひしものを

此の外に、長男の助信の母に当る人で、参議みなもと源のひとし等の女子もいるが、なお敦忠集に、

「はじめの北の方」と呼ばれている女や、「すけまさの母君」と呼ばれている女が見えるのは、前記の女たちの中の人々か別の人々かよく分らない。「すけまさ」と云うのは二男の佐理のことであるが、これはあの行こうぜい成とうふうや道どうふう風と並び称せられた能書家の佐理とは違ふ。敦忠集に依ると、佐理の母は佐理を生んで死去したので、子は小母のところに預けられて、「あづま」と云う幼名で呼ばれていたが、あづまが二つになった時に敦忠がその子を見に行つて、たいそう泣いて、下のような歌を詠んだ。――

むつごともまだいひ出でゝ別れにし

人のかたみはあづまなりけり

此のあづまの佐理が後に出家をしたことは、前に記した通りである。

その八

平中、時平、及びその子孫たちの後日譚はあられました以上の如くであるが、あの可哀
そうな老大納言と、彼が夫人在原氏の腹に儲けた子の滋幹は、その後どうなったことであ
ろうか。

国経には滋幹の外に三人の男子があつて、尊卑分脈所載の順序に従えば、長男が滋
幹、次男が世光、三男が忠幹、四男が保命となつてゐる。此のうち、忠幹の母は在原氏で
はなく、伊豫守未並と云う者の女子としてあつて、此の後裔は後まで長くつゞいたら
しいが、世光と保命には後がなく、且その母は誰であるとも記してない。しかし滋幹は、あ
の事件の時に五歳ぐらいであつたとすれば、老大納言が七十二三歳頃の子でなければなら
ないが、それ以後国経は八十一歳で死ぬ迄の間に、更に三人もの子を生ませたり、他の婦
人と契つたりしたのであろうか。それとも尊卑分脈所載の順序は出鱈目で、世光以下三人
の男子は滋幹より前か、同時ぐらいに生れた庶子でもあるのだろうか。そう云えば国経
は、五十歳も年の違う在原氏を妻にする前には、誰かを妻にしていたのであろうが、その

人には子がなかつたのであろうか。それらのいろ／＼な不審については、今は何事をも明かにする手が、りがない。なお、滋幹は、尊卑分脈に従五位上左近少将と肩書がしてあつて、亮明、正明、忠明と云う三人の男子を儲けたことになっているが、此の子供たちの母も誰であるか分らず、且三人ながら跡が絶えていて、子孫がない。それに滋幹の名は、公ぎ卿補任等には全く見えていないので、彼がいつ従五位になり、いつ左近少将になつたのかは明かでなく、生年月日や歿年等も知るよしが無い。尊卑分脈以外のもので滋幹に關した記事を拾えば、大和物語に、

しげもとの少将に、女、

恋しさに死ぬる命を思ひいで、

とふ人あらばなしとこたへよ

少将かへし

骸からにだに我きたりてへ露の身の

消えばともにと契りおきてき

と云うのが見え、後撰集卷十一恋三の部に、藤原滋幹として、

宵に女にあひて必ず後にあはんとちかごとをたてさせてあしたに遣つかはしける

千早振神ちはやぶるひきかけて誓ひてし

こともゆゝしくあらがふなゆめ

と云うのが見えるのが、普通に知られているのであるが、此のほかにも、餘り世間に読まれていないものに、しゅうこかくぶんこ適古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記がある。これはざんけつ残缺で、適古閣本以外にも写本が二三あるようだけれども、何処にも完本は伝わっておらず、大体に於いて天慶五年の春頃から以後七八年の間にわた互つて、折々書き継がれたらしく思われるものが、部分的に残っているだけであるが、その内容は、ほとん殆ど全部が母を恋い慕う文字で埋まっているのである。

ところで、滋幹の生母は即ち敦忠の生母であることは読者も御承知の通りであるが、此の母はいつ頃まで生きていたのであろうか。われ々はしゅういしゅう拾遺集卷五賀の部所載源公忠の「よろづよ萬代もなほこそあかね」の歌の詞書に依つて、権中納言敦忠が母のためにがえん賀筵を設けたことがあるのを知り、その賀は多分五十の賀であろうことを推定するのであるが、滋幹の日記を見ると、敦忠の死んだ明くる年、天慶七年にもまだ此の母はながらえていたのであつて、それは実に、彼女の第二の夫であつた贈太政大臣時平の死後三十五年のせいそう星霜を経ている、彼女は当時六十歳前後、滋幹は四十四五歳に達していたであろう。滋幹がそう云

う齡になつてもなお、母のことが忘れられず、折にふれては面影を想い浮かべてなつかしがつていたと云うのには、尤もな理由が存するのであつて、昔、あの事件のあつた当座、五つ六つの幼童の頃にこそ彼も本院の館へ出入りするのを許されていたものゝ、七八歳になつた頃からは早くもさま／＼な浮世の掟おきてに制せられてそうも行かなくなつたらしく、その後ずつと、母が健在であることは聞き及びながら、親しく会う機会に恵まれずにいたのであつた。いったい誰の場合でも、母の顔を全く知らないのなら格別、頑がんぜはない時分におぼろげながら母を見た記憶があり、而も間もなくその母が餘所よその男の所へ走つてしまつたと云うようなことに出遭うと、その子の母を思慕する情は尋常一様でないのであるが、況いわんやその母が世にも稀なる美女であつた場合、又況んや、よう／＼物心のついた年頃に、今は他人の妻になつてゐる母の許もとを訪れたり、その母の手で腕へ歌を書かれたりした、異常な思い出を持つ場合に於いてをや、そして又況んや、その母が現に存命中であることが分つてゐる場合に於いてをや、である。かく考えて来れば、滋幹の日記が母恋しさの餘りに綴つづられた文章のような観があるのも道理であつて、現存しているのは断片的な部分々々に過ぎないけれども、その他の部分も必ずや母への憧どうけい憬で埋まっていたことであろう。いや、事に依ると、滋幹は、四十二三歳に及んでから、いよ／＼母を思う念せつが切になつて、

生れて始めてこう云うものを筆にする気になつたのではなからうか。實際それは、日記と云えば日記であるが、幼くして母に生き別れ、やがて父に死に別れた少年時代の悲しい回想から説き起して、それより四十年の後、天慶某年の春のゆうぐれに、西坂本に故敦忠の山莊の跡を訪ねて、たず 図らずも昔の母にめぐり逢う迄のいきさつを書いた、一篇の物語であると云つてもよいのである。

日記に依つて想像するのに、滋幹の母の記憶は、彼が四つぐらいの時から少しづつ残つてゐるらしいのであるが、最初の頃は極めておぼろげな、霞かすみのように淡いものであるに過ぎない。彼は自分の身にとつても、父の国経にとつても、一生涯の大事事件であつたあの夜のこと、——母が本院の大臣に連れて行かれた夜のことについては、何もおぼえていないのであつて、たゞいつからか、母がもう自分の家にはいないようになったことを、誰かに聞かされて、急に大変悲しくなつて泣いたのであつた。彼にその話をしてくれたのは、多分老女の讚岐であつたか、乳人の衛門であつたか、孰方かであろう。その時分、彼は夜な／＼乳人に抱かれて眠つたのであつたが、乳人は彼がいつ迄も母の名を呼んで泣き止まないのに当惑して、

「さあ／＼、おとなしくお眠み遊ばせ。お母さまは／＼にはいらつしやいませんけれども、

そう遠くない所にいらっしやるのですよ。おとなしくしていらっしやれば、きつとお母さまの所へ連れて行って上げますよ」

と、そう云ったので、幼い滋幹はたとえようもなく嬉しくて、

「ではいつ？」

と、聞くと、

「そのうちに」

と、云うのであつた。

「きつとだね」

「きつとでございます」

「きつと、きつと？——うそではないね」

こんな問答を毎夜のように繰り返しつゝ寝かされながら、乳人はあゝ云っているけれども、気休めに云うのであろうと、子供心に疑いを挟んでいたのであつたが、それでも乳人はそのことについて讃岐と話し合つたものらしく、或る日ほんとうに、讃岐が彼の手を引いて母の所へ連れて行ってくれたのであつた。が、幼童の記憶と云うものは全くたわいのないものなので、どう云う訳か、そんな大事の日のことを、まるきり彼は思い出すことが出来

ないのである。彼の記憶は古い映畫のフィルムのようにきれ／＼で、前後につながるの
ない場面々々が、或るものはぼんやりと、或るものは怪しいほどくつきりと、映像をとゞ
めていたのであるが、それらの数々の映像のうちで、今もしば／＼浮かんで来るのは、本
院の館の、とある渡殿わたどのの勾欄こうらんのもとにうずくまって、所在なさそうに前裁せんざいのけしき
を眺めている自分の童姿であった。

彼はその渡殿の向うにある寢殿に、母が住んでいることを知っており、自分はその母に会
うためにそこで待たされていたのであったが、いつも、やゝ久しく待っていると讃岐が出
て来て、此方へ入らっしゃいと云う合図をした。母はめつたに端はしちか近いあたりへ姿を現わ
すことはなく、母屋おもやの奥の方の一と間に垂れ籠こめていて、彼が行くと必ず膝の上に載せて
頭を撫で、頬ずりをしてくれるので、

「お母さま」

と云うと、

「和子わこ」

と云つて、ぎゅつと抱きしめてくれるのであった。だが、それだけで、一と言二と言やさ
しい言葉はかけてくれたけれども、しみ／＼とした話などを聞かしてくれることがなか

つたのは、まだ何を話しても理解の行かない年頃だったからであらうか。彼はたまにしか会えない母の顔を、そう云う折にすっかり見覚えて置きたかったので、抱かれながら仰向あおむいて見たが、残念なことには部屋が暗いのと、額から垂れたゆたかな髪が輪郭を覆い隠おしているの、厨子ずしの中にある御佛みほとけを拝むようで、心ゆくまで見きわめたことはなかった。母のようにみめかたちのすぐれた人は稀であると云うことは、女房たちが噂うわさするのを聞いて知っていたので、うつくしいと云うのはこう云う顔のことなのかと思っはいたが、ほんとうにそうと得とく心こころが行っていたのではなかった。たゞ母の衣には、何と云うものか特別に甘い匂のする香が薰たきしめてあったので、じつと無言で抱きしめられている間が好い気持であった。そして家に帰ってから、なお二三日はその移り香が頬てのひたもとや掌てのひらや袂たもとなどに沁しみ着いていたので、母が自分の身に付き添うているように思えた。

幼年の彼が母をほんとうに美しいと感じたのは、あの、平中に掴つかまえられて腕に歌を書かれた時のことであつた。あれは渡殿の軒に近く紅梅べんばいが綻ほころびていたことを思うと、或る春の日のことであつたのは間違いないが、彼が西の対屋たいのやの簀子すのこのところ、二三人の女めのわら童わを相手に遊んでいると、大人おとなの男がニコ／＼しながら傍へ寄つて来て、

「もし、……もうお母さまにお会いになつたんですか」

と、そう云つて彼の肩へ手を置いたので、滋幹は、

「まだ、……………」

と云おうとしたけれども、そんなことを云つてよいかどうか分らないので、黙つてその人の顔を見上げた。彼はその大人が平中であつたことを後に至つて知つたのであるが、でもその時も全然見覚えのない人ではなく、前からたび／＼見かけたことのある顔であつた。「まだなんですね」

と、男は滋幹が不安そうにもじ／＼している様子を見て、大凡お、よそ察したらしく云つた。それから、あたりに気をおかねながら、中腰をかゞめて、耳の端はたへ口を寄せて、

「和子わかこは賢いお子ですね、ほんとうに賢い／＼」

と、そう云つてから、

「お母さまにお会いになるのですしたら、憚はげりながら、私がお願いしたいことがあるんですよ。……………ねえ、和子、聴きいて下さいますでしょうかね」

「どんなこと？」

と、滋幹が云うと、

「あの、ちよつと、……………」

と、背中の方へ手を廻して、女童たちのいる所から二三間離れた方へ連れて行つて、
 「お母さまに歌を差上げたいんですが、届けて下さいますか知ら」

滋幹は、自分が母に会うことは内證なのであるから、決して人にしゃべってはいけな
 いと、讃岐や乳人に云いつけられていたので、返事に窮してためらっていると、男はしきりに、
 そう云う心配には及ばないこと、自分は和子の母上をよく知っているの、和子が取次を
 してくれたら母上もきつと喜ばれるであろうことを、さま／＼に言葉をかえて繰り返
 して云い、和子はそう云つても聞き分けのよい賢いお子であると、二た言目にはそれを云
 い添えた。最初は幼い子供を不安がらすまいと、努めて愛想笑いを浮かべて、あやすよう
 に云つていたのであるが、しゃべっているうちにいつか真剣さの溢れた表情になり、どう
 にかして納得させようと一生懸命になつてゐるのが、滋幹にも分つた。普通そう云う時
 の大人の顔は、子供には恐いものなので、滋幹もいくらか脅やかされて薄気味悪く感じた
 であつたが、その半面に、さも思い詰めた、子供にも同情心を起させないでは措かないよ
 うな哀願的な態度が見えた。

男は子供が頷いたので、又「賢い〜」を云いながら、注意深くあたりを見廻して、

「ちよつと、ちよつと、……………」

と、滋幹の手を曳いて、とある一と間の屏風の蔭へ引つ張って行った。と、その机に置いてあつた筆を取つて硯にひたすと、

「じつとしていて下さいよ」

と云いながら、滋幹の右の袂を肩の方までまくり上げて、二の腕から手頸の方へかけて、考えくゝ歌の文句を二行に書いた。

書いてしまつても、墨の乾くのを待つ間手を握つたまゝ放さずにいるので、まだ何かされるのではないかと云う気がしたが、墨が乾くと、まくり上げた袂をていねいにおろして、

「さあ、これをお母さまにお見せして下さい、誰も外の人はいないところで。………よう

ございますね、お分りになりましたね」

滋幹は點頭したゞけであつたが、

「お母さまにだけお見せになるんですよ、ほかの人には何卒お見せにならないで」と、男は重ねて念を押した。

それから多分滋幹は、いつものように渡殿で讃岐が合図してくれるのを待つてから、母に会いに行ったのであろう。そのところは記憶がうすれているのであるが、几帳のかけに這入つて行つて、膝の上に抱かれた時、

「お母さま」

と云つて、袂をまくつて見せたのであつた。母は一と眼で直ぐに事情を悟つたらしかつたが、部屋が暗いので、几帳を押し除けて、外の明りを入れた。そして我が子を膝からおろして、明るい方へ腕を向けさせて、何度もくく繰返して読んだ。滋幹は、誰がこれを書いたかとも、誰に頼まれたのかとも、母が一切そう云うことを尋ねないで、何も彼も分つてゐるらしいのが不思議であつたが、ふと、眼の前をきらりと落ちたものがあるのです、訝しみながら振り仰ぐと、母が涙を一杯ためてあらぬ方角を視詰めていた。母の容貌を心から美しいと思つたのは、その一瞬のことであつたが、それはちようどその時に、春の日ざしの照り返しが、まともに母の顔の上にとゞよつていて、いつも奥深い暗いところではかり見ていた輪郭が、くつきり浮き出していたせいであつた。母は子供に気付かれたと思うと、慌て、顔を子供の顔にぴつたりと擦りつけたので、却つて何も見えなくなつてしまつたが、その代り睫毛にたまつていた涙の玉が子供の頬に冷めたく触れた。滋幹は、後にも先にも母の顔をまぎくく見たのはその一瞬間だけであつたが、而もその時の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼きつけられて、生涯消えずにいたのであつた。母がそうして顔を押しつけていたのは、どのくらいの時間であつたか、その間母は泣いて

いたのか、考えごとをしていたのか、等々のことも滋幹には思い出せないのであるが、やがて母は女房に半挿はんぞうを持つて来させて、滋幹の腕にある文字を拭ぬぐった。女房が拭い取るうとするのを制して、母が自分で拭ったのであったが、拭い取る時にいかにも惜しそうに、一字々々、頭へ刻みつけるように視みすえつゝ消した。それから母は、さつき平中がしたように我が子の袂をまくり上げて、左の手で彼の手を握り、前の文字を消したあとへ、前と同じくらしいの長さに文字を走らした。

初めに滋幹が腕をまくつて見せた時は、母のほかには誰もいなかったのであるが、知らぬ間にそこへ女房が二三人来ていたので、滋幹は平中に云われたことが気にかゝったが、でもその人たちは母に信頼されていて、総すべてのことを知らされていたらしいのであった。彼は母が自分の腕に字を書いたことはよく覚えていられるけれども、母にどんなことを云われたかは覚えがなく、事に依ると、母は黙つてそれらのことをしていたようにも思えるのであった。

母が文字を書いてしまうと、

「若様」

と、いつからか傍に来ていた讃岐が云った。

「あのお方にお母さまの此のお歌を見せてお上げなさいませ。いゝえ、まだきつとその辺においてになります。さっきの所へ早くいらしつて御覧遊ばせ」
 彼がそう云われて、西の対^{たいの}屋へ戻つて来ると、果してあの男が簀子^{すのこ}のところ待ち構えていて、

「おゝ、何か御返事があつたでしようか。——おゝおゝ、賢いゝ」と、跳^とび着くように寄つて来て、わくゝした口調で云つた。

滋幹は後に、その時の自分が母と平中との間に恋の取次をしたのであること、自分は平中に利用されたのであつたこと、等を知つたのであるが、少くとも当時、母の側近に仕えていた女房たちと讃岐だけは、そのことを知つていたのであろうし、ひよつとしたら、讃岐こそ平中の同情者であつて、母との間の連絡に滋幹を利用することを平中に教えたのも、彼女であつたかも知れない。なぜなら、それもはつきりとは覚えていないのだけれども、滋幹が又あの屏風のある部屋へ連れ込まれて、母の筆の跡を平中に示した時、たしかその場に讃岐が居合わせたのみならず、これを消すのは勿^{もつ}体^{たい}のうごぎいますねと云いながら、文字をきれいに拭^ふいてくれたのも、どうやら彼女であつたような気がするのである。腕へ文字を書かれたのはその時一遍だけであつたか、それからも一二遍そんなことがあつ

たか、そのところはおぼろげであるが、その後も西の対へ行くと、平中がうろ／＼して
いて、彼を呼びとめて文を托たくしたことはあった。滋幹がそれを持って行くと、母は返事を
書いたこともあり、書かなかつたこともあつたが、だん／＼最初の時のような感動を示さ
ないようになり、厭いとわしいと云う顔つきをすることもあつたので、しまいには彼は平中に
使を頼まれるのを迷惑に感じた。そして平中も、いつか姿を見せなくなったのであるが、
間もなく滋幹も母に会うことが出来なくなつた。それは乳人が母の館へ連れて行く
ことを控えるようになったからで、母に会いたいと滋幹が云うと、お母さまはもう直じき赤
ちゃんがお生れになるので、今は引き籠こもつていらつしやるのです、と云つたりした。その
頃母はほんとうに妊娠したのであつたらしいが、滋幹の出入りすることが禁いぜられたのは、
外にも故障が起つたらしいのであつた。

こんな風にして滋幹は、それきり母の姿を見ることがなかつた。彼に取つて「母」と云う
ものは、五つの時にちらりとみかけた涙を湛たえた顔の記憶と、あのかぐわしい薫物たきものの匂
の感覚とに過ぎなかつた。而もその記憶と感覚とは、四十年の間彼の頭の中で大切に育はぐま
れつゝ、次第に理想的なものに美化され、浄化されて、実物とは遙かに違つたものになつ
て行つたのであつた。

滋幹の父に関する思い出は、母のそれに比べると晩く、いつから記憶が始まっているか確かでない。が、多分その時期は彼が母に会えなくなつた頃からであろう。それと云うのが、そうなる迄は父に接触する折がめつたになく、それから後に父の存在が急にはつきりして来たからであつた。彼のおぼえている父は、徹頭徹尾、恋しい人に捨てられた、世にも気の毒な老人と云う印象に盡きるのであるが、そう云えば一体、我が子の腕にある平中の歌にいっきく一掬の涙を惜しまなかつた母は、父と云うものをどう思つていたのであろうか、滋幹はついぞ母からそれを聞かされたことはなかつた。彼は几帳のかけで母の膝に抱かれた時、自分の方からも父のことを言い出したことはなかつたが、母も、お父さまはどうしていらつしやる、と云うようなことを、嘗かつ一度も問うたことはなかつた。それに、あの讃岐にしても、外の女房たちにしても、平中には妙に同情していらしいのに、国経のことは誰もあまり口にした者はなかつたが、その中で乳人の衛門だけが例外であつた。

その九

乳人めのとは滋幹に、若様がお母さまをお慕いになるのは御ごもつと尤もですが、ほんとうにおいと

しいのはお父さまでございますよ、と云い、お父さまは淋しがっておいでゞすから、大切にして、慰めてお上げにならないければいけませんよなども云った。彼女は別段母を悪くは云わなかつたが、平中へいじゆうとのことを知っていて、彼と母との媒介をする讃岐に対しては反感を持つていたようであつた。そして、滋幹までがその媒介に利用されていることに気がついてからは、いよく讃岐を憎み出したようであつたが、滋幹が母の館やかたへ行けないようになったのは、或はそんな関係から乳人が左様に取計らつたのもあろうか。若様がお母さまに会いにいらつしやるのは致し方がございませんが、人に頼まれてお取次などをなさつてはいけませんよ、と、滋幹は乳人にそう云われて、恐い眼で睨にらまれたこともあつた。

母が亡くなつてからの父は、出仕を怠つてゐる日が多く、晝間ひるまから一と間に閉じ籠つて病人のようになっていることがしばしばであつたし、餘所目よそめにもひどく憔悴しょうすいして、鬱々うつくとしてゐるように見えたので、そう云う父が子供にはひとしお薄気味悪く、近づきにくい感じがして、なか／＼慰めに行くどころではなかつたのであるが、お父さまはお優しい人なのですよ、若様が行つてお上げになればどんなにお喜びになりますことか、と、乳人は云つて、或る日滋幹の手を執とつて、父の部屋の前まで引張つて行き、さあ、と、障子を

開けて無理に中へ押し込んだことがあった。もとから痩せていた父は、一層痩せて眼が落ち窪み、銀色の鬚をぼう／＼と生やして、今まで臥ていたのが起きたところらしく、狼のような恰好をして枕もとにすわっていたが、その眼でジロリと見られた途端に、滋幹は体がすくんで、口もとに出かゝっていたお父さま、と云う声が、咽喉の奥に痞えた。

親子はしばらく、互に眼で探りを入れながら見合っていたが、でもそのうちに、滋幹の心を壓していた恐怖感が次第に和らいで、或る云い知れぬ甘いなつかしい感覚に代った。それが何に原因するのか滋幹にも最初は分らなかったが、間もなく彼は、あの、母が常に薫きしめていた薫物の香が、此の部屋の中に満ち／＼していることに気づいた。そして、よく見ると、父がすわっているあたりに、むかし母が身に着けていた桂や、単衣や、小袖や、さま／＼な衣裳が取りちらかしてあるのであった。と、突然父が、

「和子はこれを覚えているかね」

と云いながら、鉄の棒のようにコチ／＼した腕を伸ばして、花やかな一枚の衣の衿をつまんだ。

滋幹が傍へ寄ると、父はその衣を両手で捧げるようにして滋幹の前へ突き出したが、次にはそれに自分の顔を押しあて、長い間身動きもせずにはいた。それから漸く顔を上げると、

「和子もお母さんに会いたいだろうね」

と、しんみりした、同感を求めるような口調で云った。滋幹は父の容貌を、それほど仔細しさいに見たことはなかつたのであるが、眼のふちには眼やにが溜り、前歯があらかた脱け落ちていて、そのうえ声が皺しわ喰われているので、何を云うのか、ちよつとは聞き取りにくかつた。それに、父はそんな風に云うのだけでも、その顔は笑つてもいなければ泣いてもいなかつた。たゞもう一途いちずな、執しゅう心しんの強い生真きまじめ面目な表情で、じつと此方の眼の中を視すえているので、滋幹は又気味悪くなつて来て、

「うん」

と、頷うなずいたきり立つていた。すると父はだん／＼深く眉根を寄せて、

「もうよい、彼方あつちへおいで」

と、不機嫌そうに云い切つた。

そんなことがあつてから、又滋幹は当分父の傍へ寄り着いたことはなかつた。お父さまは今日もお内にいらつしやいますよ、と云われると、却かえつて父の部屋の方へは行かないようにしたくらいであつたが、父は一日閉じ籠かこつて、殆ど姿を見せないのであつた。たま／＼部屋の前を通り過ぎる時、耳をすまして中の様子を窺うかがつても、生きているのか死んでいる

のか、コトリとの音も聞えなかつたが、恐らく此の間のように、母の衣裳の数々を取り出して、そのなまめかしいかおりの中に埋まっているのであらうと、滋幹は推した。

そのうち、その同じ年であつたか、明くる年であつたか、晴れた秋の日の爽やかな午過ぎに、父が珍しくも前栽せんざいに出て、萩がたわゝに咲いている遣り水やみずのほとりに、ぼんやりと石に腰かけていたことがあつた。滋幹はその時ほんとうに久振ひさしぶりに父を見かけたのであつたが、そうして石に憩いこうている父の恰好には、長い道中を歩いて来て、くたびれ切つて道ばたに休んでいる旅人のようなところがあつた。衣服などもひどく垢あかづいて、よれよれになつていて、袂や裾ほころが綻びたりちぎれたりしていたのは、もうその時分、身の周りまわの世話をする女房などがいなくなつていたのであるか、いてもそう云う女たちに手を触れさせることを厭いとつたのであらう。滋幹は、少しく傾きかけた日があかくと父の半身を照らして、瘦せ衰えた頬ほがつややかにかゞやいているのを見ながら、それでも敢て近寄らうとはせず、五六歩離れて彳たゝずんでいると、父が小声で何かぶつ／＼つぶや呟つぶやいているのが聞えた。

その、呟つぶやいているものが、普通の言葉ではなくて、何かの文句に節ふしをつけて、口のうちに暗誦あんじゆしているのであるらしいことは察さしられたが、滋幹が傍で聞いているのには全く気が付かないかのように、何となく水の面へ眼を落して、同じ文句を二三遍も繰り返していた

かと思うと、

「和子」

と云つて、やつと少年の方を向いた。

「わしは和子に此の詩を教からうたえて上げる。此れは唐土もろこしの白樂天はくらくてんと云う人の作ったもので、子供にはむずかし過ぎて意味が分らないであろうが、そんなことはどうでもよい。わしが云う通りに覚えさせましたらよいのだ。今に和子が大人になったら、自然に分る時が来る」

滋幹は、

「さ、こゝへおかけ」

と云われて、父と並んでその石の端へ腰をかけた。父は最初、子供に覚え易やすいように、一句ずつ句切つてゆつくりと云い、滋幹が一句を唱え終るのを待つて次に進むようにしたが、そうしているうちにだんくく教おのえていると云う心持を忘れ、己おのれの感情の赴おもむくまゝに声を張り上げ、抑揚をつけて朗吟し出した。――

失うて庭の前の雪となり

飛んで海の上の風よに因よる

九きうせう霄まき応ともに侶ともを得たるなるべし

三夜籠つらうに帰らず

声みどりは碧の雲の外たに断え

影あきらは明けき月の中に沈む

郡ぐんさい齋さいこれより後は

誰たれか白頭の翁たれに伴はん

滋幹は他日成長してから、此の詩が白氏文集はくしもんじゅうにある「鶴を失ふ」と云う題の五言律詩であることを発見したので、当時は何のことか解し得なかつたのであるが、しかし此の文句はそれから後も、父がたび／＼酒に酔つては口号くちうごんでいたことがあるので、耳に聒たこ膩なが出来るほど聞かされたものであつた。今になつて考えれば、父は逃げ去つた母を鶴になぞらえ、悶々もんくの情を此の詩に托していた訳であるが、父がこれを吟ずる時の悲痛な声の調子を聞けば、子供心にも父の胸にある断腸の思いが自分に伝わりて来るのを感じた。前にも云うように、父の声は皺しわ暖なれていて高い音が出せなかつたし、息切れがするので声を長く引くことも出来なかつたので、その吟じ方は技巧的には拙劣であつたが、「九霄応に侶を得たるなるべし」と云う句、「声は碧の雲の外に断え、影は明けき月の中に沈む」と云う句、「誰か白頭の翁に伴はん」と云う句などを誦する時は、技巧を超絶した凄愴せいそうな

実感が籠つて、そゞろに人を動かさないでは措かないものがあつた。

父は滋幹がその詩を暗誦し得るようになったのを見て、

「それが覚えられたら、もつと長いのを教えて上げよう」

と云つて、もう一つ、ほんとうに前のよりはずっと長いのを授けてくれたが、それは「我念ふ所の人あり」と云う「夜雨」の詩であつた。――

我念ふ所の人あり

隔たりて遠きく郷にあり

我感ずる所の事あり

結ばれて深きく腸にあり

郷は遠くして去くことを得ざれども

日として瞻き望まざることなし

腸は深くして解くことを得ざれども

夕として思ひ量らざることなし

況んや此の残燈の夜に

ひとり宿りて空堂にあるをや

秋の天殊そらに未だ暁あけず

風と雨と正まに蒼々さうさう

頭陀づだの法ほふを学まなばざれば

前まへよりの心こころ安やすんぞ忘わする可べけん

此の終りの句の、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘る可けん」と云う言葉を、父はやゝもすれば独語のように詠じていたが、それから間もなく佛道に心を傾けるようになったのは、恐らく此の句などに影響されたせいであろう。なお滋幹は、何と云う題の詩か不明であるが、「夜深うして方に独り臥したり、誰が為めにか塵の牀を払はん」「形羸つかれて朝餐てうさんの減へずるを覚ゆ、睡り少うして偏ひとへに夜漏やろうの長きを知る」「二毛暁はちわたに落ちて頭くしけづを梳もうこと懶のうし、両眼くわ春昏くらくして薬くすりを点すること頻しきりなり」「須すべく酒さけを傾かたけて腸はちわたに入るべし、酔ようて倒たふるゝも亦また何なにぞ妨たがげん」等々、いろ／＼とそれに似たような句があつたことを、きれ／＼に覚えていたのである。父はそれらの句を、悄しやうぜん然ぜんとして庭の片隅たぐずにイミながらこつそり吟誦ぎんじゆしていることもあり、人を遠ざけて独りで酒杯けいはいを挙げながら、感極かんごくまつた声を放はなつて泣ないて謡うたつていることもあつたが、そんな折には父の両頬りやうほに涙なみだが縷々るゝと糸いとを引ひいていた。

その時分、讃岐さぬきはいつからか館にいないようになっていたのであるが、思うに彼女は母が逃げ去ると間もなく、自分も父を見限つて母の方へ身を寄せたのではあるまいか。滋幹の記憶する限りでは、乳人めのとの衛門が滋幹のことも父のことも、何くれとなく面倒を見てくれた。どうかすると彼女は、頑是がんぜない滋幹をたしなめるのと同じ口調で父をたしなめたりしたが、彼女が最もやかましく云つたのは父の飲酒のことであつた。

「お年を召して、外には何もお楽しみがあまりにならないのでございますから、少しはお宜よろしゅうございますけれども、……」

乳人がそんな風に云うと、父はしおくと、子供が母に叱しかられたようにうなだれて、

「心配をかけて済まないな」

と云いながら、大人おとなしく聴いているのであつた。全く、老年に及んでいとおしい人に背そむかれた父が、前から好きであつた酒を一層嗜たしなむようになり、それを唯一の伴侶はんりよとするに至つたのは是非もないことだけれども、その酔い方がだんく狂暴に、常軌じょうきを逸するようになつて行つたので、乳人が案じるのも無理はなかつた。父は乳人に諫いさめられると、その時は素直に詫わびるのであるが、その日のうちに直ぐもう正体もなく酔いしれると云う有様で、詩を吟じたり、泣き喚わめいたりするくらいはまだしも、夜中にふらくと何処どこかへ出て行つ

て、二三日も帰って来ないことがしばしばだったので、

「何処へおいでになったのでしよう」

と、乳人や女房たちが額を鳩めて相談しながら溜息をついたり、それとなく人を出して捜索させたりしていることも珍しくなかった。滋幹もそんな時には、子供は子供なりに胸を痛めたものであったが、二三日すると、夕方ひとりひよっこり帰って来たこともあり、誰も気が付かぬうちに、部屋に戻って臥ねていたこともあり、人に見付けられて連れて来られたこともあった。一度などは、都を離れた遠い野末のすえに行き倒れていたのを捜し出されたことやらで、戻った時の姿を見ると、髪は乱れ、衣は破れ、手足は泥にまみれて、乞食坊主こじきぼうずのようになっていた。乳人は呆あきれて、

「まあ」

と云ったきり、涙をぼろ／＼零こぼしているばかりであったが、父も極きまり悪そうに下を向いて何も云わず、こそ／＼と部屋へ逃げ込んで、夜着よぎに顔を埋めてしまった。

「あんな風にしていらつしやったら、しまいにはほんとうに気狂いにおなり遊ばすか、体をお損じ遊ばすか、……………」

と、乳人は蔭で云い暮らしていたが、そう云う父が、それほど溺できあい愛あいしていた酒を、或る

時からふつり止めてしまったのであった。

滋幹は、父がどう云う動機から酒を断つに至ったのか、その間の事情を詳かにしないのであるが、彼がそれに気が付いたのは、

「お父さまは近頃殊勝におなりなされて、一日しずかにお経を読んでいらつしやいます」

と、乳人が彼に語ったことがあるからであつた。思うに父は、母恋しさに堪えかねて、酒の力で紛らそうとしたのであつたが、酒では到底紛らしきれないことを感じて、佛の慈悲に縋ろうとしたのであろうか。つまり、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘るべけん」と云う白詩の示唆に従つた訳なので、それは父の死ぬ一年ほど前、滋幹が七つぐらいの時のことであつた。その時分になると、父はもう狂暴性がないようになり、終日佛間において、冥想に耽るとか、看經するとか、何処かの貴い大徳を招いて佛法の講義を聴聞するとか、云うような日が多くなつたので、乳人や女房たちは愁眉を開いて、どうやら殿も落ちついておいでになつた、あの御様子なら安心ですと云つて喜んでいたのであつたが、しかし滋幹には、そうなつてからでも矢張何となく近づきにくい、薄気味の悪い父であることに変りはなかつた。

乳人はよく、佛間が餘りひっそりしていることがあると、

「若様、お父さまの所へいらしって、何をなすつていらつしやいますか、そうつと覗いて御覽遊ばせ」

と、そう云つたので、滋幹が恐るゝ佛間の前へ行つて、闕際に跪いて、音を立てぬように障子に手をかけて、一寸ばかりするゝと開けて見ると、正面に普賢菩薩の絵像を懸け、父はそれに向い合つて寂然と端坐していた。滋幹の方には後姿しか見えないのだけれども、暫くじつと窺つていても、父は経を読むのでも、書を繙くのでもなく、たゞ默然と坐っているだけなので、

「お父さまはあゝして何をしていらつしやるの？」

と、或る時乳人に尋ねると、

「あれは、不浄観と云うことをなすつていらつしやるのです」と、乳人が云つた。

その不浄観と云うのは大変むずかしい理窟のあることなので、乳人にも委しい説明は出来ないのであったが、要するに、それをすると、人間のいろゝな官能的快樂が、一時の迷いに過ぎないことを悟るようになる、そして、今まで恋しいゝと思つていた人も恋しく

なくなり、見て美しいとか、食べておいしいとか、嗅いで芳しいとか感じた物が、実は美しくも、おいしくも、芳しくもない、汚わしい物であることが分つて来る。お父さまは何とかしてお母さまのことをお諦めになろうとして、その修あきら行あきらをなすつていらつしやるのですよ、と云うのであつた。

そう云えば滋幹は、父について生涯忘れることの出来ない或る恐ろしい思い出を持つていたのであるが、それはちようどその前後のことであつた。その頃父は幾日間も、晝夜の別なく静坐と沈思をつゞけていて、いつ食事をし、いつ眠るのであろうかと、滋幹は不審に堪えかね、夜中乳人に気付かれぬように寢間を忍び出て、佛間のところへ行つて見ると、障子の中にはかすかに燈火がともつてい、父は晝間と同じ姿勢で坐つていた。例の如く隙す間きまから覗のぞいていた滋幹は、いつ迄たつても父の姿が彫像のように動かないので、再びさうつと障子を締めて、部屋へ戻つて寝てしまつたが、その明くる晩も氣になつて覗きに行くと、依然として父は昨夜の通りにしていた。が、たしか三日目の夜中のこと、又しても好奇心に駆られて、足音をさせないように爪つまずき先立だて、歩いて行つて、障子をいつも程に細目に開け、じつと息を凝こらしていると、燈台の灯先ほつきが風のないうらうとしたと思つた途端に、父が俄にわかに両肩を揺がして、身じろぎをした。父の動作は甚しく緩慢なので、

どう云う目的で動き出したのか最初は察しが付かなかつたが、やがて、片手を床につき、非常に重い物を引き扛あげるような息づかいをして、自分の身をそろくくと真つすぐ起して、立ち上るのであつた。老年の結果、それでなくても立ち居がのろくなっているのに、長い間端坐の形を崩さずにいたので、そう云う風にしなければ急には立てなかつたのであろうが、さて立ち上ると、よろけるように歩きながら部屋の外へ出るのであつた。

滋幹が訝あやしみながら跡をつけると、父は脇目もふらずに前方を視つめ、階きざはしを下りて、金剛草履うぞうりを穿はいて、地上に立つた。月が皎々こうくと冴さえていたのと、そこらに虫の音が聞えていたのとで、季節が秋であつたことは確かであるが、つゞいて庭に下りた滋幹は、自分もあり合う大人の草履を突つかけたけれども、足のうらが冷えくとして、水の中を涉わたつているような感じがし、月の光で地面が霜を置いたように真つ白だったので、冬ではなかつたかと云う気もするのである。父が歩くにつれて、地上にくつきり映っている父の影が揺れて行つたが、滋幹はそれを踏ふまないように可かなり離れて附いて行つた。父がうしろを振り返つたら見付けられたかも知れなかつたが、父の様子は、歩きつゝなお冥想に沈んでいるような工合で、いつの間にか館やかたの門を出て、何かはつきり目指すところがあるらしく、すうつと歩いて行くのであつた。

八十歳の老翁と七八歳の幼童の足であるから、そう遠くまで行つたのではないであらうが、それでも相当の道のりを来たように滋幹は感じた。彼は父からはずっとおかれて見え隠れに跡をつけたが、深夜の路上には親子の外に全く人影が絶えていたし、父の姿が遙かに白く月光を反射していたので、見失う恐れはなかった。路は、初めはいかめしい築地の邸がつゞいていたのが、だん／＼みすぼらしい網代の堀や、屋根に石ころを置いた侘びしい低い板葺の家などになつたが、それも次第に疎らに、ところ／＼に水たまりだの空地だのが多くなり、芒やその他の秋草が丈高く伸びていたりした。そしてそれらの叢にすだく虫の音が、二人が近づくとふつと止み、遠のくと又鳴き出しながら、町はずれへ行けば行くほど雨のようにしげく喧しくなつて行つた。そのうちに、家が一軒もなくなつて、見渡す限りぼう／＼と草の生えた中に、細い野道がひとすじうねっている所へ出た。一本道であるけれども彼方へ曲り此方へ曲りしている上に、草が人間の背よりも高く、父の姿とさき／＼それに没してしまふので、今度は滋幹は一二間の距離まで近寄つて行つたが、両側から路の方へ蔽いかぶさっている草を掻き分けながら行くので、袂も裾もしたゝか露に濡れて、つめたい雫が襟もとまで沁み入るのであつた。

父は、小川に橋のかゝつた所へ来ると、それを渡つて、なお真つ直ぐにつゞいている路の

方へは行かないで、川のふちへ降りて、少しばかり河原のようになってい砂地を、川下の方へ歩き出した。と、橋から一丁ばかり下のちよつと小高く盛り上った平地に、土饅頭どまんじが三つ四つ築いてあつて、それらはいずれも土が柔かで新しく、頂上に立てゝある卒塔婆そとばも真つ白な色をしており、折柄の月に文字まではつきり分るのであつた。卒塔婆を立てないで、代りに小さな松杉などを植えたのもあり、土饅頭でなく、柵さくで囲つて、石を積み上げて、五輪の塔を据えたのもあり、簡単なのは、屍体を一枚の蕙むしろで蔽うて、しるしの花を供えたゞけのものもあつたが、中には又、此の間の野分のわきで卒塔婆が倒れ、土饅頭の土が洗われて、屍体の一部が下から露出しているのもあつた。

何かを捜し求めるように土饅頭の間をうろくしている父の跡から、滋幹は殆ど踵きびすを接するくらいに附いて行つたが、父は附けられていることを意識しているのかいないのか、さつきから一度も振り返つたことがなかつた。屍骸しかいの肉を食つていたらしい犬が一匹、不意くさむらに叢の間から跳び出して慌てゝ何処かへ逃げ去つたが、父はそんなものにも眼もくれないなつた。彼が何かしら異常に緊張し、それに精神を打ち込んでいるらしい様子は、後姿からでも判断が出来た。そして、程なく滋幹は、父の足が止まったので、自分もピタリと歩みをとゞめた瞬間に、体じゆうが総毛立そうけだつものを眼前に見た。

月の光と云うものは雪が積つたと同じに、いろ／＼のものを燐りんのような色で一様に塗り潰つぶしてしまふので、滋幹も最初の一刹那せつなは、その地上に横よこたわっている妙な形をしたもの、正体が掴つかめなかつたのであるが、瞳ひとみを凝こらしているうちに、それが若い女の屍骸せがいの腐りたゞれたものであることが領うなずけて来た。若い女のものであることは、部分的に面影を残している四肢ししの肉づきや肌の色合で分つたが、長い髪の毛は皮膚ぐるみ鬘かつらのように頭蓋ずがいから脱落し、顔は押し潰つぶされたとも膨れ上つたとも見える一塊の肉のかたまりになり、腹部からは内臓が流れ出して、一面に蛆うじがうごめいていた。晝あざむを欺あざむく光の下でそう云うものを見た凄すさまじさは、凡そ想像に難くないが、滋幹は恐さに顔を背そむけることも、身動きすることも、まして声を発することも出来ず、その光景に縛りつけられたようになって立っていた。が、父はと見ると、しずかにその屍骸せがいに近寄つて、まず恭うやうやしく礼拝してから、傍わらわに置いてある蕪むしろの上うへにすわるのであつた。そして、さつき佛間でしていたように凝ぎようぜん然ぜんと端坐して、とき／＼屍骸の方を見ては又半眼に眼を閉じて沈思し出したのであつた。

その時月はひとしお研とぎすまされたように冴え、四辺の寂せき寞ぼくは前より一層深まっていた。風がおり／＼かすかに渡つて、すゞきがざわ／＼する外には、虫の音が際立きわたつてひゞくばかりであつた。そう云う中でひとり影の如く孤坐こざしている父を見ることは、何か奇怪な夢

の世界に引き入れられた感じであったが、でもあたりには鼻を衝く屍臭が瀰漫びまんしていたので、そのために滋幹は否いや応おうなしに現実の世界へ呼び戻された。

此の、滋幹の父が女の屍骸を見た場所と云うのは、何処のことか明かでないが、蓋けだしその頃の京都の街には、こう云う風な屍骸の捨て場が方々にあったのであろう。当時は痘瘡とうそうとか麻疹はしかとか云う疫癘えきれいが流行はやつて死人が多く出たりすると、一つには伝染を恐れるのと、一つには処置に困るのとで、何処と云うことなく、空地があれば病人の屍骸を運んで行って、しるしばかりに土をかけたり、藎あしで蔽おほうたりして葬くわつたものらしいので、これもそう云う場所であつたかと察さしられる。

その十

父がその屍体と相對して冥想むぎやうに耽ふけつていた間、滋幹はとある塚のうしろに蹲うずくま踞まつて息を詰めていたのであつたが、中天にあつた月がやゝ西に傾き、彼が身を隠していた一と束の卒塔婆そとばの影が地上に長く横よこたわるようになった頃に、父は漸く立ち上つて帰路に着いた。滋幹は又、来た時と同じ路を、跡を追つて行つたのであるが、彼が思いがけなく父から声を

かけられたのは、さっきの小川の橋を渡つて、すゝき原へさしかゝつた時であつた。

「和子、………和子は今夜、わしが彼処で何をしていたと思う？」

父はひとすじ路みちの途中で、今歩いて来た方へ向き直つて立ち止まり、滋幹が後から来るのを待ち構えていたのであつた。

「わしは和子が跡を附けていたのを知っていたのだよ。わしは少し考があつて、わざと和子のするようにさせていたのだ。………」

そう云つても滋幹が黙つているので、父は一段と声をやわらげ、優しみのある調子でつゞけた。「ねえ、和子、わしは和子を叱る訳ではないのだから、正直に云つて御覧。和子は今夜のわしのした事を初めから見ているのだらうね」

滋幹は、

「うん」

と頷うなずいて見せてから、

「お父さまのなさることが心配だつたものですから、………」
と、言い訳わけのつもりで附け加えた。

「和子はわしが気が狂つたとでも思つたのだね」

父は可笑おかしがるような口元をして、はっ、はっ、と力なく笑ったようではあったが、その声はあまり微かすかなので聞き取れなかった。

「和子ばかりではない、皆がそう云う風に思っているようだね。……しかしわしは氣狂いではないのだよ。わしのしていることには訳があるのだ。和子が安心するように、その訳を聞かして上げててもよいのだが、……どうだな、聞いてくれるかな。……」

そう云つて、父はそれから館やかたへ歸る途々、滋幹と並んで歩きながら次のようなことを語つて聞かしたのであつた。当時の滋幹には勿論それの大要だけでも会得えとく出来よう筈はなかつたので、彼が日記に書き留めているのは、父の語つた言葉そのまゝではなくて、後年、大人になつてからの彼の解釈が加わつているものなのであつて、それは要するに、佛家が云うところの不浄觀のことであるが、筆者も佛敎の敎理には暗いので、誤りを冒おかすことなきかくく伝え得るかどうか覺束おぼつかない。筆者は此のことで、日頃眷顧けんこを蒙こうむっている天台宗の某碩せ学きがくなどにも尋ね、参考書なども貸して戴いたのであるが、調べ出すといよゝ深奥しんおうで分りにくくなるばかりである。尤もこゝではそんなに深く説き及ぶ迄もないのであるから、たゞ順序として、物語の進行に必要な面にだけ触れて置こう。

不浄觀のことが分り易い仮名かなまじ交り文で書いてある書物は、他にもあるかも知れないが、筆

者が知っているのでは、世に慈鎮和尚の著とも云い、又勝月房慶政しやうにん上人の著とも云う「閑居の友」がある。此の書は往生伝おうじやうでんや発心集ほつしんしゅうに洩れている往生発心者の伝記、名僧智識の逸話等を集録したもので、その巻の上の、「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄観をこらす事」、「あやしのをとこ野はらにてかばねを見て心をおこす事」、「からはしかはらの女のかばねの事」、その巻の下の、「宮ばらの女房の不浄のすがたを見る事」等を読めば、不浄観と云うのがどう云うことか大凡その見当はつくのである。

今、同書に拠よつて一例を挙げると、こゝにこんな話がある。――

昔、比叡山ひえいざんの或る上人のもとに召使われている中間僧ちゆうげんそうがあつた。僧とは云うが寺男のような者で、上人に仕えていろ／＼な雑用を勤めるのであつたが、平素主人を大切にしてい、云いつけたことは一事をも違えず、まことに忠実な性質だったので、上人も少からず信頼していた。かくて月日を送るうちに、此の男が毎日夕刻になると何処かへ行つて見えなくなり、明くる朝早く帰つて来るようになった。それを知つた上人は、多分夜な／＼坂本へでも通うのであらうと思つて、内心その男を甚しく憎んだ。彼が朝帰つて来る時の様子を見ると、何となく打ち沈んでいて、人と顔を合わすのを厭いとう風があり、いつも涙ぐんでいるので、大方通う所の女が心のまゝにならないのであらう、きつとそうに違いないと、

上人を始め皆がそれにきめていた。然るに、或る時上人が使を遣つてその男の跡をつけさせると、男は西坂本（江州の坂本ではなく、比叡山の西側の山麓、即ち現在の京都市左京区一乗寺辺）を下つて蓮台野へ行くのであつた。使は合点が行かないで、何をするかと窺つてみると、彼方此方を踏み分けて行つて、云いようもなく腐りたゞれた死人の傍に寄つて、或は眼を閉じ、或は眼を開いて祈念を凝らし、たび／＼それを繰り返しつゝ声も惜しまず泣くのであつたが、夜もすがらそう云う風にして、暁の鐘の音が聞える頃に、漸く涙を押し拭うて帰るのであつた。使者は自分も感激して涙を流しながら戻つて来たので、どうであつたと上人が尋ねると、さあ、その事でございます、あの男がいつも打ち沈んでしお／＼としていましたのも道理でございます、実はこれ／＼しか／＼の次第で、夕暮になると見えなくなりますのも、そのためだったのでございます、あゝ云う貴い聖の行いをしていた人を、妄りに疑つた罪の程も恐ろしゅう存ぜられまして、と云うので、主の上人も驚いて、その後はその中間僧を敬うて、常人のようには扱わなかつた。すると或る朝、食事に粥をこしらえて持つて来たので、あたりに人がいないのを見すまして、お前は不浄観を凝らすことがあると云う噂だが、ほんとうかね、と尋ねると、どう致しまして、左様なことは学問のある偉いお方がなさることです、私がおんなこと出来る人間かどう

か、様子でもお分りでございましょう、と云うのであった。

上人が重ねて、いや、お前のことは今では皆が知っている、愚僧もかね／＼心のうちではお前を貴くも有難くも思っていたのであるから、隠さずに云つてくれるがよい、と云うと、左様ならば申しますが、と云つて、実は何事も深くは存じませぬけれども、少しばかり心得ていることがございます、と云う。定めし験があるであろうな、試しに此の粥を観じて見せよ、と云うと、男は折敷おしきを取つて粥の上に蓋ふたをして、暫時眼ざんじを閉じて観念を凝らしていたが、やがて蓋を開けると、粥かじが悉く白い虫に化していた。それを見た上人はさめ／＼と泣いて、必ず我を導き給えと、男に向つて掌たなごころを合わせた。

——以上が、「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄観をこらす事」の説話であつて、

「閑居の友」の著者は此のあとに、「いとありがたく侍りける事にこそ」と云つて、説明を加えて云うのに、愚かな者でも、塚のほとりに行つて乱れ腐つた死人のむくろを見れば観念が成じょうじゆ就じゆし易やすいと云うことは、天台大師も次第しだいぜんもん禅門と云う文に説いておられるくらいであるから、此の中間僧もそれを学んだのであろう。摩訶止観まかしかんの中には、観のことを説いて、「山河も皆不浄也、くひものきもの又不浄也、飯は白き虫の如し、衣は臭き物の皮の如し」と云つてあるが、かの中間僧の観念のいみじさは、自然と聖教の文に合致して

いるのである。又天竺てんじくの佛教比丘びくも、器物うつわものは髑髏どくろの如し、飯は虫の如し、衣は蛇くちなわの皮の如しと説き、唐土の道宣律師どうせんも、器うつわはこれ人の骨也、飯はこれ人の肉也と説いておられるのであるが、かような人々の説き給うことなどを知る筈のない無学の僧が、その教を實行していたと云うのは、何とも頼もしい限りである。人はたとい此の中間僧のような境地には至り得ない迄も、そう云う道理が分り出して来たら、五慾の思いがだん／＼に薄らいで、心の持ち方が改まるであろう。——「此のことわりを知らぬもの、こまやかなる味はひには貪慾どんよくの心も深く起り、おろそかなる味はひ落ちぶれたる衣には瞋恚しんいの思ひ浅からず、よしあしは変れども、輪廻りんねの種となることはこれ同じかるべし。(中略)それにつけてもあはれ無益に侍るべきかな、夢のうちのかりそめのこと故に、永き世に眠らんこと、辛くぞ侍るべきなど思ふべきにや」と云っている。

「あやしの男野原にてかばねを見て心をおこす事」と云うのも、大体同じ趣意の教訓を含まんだ説話であつて、或る男が野原で浅ましい女の屍骸を見て帰つてから、その形相ぎようそうが頭にこびりついて離れず、妻と相抱いて寝ながら、妻の顔をさぐり合わすと、額のありどころ、鼻のありどころ、唇のありどころ等々が、悉くその死人の相にそっくりであるように思われて、結局無常を悟るに至ると云う筋で、「止観のなかに、人の死にて身のみだるゝ

より、遂にその骨を拾ひて煙となす迄の事を説きて侍るは、見る眼も悲しう侍るぞかし、斯やうの文も暗き男のおのづからその心おこりけん事」は、猶々有難い事であると云つている。

そこで、その修行とはどう云うことをするかと云うのに、かの禅僧が坐禅する時のように独りしずかに座を組んで瞑目沈思し、一事に向つて想念を集注するのである。その一事とは、たとえば自分の身は父母の姪、衆の結果の産物であつて、本来は不浄不潔な液体から生れたものであると云うこと、大智度論の言葉を引用すれば、「身内の欲虫、人の和合する時男虫は白精、涙の如くにして出で、女虫は赤精、吐の如くにして出づ、骨髓の膏流れて此の二虫をして吐涙の如くに出でしむ」るのであつて、此の赤白の二滲の※合したものが自分の肉体であると云うことを考える。次にいよいよ生れ出る時は、むさく臭い通路から出るのであること、生れてから後も大小便をたれ流し、鼻の孔から涙汁をたらし、口から臭い息を吐き、腋の下からぬる／＼した汗を出すこと、体内には糞や尿や膿や血や膏が溜つてい、臟腑の中には汚物が充満し、いろ／＼の虫が集つていゝこと、死んでからはその屍骸を獣が噉い、鳥が啄み、四肢が分離して流れ出し、腥い悪臭が三里五里の先まで匂つて人の鼻を衝き、皮膚は赤黒となつて犬の屍骸よりも醜くなること、要するに

此の身は生れ出る前から死んだ後までも不浄であると云うことを考える。

摩訶止観と云う書には、これらの思索の順序が述べられていて、人体の不浄なる所以が種子不浄とか五種不浄とか云う風に、細かく分けて説明されているのであるが、同書は又、人が死んでからその屍骸の変化して行く過程を描くのに委曲を盡し、第一の過程を壊相とか、第二の過程を血塗相とか、第三を膿爛相のうらんそう、第四を青瘀相しよおそう、第五を噉相たんそうとか云う風に説いていて、まだこれらの相を諦観ていかんしないうちは、妄みだりに人に恋慕したり、愛着したりするけれども、もしこれらを諦観し終れば、慾心がすべて止んで、たつた今まで美しいと感じたものが、とても鼻持ちならないように思えて来る。それは恰あたも、糞を見ないうちは飯が喰えるけれども、一旦あの臭気を嗅かいたら、胸がムカ／＼して食えなくなるのと同様である、と云っている。

しかし、ひとり静坐してこう云う道理を考えたり変化の過程を想像したりするだけでは、なお十分に体得出来ない場合もあるので、時には人の屍骸の放置してある所へ出かけて行き、止観に書いてあるような現象の起るのを眼まのあたりに見たりすることも、矢張一方法とされているのであって、前掲の中間僧はそれを実践していたのである。かの僧が夜なく山を抜け出して蓮れんだい台野へ行ったように、一度や二度でなく、何度も繰り返して屍骸の変

貌するさまを觀察し、壞相や、血塗相や、膿爛相を眼に馴染ませると、しまいには一室のうちにあつて端坐瞑目したゞけで、それがまぎ／＼と見えるようになる。いや、それどころでなく、たとい衆人の眼には絶世の美人と映ずる婦人を拉し来つても、行者の眼には一箇の忌まわしい腐肉や血膿のかたまりとして映ずるようにならぬので、修行の功を試すためには左様な美人を実際に連れて来て眼の前に据えつゝ、觀念を凝らすことなどもあると云う。で、そう云う功を積んだ行者がひとたび不淨觀を行すると、生きた美人がひとり行者自身の主觀に醜惡に映ずるばかりでなく、第三者の眼にまでそう見えるようになる。か
の中間僧が、主の上人に粥を觀じて見せよと云われて觀念を凝らした時、粥が化して
白い虫の集団になつたと云うのはその意味であつて、真に不淨觀を成就すればそう云
う奇蹟を行うことさえ出来るのである。

さて、少将滋幹の日記に依れば、彼の父翁の老大納言も亦、不淨觀を行じようとしたのであつて、而も老大納言の場合は、かの失われた鶴、——声を碧雲の外に断ち、影を明
月の中に沈めた佳人の艶姿が、いつ迄も眼底を去りやらず、断腸の思いに堪えられないまゝ、
に、その幻に打ち克とうとして一念發起するに至つたことは明かであつて、その夜の父は
滋幹を相手に、まず不淨觀の説明から始めて、自分は何とかして自分に背いた人への恨み

と、恋慕の情とを忘れてしまいたい、心の奥に映っているかの人の美貌をふっしよく 払拭して、
ほんのう 煩惱を断ち切つてしまいたい、自分の行為は狂的に見えるかも知れないけれども、自分
 は今、その修行をしているのである、と、そう語つたのであつた。

「そんならお父さまは、あゝ云うものを見にいらつしやるのは今夜が始めてゝはないんで
 すね」

父の長話が一段落へ来た時に滋幹が尋ねると、父はいかにもそうだと云うようにうなず 頷いて見
 せた。父はもう数箇月も前から、折々月の明かな夜を選んで、家の者たちの寝静まつた時
 刻をうかゞい、何処と限つたことはなく、野末のすえの墓場などへ忍んで行つてひとしきり観念
 を凝らしてから、明け方にこつそり戻つていたのであつた。

「そうしてお父さまは、もう迷いがお晴れになつたんでしようか」

滋幹がそう云うと、

「いゝや」

と云つて、父は立ち止まつて、遠い山の端はの月の方へ眼をやりながらほつと息をした。

「なか／＼晴れるどころではない。不浄観を成就すると云うことは、口で云うような容易たやす
 いものではないんだよ」

それきり父は、滋幹の方から話しかけても相手にならず、何かしら考とらに囚とらわれている様子で、家に着くまで殆ど一語を発しなかった。

父のあとについて滋幹がそう云う夜歩きの供ともをしたのは、その一と夜だけであった。父は前から人目を忍んで時々そんなことをしていたと云うのであるから、恐らくその以後に於いても、なお幾度かさまよい出たことがあるに違ちがいなく、たとえばその翌日なども、夜更よふけて父がしめやかに戸を開けて出るけはいを、滋幹はそれと気づいていたけれども、父も滋幹を連れて行こうとはしなかったし、滋幹も、再び父の跡を附けようとは思わなかった。それにしても、父があの時まだ頑がん是んぜない幼童とらを捉とらえてあんな風に自分の心境を語ったのは、どう云うつもりだったのか、滋幹は後になつてもいぶかしく思う折があつたが、彼は実もつとに生涯にたゞ一度、父と二人きりでそんなにも長い時間を話し合つた訳であつた。尤も「話し合う」と云つても大部分は父がしゃべり、滋幹は聞かされていたのであつて、父の言葉の調子は、最初は何となく重々しく、少年の心を壓おさするような沈鬱しんいつ味みを帯びていたけれども、語り進むに従つて、訴こえてゞもいるような云い方になり、しまいには滋幹の思いなしか、泣きごえを出しているようにも聞えた。そして滋幹は子供心に、相手が幼童であることをも忘れて取り乱しているような父が、とても觀念を成就することなどは出来ないであ

ろう、恐らくいくら修行をしても徒勞に終るのではあるまいか、と云うような危懼を抱いたのであった。彼は、恋しい人の面影を追うて日夜懊惱おうのうしている父が、苦しさの餘り救いを佛の道に求めた経路には同情が出来たし、そう云う父を傷ましいとも気の毒とも思わないではいられなかったが、でも、ありていに云うと、父が折角美しい母の印象をそのまゝ大切に保存しようと努めないで、それをことさら忌まわしい路上の屍骸しがいに擬したりして、腐りたゞれた醜惡なものと思ひ込もうとするのには、何か、憤りに似た反抗心の湧き上るのを禁じ得なかつたのであった。實際、彼はもう少しで、

「お父さま、お願いです、私の大好きなお母さまを汚さないで下さい」

と、話の途中で幾度か叫びたくなつたのを、辛うじて忪えたのであった。

そう云うことがあつてから十箇月ばかりを経、明るく夏さいごの終りに父は此の世を去つたのであるが、最期の折には果して色慾の世界から解脱げだつしきれていたであらうか。嘗てあんなにも恋い焦こがれていたその人を、一顧いつこの価値もない腐肉の塊であると観じて、清く、貴く、豁かつぜん然と死んで行つたであらうか。それとも少年の滋幹が豫想したように、結局佛にも救われないうで、再びいとしい人の幻さいなに苛まれながら、八十翁の胸の中になお情熱の火を燃やしつゝ、息を引き取つたのであらうか。——滋幹は、父の内部の鬭争がどう云う結末を告

げたかについて確證は挙げ得ないのであるが、しかし父の死に方が決して人の羨むような安らかな往生ではなかったことから推量して、多分あの時の自分の豫想が誤まっていたようにはなかつたように思うのであつた。

いつたい、普通の人情からすれば、逃げ去つた妻を諦めきれない夫として、その妻が彼に生んでくれた一人の男の子を、今少し可愛がつてもよい筈であり、妻への愛情をその子に移すことに依つて、いくらかでも切ない思いを和やわらげようとすべきであるが、滋幹の父はそうでなかつた。彼の場合は、彼を捨て、行つた妻そのものを取り戻すのでなければ、他の何者を、たといその人の血を分けた現在の我が子を持つて来ようとも、決してそんなものに胡麻化ごまかされたり紛らされたりするのではなかつた。それほど父の母を恋うる心は純粹で、生き一本いっぽんであつた。滋幹は、父が彼にやさしく話しかけてくれた記憶を一度も持たない訳ではないが、それは必ず母のことが話題になつて来た時に限り、そうでない時の父と云うものは、凡およそ子に対して冷淡な人でしかなかつた。だが又滋幹は、子を顧みる暇のないほど、母のことで頭が一杯になつていた父であると思うと、その冷淡を少しも恨む気になれず、寧むしろそうであつてくれたことを嬉しくさえ感じるのであるが、何にしても、あの夜のことがあつてからの父は、いよ／＼子に対して冷淡になり、滋幹のことなど全く念頭にな

いように見えた。云つて見れば、いつでもじつと眼の前にある虚空こくうの一点を視詰めたきりの人のようであった。そんな訳なので滋幹は、最後の一年間ばかりの父の精神生活について、父自身からは何も聞き得なかつたのであるが、でも、父が一時止やめていた酒を再び嗜たしなむようになったこと、依然として佛間に閉じ籠とこつてはいたけれども、もうその壁には普賢ふげん菩薩ぼさつの像が見えなくなつていたこと、そして経きょうもん文もんを読む代りに、いつか又白詩を吟ずるようになっていたこと、等々には心づいていたのであつた。

その十一

筆者は、老大納言がどう云う精神状態に於いて死んだかについて、せめてもう少し委くわしい資料を得たいのであるが、何分にも滋幹の記録にはこれ以上のことを見出だせないのだ、たゞ、前後の事情から判断を下し、最後には遂に救われなかつた人として、——いとしい人の美しい幻影に打ち敗まかされ、永劫えいじょうの迷いを抱きつゝ死んで行つたのであろうと、考えるより外はない。蓋けだし此のことは、老大納言その人に取つては傷いたましい結末であつたけれども、滋幹に取つては、父が母の美しさを冒ぼう瀆とくせず死んでくれたことになるので、

何物にもまさる喜びであつたかと推量される。

かくて、老納言卒そつきよ去の翌年に左大臣時平が死に、それから約四十年の間に時平の一族が次々に滅んだことは既に記した通りであるが、天子は醍醐だいご、朱雀すざくを経て村上むらかみとなり、世の中は藤原氏や菅原氏の栄枯盛衰の外にも、いろ／＼な有為ういてんべん転変があつた。その間滋幹は、何処でどう云う風にして人となり、少将の位にまで昇進したのであるか、日記は母のことを語るに忙しくて、自分のことは閑却されているのであるが、記事の様子から想像すると、父の死の直後何年間かは、乳人めのとの許もとに引き取られて養育されていたのであろう。かの讃岐さぬきと云う老女は、後に北の方の許へ走つて本院の女房になつたことまでは分つていますが、それきり日記に現れて来ない。又滋幹の腹ちがいの兄弟たちや、彼等の母に当る人々のことは、何の交渉もなかつたのであろうか、此の日記の全篇を通じて何処にも消息は伝えられていない。しかし滋幹は、自分の胤たねちがいの弟に当る中納言敦忠あつたゞに対しては、餘よ所そながら深い親愛の情を寄せていた。彼と敦忠とは門地もんちや官位が違う上に、父同士の間にも夫人のことでいきさつがあつたことが妨げになつて、何となく双方に遠慮があり、互に餘り接近することを避けていたらしいのであるが、にも拘かゝらず滋幹は、ひそかに敦忠の人柄に好感を抱き、蔭ながらその人の幸福を祈りつゝ、常にその行動を見守つていたのであつ

た。それと云うのも、畢ひつきよう竟敦忠が母親似であったからで、中納言を見ると、遠い昔に会った母の風貌ふうぼうを想い起してなつかしさに堪えないと、滋幹は幾度か記しているのである。そして、自分の容貌が不幸にして母に似ず、父に似ていることを歎き、母が逃げ去つてからの父が、母を恋しがるばかりで自分を可愛がってくれなかったのは、自分の顔が母親似でなかったからであろう、と云い、敦忠が時平の死後も母と一緒に暮らしているのを羨み、母はあのめでたい男ぶりの敦忠をさぞいつくしんでいるであろうが、自分のような醜い顔をした子息は、たとい一緒に暮らすことが出来たところで可愛がっては貰えないであろう、母は父を嫌きらつたように、必ず自分をも嫌つたであろう、なども云っているのである。

ところで一方、滋幹の激しい思慕の対象であった母なる人、その後の夫人在原氏は、どんな風にして餘生を送っていたことであろうか。——彼女は時平に先立たれた時が二十五六歳だったであろうが、それからは若く美しい未亡人として静かな生涯を生きたのであつたか、或は又も第三第四の男を作つたのであつたか。嘗かつて老大納言の妻として、平へい中じゆうと云う情人を持つていた女性であつてみれば、少くとも人目を忍んで誰かと甘いさゝやきを交かわすぐらいなことがあつても不思議はないが、そう云うことも今はすべて知られていな

い。父よりも母を偏愛した滋幹は、たとい母のことについて悪い風聞があつたとしても、そんなことを記す訳はないが、こゝでは暫く彼の日記を信用して、母は左大臣の遺れ形見の敦忠の成長を楽しみに、佗びしくつゝましく後家を通して行つたのであるとしておこう。それにしても、前の夫の老納言が彼女に焦れつゝ苦しみ悶えて死んだことや、平中が彼女に背かれた悔し紛れに侍従の君を追い廻して、とう／＼そのために命を落す羽目になつたことなどを聞いては、どんな感想を持ったことであろうか。左大臣が権勢を恣にしていた間こそ、彼女も本院の北の方として多くの人の崇敬を集め、羨望の的となつていたであらうが、左大臣の死後は、恐らく昔日の栄華も一朝の夢と化して、萬事に不如意を啣つ身の上となつたであらう。彼女に凄じい熱情を注いだ男たちが次々に死に、左大臣の一家一門が菅丞相の崇りに依つて一人々々斃れ、最後にいと子の敦忠までが取られて行つたのを見ては、彼女もそゞろに無常の風が身に沁みたであらう。

だが、滋幹は、そんなに母と云うものに憧れつゞけながら、どうして彼女に近寄ろうとしなかつたのであろうか。左大臣の存生中は兎も角も、大臣が卒去してからは、逢うのに格別の支障もないように思えるけれども、敦忠をさえ避けるようにしていたとすれば、まして母を訪ふことなどは、彼の地位として差控えなければならなかつたのであろうか。それ

について滋幹の日記は云う、——自分は十一二歳の頃、幾度か母に逢いたいと云う望みを洩らしたことがあったが、世間のことはそう簡単に行くものではありませぬ、お母さまはもう餘所よそのお家の人なのですと、そのつど乳人めのとに戒められた。お母さまはもうあなた様のお母さまではなくて、われ／＼よりは身分の高いお方のお母さまなのですと、乳人はそれも云つて聞かした。——と。滋幹は又云う、——やがて自分は成人し、乳人の膝下しつかを離れて一人立ちするようになり、何事も自分で判断して処理する年齢に達したが、そうなつてからはいよく乳人の云つた言葉が本当であつたことが分つて、なか／＼母に逢う機会などは得られなかつた。自分は年が行けば行くほど、母と自分との距離が遠くなるのを感じた。たとい夫の左大臣は亡くなられても、矢張母は自分などの手の届かない雲の上の人、高貴の家の後室こうしつとして多くの人に册かしずかれつゝ、立派な居館の玉簾たまだれの奥に朝夕を過しているものと想像された。そう考えると、まことに乳人の云つた通り、もうその人は自分などが「母」と呼ぶべき人ではなかつた。悲しいことだが、自分の「母」は既に此の世にいないものと思わなければいけないのであつた。——と。蓋しけだ、それでなくても、自分は父の老大納言と共に母に見限られたのであると思つていた滋幹は、母に対して一種の僻ひがみを抱いていたらしいので、そんなことが一層母との間を心理的に遠ざける因となつ

たのでもあろう。

そうこうするうち、天慶六年三月に敦忠が死に、それから程なく母は出家したのであったが、その噂は滋幹の耳にも這入らない筈はなかった。今迄滋幹と母との仲を隔て、いた障壁の一つは、敦忠と云うものゝ存在であったと察しられるが、今やその人が逝去せいぎよしたとすれば、はか 図らずもこゝに機会は廻めぐつて来た訳で、もし滋幹が欲するならば、母に逢う道は容易に見出されたであらう。嘗てその道を阻はんでいた浮世の義理や掟おきてなどは、今となつては全く除かれていたであらうし、まして尼あまとなつた母は、西坂本の敦忠の山荘のほとりに庵いおりを結んで暮らしていたので、そう云う消息も滋幹は、風のたよりに聞いていたに違ひなかつた。もはや母の身の周まわりには監視の眼もなく、草の庵の柴の戸ぼそは近づく者を拒まないで、誰に向つても開放されている筈であつた。とすれば、定めて滋幹も心が動いたことであろうが、それでも猶なほしばらくは決心しかねて、ためらっていたらしい様子が見える。それは前に云つたような僻ひがみだの含羞はにかみだの、せいもあるが、その外にも、滋幹には別に何か、現実の母に会うことを恐れる気持があつたのではなからうか。

思うに、昔父の老大納言が不浄観ぎじょうを行じた時に、母の幻影ぼうとくの冒流ぼうりゅうされることを歎いて父を恨んだ滋幹、——四十年來その人と隔絶しながら、おぼろげな記憶の中にある面影を

理想的なものに作り上げて、それを胸奥に秘めて来た滋幹は、いつ迄も母を幼い折に見た姿のまゝで、思慕していたかつたであろう。然るに、それから四十年の星霜を経、さま／＼な移り変りの末に世捨て人となつて佛に仕えている現在の母は、どんな風になつてゐるであらうか。滋幹の記憶する母は、二十一二歳の髪の高い頬の豊かな貴婦人であるのに、西坂本の庵室あんしつに隠栖いんせいする尼僧の母は、すでに六十歳を越した老嫗ろうおうであることを思う時、滋幹の心は自然冷めた現実の前に出ることを尻込みしなかつたであらうか。彼にして見れば、永久に昔の面影を抱きしめて、あの時に聞いたやさしい声音こわねや、甘い薫物ものの香や、腕の上を撫なで、行つた筆の穂先の感触や、そう云うさま／＼な回想をなつかしみつゝ生きて行く方が、なまじ幻滅の苦杯を嘗なめさせられるより、遙かに望ましいことのように思えたでもあらうか。滋幹自身は格別そう云う告白をしている訳ではないが、母が尼となつてから後、なお数年の歳月が空むなしく過ぎたのには、多分以上のような事情があつたのではなからうかと、筆者は推測するのである。

出家した滋幹の母が住んでいた西坂本、即ち今の京都市左京区一乗寺のあたりに敦忠の山荘があつたことは、拾遺集しゅういししゅう卷八そいう雑上の部伊勢の歌に、「権中納言敦忠が西坂本の山庄の滝の岩にかきつけ侍りける」として、

音羽川せき入れて落す滝つせに

人のこゝろの見えもするかな

とあるのに徴して明かで、その頃の京都の市中から馬を走らせて行く分には、左程の道のりではなかつたであろう。恰も当時滋幹は、しばく叡山の横川に定心房良源を訪ねて佛の教を聴いていたので、彼がもしその帰るさに道を雲母坂に取って下山したならば、つい母の住む麓の里へ出られたのであつた。そして実際、彼は折々山の上から西坂本の空を眺めて恋々としたこともあり、足が知らず識らずその方へ向きかけたこともあつたが、いつも自分で自分を制して、ことさら外の道を選ぶようにしていたのであつた。が、それから又何年かを経た年の春であつた。横川の良源の房に一宿した滋幹は、翌日、日もたけなわの頃に房を出て、峰道から西塔、講堂を過ぎて根本中堂の四つ辻へ来た時、ふと、急に心が惹かれるようになって、雲母坂の方へ道を取つた。「急に」と云うのは、その時ゆくりなくそんな氣を起したと云うのではなくて、前から一度その道を行こうくと思いつゝ、何となくそれを引き止めるものがあつて、果たさずにいたのに、その日は春も弥生半ばで、霞の罩めた遠山のけしき、ところ／＼の谷あいの花の雲などに誘われて、つうか／＼と逍遙してみたくなつたのであつた。そして、それには外に此れと云う目的

があつたのではなかつたけれども、そつちの道を下つて行けば西坂本へ出るのであるから、母の住む里はどんな所か、それとなく様子を探つておきたい、ぐらいなことは念頭にない訳でもなかつた。

滋幹が坂路へかゝつたのは、日がよう／＼西に傾きかけた頃で、水呑峠の地藏堂のあたりを過ぎ、音羽の滝のひゞきを耳にしながら麓に着いた時分には、いつしか空になまめかしいおぼろ月が輝き初めていた。かの壬生忠岑の歌に、

おちたぎつ滝の水みなかみ 上年みなかみつもり

老いにけらしな黒きすぢなし

とあるのは、此の滝を詠よんだのであると云うが、滝の末が音羽川と云うひとすじの流れになつており、道はその川の岸に沿うて下つているので、何心なく辿たどつて行くと、低い籬まがきを結ゆいめぐらした構えの向うに、前栽せんざいの木立こだちを透すかして別荘風の家の見える所へ出た。滋幹は、垣根が朽ちて倒れているのを跨またぎ越え、構えの内へ二た足三足這入つて行つて、暫くあたりを窺つていたが、森閑しんかんとして人の住んでいそうなけはいもない。東の方には比叡の峰つゞきの丘が聳そびえ、西の方がだら／＼と緩ゆるやかな斜面になつていゝ地勢を占めて、池を掘り、石を据え、築山つきやまを作り、遣り水やみずを引きなどした庭の趣は、むかしはどんなに

か結構を極めていたのであろうが、今は凄しく荒れ果て、地面には雑草が生いしげり、木々の幹には蔦葛の蔓が網のように絡み着いているのであった。

此のあたりは山に近い上に木立が深いので日が遠く、まして黄昏時なので、冷え／＼とした空気が身に沁むのであったが、去年の落葉の積っているのを掻き分けながら、母屋と覚しい建物の所まで行つて見ると、そこも今は廃屋になつてゐるらしく、格子が固く鎖してあつて、夕ぐれであるのに一点の灯も洩れてはいない。階に腰をおろして疲れを休めていた滋幹は、妻戸の蝶番が損じて扉が一枚外れかゝつてゐるのに気がつき、床上上つて中を覗いて見たけれども、内部は真つ暗で、黴臭い湿気の匂がするばかりである。滋幹は、以前は誰の住まいであつたのかしらんと思ひ、或はこゝが亡き中納言の山荘ではなかつたらうか、と云うことに心づいた。いかさま、中納言が逝去してからは誰も住む人がなくて、朽ちるにまかせてあるのであろうか。そうだとすれば、嘗て中納言と共に此の山荘に起き臥し、中納言の死後も何処か此の近くに庵を結んでいたと云う母も、今は恐らく此の地に住んでいないのではあるまいか。いかに世を捨てたからと云つて、女の身で此のような淋しい所に暮らしていらはしないであろう。……滋幹はそんなことを考えながら、耳の奥がじーんとするような静かさの中になお暫く憩うていた。その間にも四辺の

暗さと寂寥せきりようさはひしくと加わつて来るのであつたが、一度は母が住んでいた跡かと思えば、矢張直ぐには立ち去りかねるのであつた。

と、その時、鼻ふくろつなの啼く声に交つて、微かすかにせゝらぎの音が聞えるようなので、その音をたよりに、彼は漸ようやく身を起して遣り水の流れに沿いながら、池を廻り、築山を越え、植込みの間をくゞつて行くと、果して崖がけに一条の滝が懸かつていた。崖の高さは七八尺もあるであろうか、急な断崖ではなくて、なだらかな勾こうばい配のところ／＼に形の面白い石を配置し、落ちて来る水がそれらの間を屈くつきよく曲しつゝ、白泡しろあわ立って流れるように作られてい、崖の上からは楓かえてと松が参差しんしと枝をさしかわしながら滝の面へ蔽おいかぶさっているのであるが、蓋けだし此の滝は、さつきの音羽川の水を導いて来て、こゝへ堰せき入れたのであろう。滋幹はそう心づくつと、あの、「音羽川せき入れておとす」と云う伊勢の歌が胸に浮かんだ。なるほど、此の歌にある「滝つせ」は、此の流れを詠んだものであることは明かで、此の山荘が亡き中納言べつなごの別業べつごうの跡であることは、今は疑いを入れないのであつた。

滋幹は、黄昏の色が又一段と濃さを増して、水の面さえ見分けにくくなつて来たので、こゝらあたりで引き返そうかと思ひながら、なお何となく心残りが感じられるまゝに、川瀬の石を跳び越え、いつか滝の落ち口より上の方へ登つて行つた。もうその辺は構かまえの外

であるらしく、泉石のたゞずまいも人為的な庭園の風情はなくて、次第に殺風景な山路になつていたのであつたが、ふと向うを見ると、たにがわ溪川の岸の崖の上に、一本の大きな桜が、周囲にたゞよう夕闇を弾き返すようにして、爛漫と咲いていたのであつた。「見る人もなくてちりぬる奥山の」と云う貫之の歌は紅葉を詠じたものだけれども、かゝる時、かゝる谷あいには、人知れず春を誇つている花も亦、「夜の錦」であることに変りはない。恰もそれは、路より少し高い所に生えているので、その一本だけが、ひとり離れて聳えつゝ傘のように枝をひろげ、その立っている周辺を艶麗なほの明るさで照らしているのであつた。誰でも経験することであるが、人通りのない暗い夜路などを行く時、たまゝ美しい妙齡みょうれいの女の一人歩きをしているのに出遇うと、男の人に出遇つたよりも却つて無気味な恐怖に襲われる。それと同じに、こう云う無人の境にあつて静かに咲き満ちている此の夕桜には、何か魔物めいた妖麗さが附き纏つていふように思えて、彼は我が眼を疑いながら、左右なく近寄ろうともせず、遠くから眺め渡していた。桜のある崖は、それが殆どひとかたまりの大きな岩の苔蒸したもので、川のおもてから一丈程抽んでいるのであるが、ひとすじの細いく清水が、何処からか出て来て、その崖の下をめぐつて、下の溪川へ流れ落ちてい、崖の中途から一と叢の山吹の花が、清水の方へしなだれかゝつているのであ

る。でも、そう云えばさつきから餘程の時間が過ぎているのに、滋幹のイんでいる所から、向うのこま／＼とした景色がこんなに鮮かに見えるのは、——花が雪あかりのような作用をして、あたりの物象を暗まぎれから浮き上らせているのであろうか、——と、ちよつと滋幹はそんな気がしたが、それは花のあかりではなくて、花の上の空にかゝつた月が、今しも光を増して来たのであつた。土の上はしつとりと湿つていて、空氣の肌ざわりはつめたいのだけれども、空は弥生のもらしくうつすらと曇つて、朧々と霞んだ月が花の雲を透して照つているので、その夕桜のほの匂う谷あいの一郭が、幻じみた光線の中にあるのであつた。

嘗て滋幹は幼少の折に、父の跡をつけて野路を歩き、青白い月光の下で凄惨な場面を目撃したことがあつたが、あれは秋の真夜中の鋭く冴えた月であつて、今日のようなどんよりした、綿のように柔かく生暖かい月ではなかつた。あの時の月は地上にある微細な極小物までも照らし出して、屍骸の腸にうごめいている蛆の一匹々々をも分明に識別させたのであつたが、今宵の月はそこらにあるものを、たとえば糸のような清水の流れ、風もないのに散りかゝる桜の一片二片、山吹の花の黄色などを、あるがまゝに見せていながら、それらのすべてを幻燈の絵のようにぼうつとした線で縁取つていて、何か現実ばなれのし

た、蜃気楼しんきろうのようにほんの一時空中に描き出された、眼をしばだくと消え失せてしま
う世界のように感じさせる。……………

そんな不思議な、特殊な明るさの中のことであるから、いつからそこにそう云うものがあ
ったのか判然しないのであるが、やがて滋幹は全く思いがけない或るもの、——何か白
いふわ／＼したものが、その桜の木の下でゆらめいているのに眼が留まった。一杯に花を
つけた枝の一つが、ついその上あたりまで垂れ下っているので、最初はそれに見紛まごうて分
りにくかったのであるが、花にしては餘りに大きく白いふわ／＼したものは、或は彼が心
つく前からそこにひらめいていたのかも知れなかった。実を云うと滋幹は、それに眼を留
めてから間もなく、それが非常に小柄な僧侶そうりよ、——その背の低さと肩の細さから判断
して恐らくは尼僧、——と推定される人物の、桜の幹に寄り添たぐうてゐるのである
こと、そしてその尼——かも知れない人は、年老いた僧がしば／＼防寒用に用いるあの
白い絹の帽子を、頭からすっぽり被かぶつていたので、それがあゝ云う風にゆらめいているの
であることに、大気がついていたのであつたが、それでもそうと気づいた途端に、いや
／＼、これは夢なのだ、こんな所にどうして尼などがあるものか、自分は夢を見ているの
か、そうでなければあの魔物じみた夕桜の妖精ようせいが現れたのだ、……………と、そんな風に、

内心自分の視覚の世界を否定しようとするものがあつて、確かに我が眼で見つゝあるものを故意に信じまいとしていたのであつた。

でも、彼がしきりに否定しようとするにも拘らず、月の面を蔽うていた雲の羅が少しずつ剥がれて行くに従い、だん／＼とその人影は刻明になつて来て、半信半疑であつたものが、今は尼であることに紛れもなかつた。彼女が被つてゐる帽子は、ちようど後世のお高祖頭こそぞ巾きんのように首の全部を覆い隠して、肩の上まで垂れてゐるので、顔はこゝからは分らないけれども、しよんぼりたゝずいで空の方を仰いでゐるのは、花に見惚れてゐるのであろうか、花の上にある月にあこがれてゐるのであろうか。……と、尼はずかに花の下を去つて、その崖を下り始めた。そして清水のほとりに来て身をかゞめながら、手をさしのべて山吹の枝を折ろうとするのであつた。

尼がそうしてゐる間に、滋幹またも亦我知らず歩みを運んでゐた。彼が出来ただけ足音を忍ばせながら、そうつとうしろに近寄つて行くと、尼は手折つた山吹を持つて立ち上り、又崖の方へ引き返そうとするところであつた。いかさま、こゝへ来て見ると、その崖の上の苔こけの間に微かなひとすじの坂路があつて、そこを登り詰めたあたりに傾きかゝつた小さな門が建つてゐるのは、多分その奥が庵室あんしつになつてゐるのであろう。

「もし、……………」

身近に人のけはいがするのに驚いた尼の、はつと此方を振り返った時に、滋幹は何かの力で背後から突かれたように尼の方へのめり出ていた。

「もし、……………ひよつとしたらあなた様は、故中納言殿の母君ではいらつしやいませんか」と、滋幹は吃りながら云った。

「世にある時は仰おつしやる通りの者でございましたが、……………あなた様は」

「わたくしは、……………わたくしは、……………故大納言の遺わすれ形がたみ身、滋幹でございます」
そして彼は、一度に堰せきが切れたように、

「お母さま！」

と、突然云った。尼は大きな体の男がいきなり馳はせ寄つてしがみ着いたのに、よろ／＼としながら辛かろうじて路かろばたの岩に腰をおろした。

「お母さま」

と、滋幹はもう一度云った。彼は地上ひびますに跪ひざまずいて、下から母を見上げ、彼女の膝ひざに靠もたれかゝるような姿勢を取った。白い帽子の奥にある母の顔は、花を透かして来る月あかりに暈ぼかされて、可愛く、小さく、圓光を背負おっているように見えた。四十年前の春の日に、几帳きちよう

のかげで抱かれた時の記憶が、今歴々と蘇よみがえ生がえつて来、一瞬にして彼は自分が六七歳の幼童になった気がした。彼は夢中で母の手にある山吹の枝を払い除けながら、もつとくく自分の顔を母の顔に近寄せた。そして、その墨すみ染ぞめの袖に沁みている香こうの匂においに、遠い昔の移うつり香がを再び想い起しながら、まるで甘えているように、母の袂たもとで涙をあまたくび押し拭ぬぐつた。

青空文庫情報

底本：「少将滋幹の母」中公文庫、中央公論新社

2006（平成18）年3月25日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十六巻」中央公論社

1982（昭和57）年8月25日

初出：「毎日新聞」毎日新聞社

1949（昭和24）年11月16日～1950（昭和25）年2月

※表題は底本では、「少将一滋幹《しげもと》の母」となっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年2月28日作成

2017年4月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少将滋幹の母

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>